財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団報告書第442集

利根郡川場村

西川原古墳群

村道生品秋塚線道路改良関連事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2008

川場村
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

西川原古墳群

村道生品秋塚線道路改良関連事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇〇八

川場村
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

利根郡川場村

西川原古墳群

村道生品秋塚線道路改良関連事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2008

川　　場　　村
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

B区１号古墳石室

B区１号古墳石室出土遺物

序

西川原古墳群は群馬県の北部、武尊山の麓、利根郡川場村大字生品に所在し、本年度の９月から10月に村道生品秋塚線の道路工事に先立って発掘調査された遺跡です。

発掘調査は川場村から委託を受け財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施し、調査後すぐに整理事業を実施しました。今回の発掘調査では縄文時代から中近世にかけての遺構・遺物が発見されました。特に古墳時代では７世紀の小型円墳から象嵌が施された大刀鍔をはじめ小刀や鏃、金環などが出土しており、周辺に所在する奈良古墳群や秋塚古墳群などとともに古墳時代のこの地域を考える上で重要な資料となるものであります。

平安時代では竪穴建物が発掘調査されましたが、今まで集落の立地としては想定されていないところでした。このような調査成果は川場村の古代を考える上ではたいへん貴重な資料であります。

こうした発掘調査の成果は川場村をはじめ利根郡の古代史解明をはじめ郷土史学習においても大いに役立つものと確信しております。

最後に川場村、川場村教育委員会、群馬県教育委員会文化課、および地元の皆様には発掘調査から報告書刊行まで終始ご協力を賜ました。ここに記して感謝申し上げますとともに本報告書が歴史研究の基本資料として広く活用されることを願い序といたします。

平成20年２月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
理　事　長　　高　橋　勇　夫

例　　言

1．本書は平成19年度村道生品秋塚線改良関連事業に伴う西川原古墳群埋蔵文化財発掘調査報告書である。
遺跡名については群馬県と群馬県教育委員会文化課と川場村教育委員会との協議により決定している。

2．発掘調査地点の所在地は下記の通りである。
利根郡川場村大字生品字西川原2145-3、2148-1、2149、2178-2、2206-2

3．事業主体　川場村

4．調査主体　財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

5．調査期間　2007(平成19)年９月18日～10月17日

6．調査組織　管理指導　高橋勇夫、木村裕紀、津金沢吉茂、西田健彦、萩原　勉、
事務担当　国定　均、笠原秀樹、石井　清、須田朋子、矢島一美、斉藤陽子、斉藤恵利子、
柳岡良宏、今井もと子、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、若田　誠、武藤秀典
調査担当　神谷佳明、高井佳弘、田村邦宏

7．整理期間　2007(平成19)年10月１日～10月31日

8．整理組織　管理指導　高橋勇夫、木村裕紀、津金沢吉茂、佐藤明人、萩原　勉、
事務担当　大木紳一郎、国定　均、笠原秀樹、石井　清、須田朋子、矢島一美、斉藤陽子、
斉藤恵利子、柳岡良宏、今井もと子、狩野真子、若田　誠、佐藤美佐子、本間久美子、
北原かおり、武藤秀典
整理担当　神谷佳明

9．報告書作成者　編集責任　神谷佳明
本文執筆　第１章第１節　田村公夫、第５章　楢崎修一郎、前記以外　神谷佳明
遺構写真撮影　発掘調査担当者、遺物写真撮影　佐藤元彦
遺物観察　縄文土器　原　雅信、他　神谷佳明
保存処理　関　邦一、小材浩一、森田智子、津久井桂一、多田ひさ子
整理補助　千代谷和子、小林恵美子、阿久津久子、町田礼子、笛木広美
遺物機械実測　田中精子、福島瑞希

10. 調査協力　発掘調査、整理作業にあたり川場村、川場村教育委員会、沼田市教育委員会、群馬県教育委員会、地元生品地区など関係機関をはじめ多くの方々からご協力、ご指導、ご教示を受けた。また、発掘調査では地元川場村や沼田市をはじめ多くの方々に従事していただいた。ここに感謝の意を表する次第であります。

11. 遺物および発掘調査の記録類は利根郡川場村教育委員会にて保管している。

凡　　例

1．西川原古墳群の発掘調査は地点が離れた２カ所を行ったため遺構NO.はそれぞれの調査区の遺構種ごとにNO.１より付与した。

2．挿図中の方位は座標北を指している。また、座標値は世界測地系を表示している。

3．本文中・挿図中で使用した略称は下記のとおりである。

Hr-FP　榛名二ツ岳軽石　榛名二ツ岳が６世紀前半に噴火したとき噴出した軽石

挿図　「土」は土坑の略

4．挿図中の遺構図の縮尺は下記のとおりである。遺構図についてはここにスケールを貼付した。

全体図　1/100　古墳　1/40～1/80　竪穴建物　廃棄・掘方平面、断面　1/60　カマド　1/60

壇　1/80　土坑　1/40

5．挿図中の遺構図の縮尺は下記のとおりである。

土器　１/３　石器　１/２　金属器　１/２・１/３　その他１/３以外の縮尺で掲載したものは遺物NO.の後に（ ）で縮尺を表記した。

6．遺構図中に使用した記号はそれぞれの挿図中に凡例で表示してある。また、土層断面中に使用した斜線スクリーントーンは礫を表している。

7．挿図中に使用した地形図は下記のとおりである。

国土地理院　1/200,000　昭和58年横山衡器製作所創業100周年調製

国土地理院　1/50,000「沼田」平成15年発行、「追貝」平成２年発行

国土地理院　1/25,000「沼田」昭和53年発行、「後閑」昭和54年発行

群馬県沼田土木事務所一般県道冨士山横塚線「利根郡川場村生品地内」現況図　1/500

8．遺物観察表ではスペースの関係で語彙を下記のように省略している。

出土位置　＋数値は床面からの高さを表記している。

計測値　口　口径、底　底径、高　器高、鍔　羽釜鍔部径、頸　頸部径　なお、単位はcm(重さはｇ)である。

9．土層観察注記で土層色調および表記方法は農林水産省農林水産技術会議監修、財団法人日本色彩研究所色票監修「新版　標準土色帳」を参考にした。

10．遺物観察表での土器色調は農林水産省農林水産技術会議監修、財団法人日本色彩研究所　色票監修「新版標準土色帳」を参考にした。

11．遺物写真図版では一部語彙を省略している。省略した語彙は下記のとおりである。

縄文時代～弥生時代遺構外出土遺物　縄文・弥生遺構外　中世・近世遺構外出土遺物　中近世遺構外

12．本報告書では今まで地表面を円形や方形に掘りくぼめ炉、カマドを設けている遺構を「竪穴住居」、「竪穴式住居」などと慣用的に使用してきたが、近年1992年渡辺修一「『竪穴建物』か『竪穴住居』か」『研究連絡誌』34号(財)千葉県文化財センター、1994年関和彦「竪穴『建物』論の提唱」『日本古代社会生活史の研究』校倉書房によって『竪穴建物』の用語が提唱されていることや掘立柱建物に対応する用語としても適切と考えるので本文中は「竪穴建物」で統一した。なお、周辺の調査遺跡表中では各報告書で使用している用語をそのまま使用した。

目　　次

序
例　　言
凡　　例
目　　次
挿図目次・表目次・図版目次

Ⅰ　調査に至る経緯・経過 …… 1
　1．調査に至る経緯 …… 2
　2．調査の経過 …… 4
Ⅱ　遺跡地の環境 …… 6
　1．地理的環境 …… 6
　2．歴史的環境 …… 7
Ⅲ　調査の方法 …… 12
　1．調査区の設定 …… 12
　2．調査の手順 …… 12
　3．遺跡地の基本層序 …… 12
Ⅳ　検出した遺構と出土した遺物 …… 13
　1．概要 …… 13
　2．縄文時代～弥生時代 …… 17
　　（1）土坑・落とし穴 …… 17
　　（2）遺構外出土遺物 …… 18
　3．古墳時代 …… 19
　　（1）古墳・墓坑 …… 19
　4．平安時代 …… 28
　　（1）竪穴建物 …… 28
　　（2）土坑 …… 51
　　（3）遺構外出土遺物 …… 53
　5．中世・近世 …… 53
　　（1）壇 …… 53
　　（2）土坑 …… 55
　　（3）遺構外出土遺物 …… 57
Ⅴ　西川原古墳群出土の馬歯・馬骨 …… 58
Ⅵ　調査の成果と課題 …… 60

挿図目次

図 NO.　キャプション……頁
１図　遺跡位置図(1/200,000) ……1
２図　遺跡位置図(1/25,000) ……3
３図　発掘調査区図(1/2,000) ……5
４図　川場村地質図……6
５図　周辺の調査遺跡図(1/25,000) ……9
６図　川場村の縄文土器・石器分布図(1/100,000) ……10
７図　川場村の古墳と弥生土器・土師器分布図(1/50,000) ……11
８図　遺跡地土層堆積模式図……12
９図　Ｂ区発掘調査前現況図……13
10 図　Ａ区発掘調査全体図 ……14
11 図　Ｂ区発掘調査全体図 ……15・16
12 図　Ａ区９号土坑平面図・断面図・出土遺物図 ……17
13 図　縄文時代～弥生時代遺構外出土遺物図 ……18
14 図　Ｂ区１号古墳全体図､周堀遺物出土詳細図､周堀断面図 ……21
15 図　Ｂ区１号古墳石室平面図、断面図、壁面図 ……22
16 図　Ｂ区１号古墳石室遺物出土状態図 ……23
17 図　Ｂ区１号古墳石室舗石状態図 ……23
18 図　Ｂ区１号古墳出土遺物図（１）……23
19 図　Ｂ区１号古墳出土遺物図（２）……24
20 図　Ｂ区１号古墳出土遺物図（３）……25
21 図　Ｂ区１号古墳出土遺物図（４）……26
22 図　Ｂ区４号土坑平面図・断面図（１）……27
23 図　Ｂ区４号土坑平面図・断面図（２）……28
24 図　Ｂ区１号竪穴建物平面図・断面図 ……29
25 図　Ｂ区１号竪穴建物掘方平面図・断面図 ……30
26 図　Ｂ区１号竪穴建物カマド平面図・断面図 ……30
27 図　Ｂ区１号竪穴建物出土遺物図（１）……31
28 図　Ｂ区１号竪穴建物出土遺物図（２）……32
29 図　Ｂ区２号竪穴建物平面図・断面図 ……33
30 図　Ｂ区２号竪穴建物掘方平面図・断面図 ……34
31 図　Ｂ区２号竪穴建物カマド平面図・断面図 ……35
32 図　Ｂ区２号竪穴建物出土遺物図（１）……35
33 図　Ｂ区２号竪穴建物出土遺物図（２）……36
34 図　Ｂ区３号竪穴建物平面図・断面図 ……38
35 図　Ｂ区３号竪穴建物掘方平面図・断面図 ……39
36 図　Ｂ区３号竪穴建物カマド平面図・断面図（１）……40
37 図　Ｂ区３号竪穴建物カマド平面図・断面図（２）……41
38 図　Ｂ区３号竪穴建物出土遺物図（１）……41
39 図　Ｂ区３号竪穴建物出土遺物図（２）……42
40 図　Ｂ区３号竪穴建物出土遺物図（３）……43
41 図　Ｂ区４号竪穴建物平面図・断面図 ……45
42 図　Ｂ区４号竪穴建物掘方平面図・断面図 ……46
43 図　Ｂ区４号竪穴建物カマド平面図・断面図 ……46
44 図　Ｂ区４号竪穴建物出土遺物図（１）……47
45 図　Ｂ区４号竪穴建物出土遺物図（２）……48
46 図　Ｂ区５号竪穴建物平面図・断面図 ……50
47 図　Ｂ区５号竪穴建物掘方平面図 ……50
48 図　Ｂ区５号竪穴建物出土遺物図 ……50
49 図　Ｂ区１号・２号・３号土坑平面図・断面図・出土遺物図 ……52
50 図　平安時代遺構外出土遺物図 ……53
51 図　Ａ区壇平面図・断面図 ……54
52 図　Ａ区壇出土遺物図 ……54
53 図　Ａ区１号～６号土坑平面図・断面図 ……55
54 図　Ａ区７号・８号、10 号～ 16 号土坑平面図・断面図 ……56
55 図　中世・近世遺構外出土遺物図 ……57
56 図　馬歯・馬骨の出土位置 ……58
57 図　馬歯・馬骨の出土状況復元図(南から見た図) ……58
58 図　西川原古墳群出土馬歯出土部位図 ……59
59 図　生品西浦遺跡Ａ区１号古墳出土土器 ……61
60 図　古代利根郡の推定郷域 ……62

表　目次

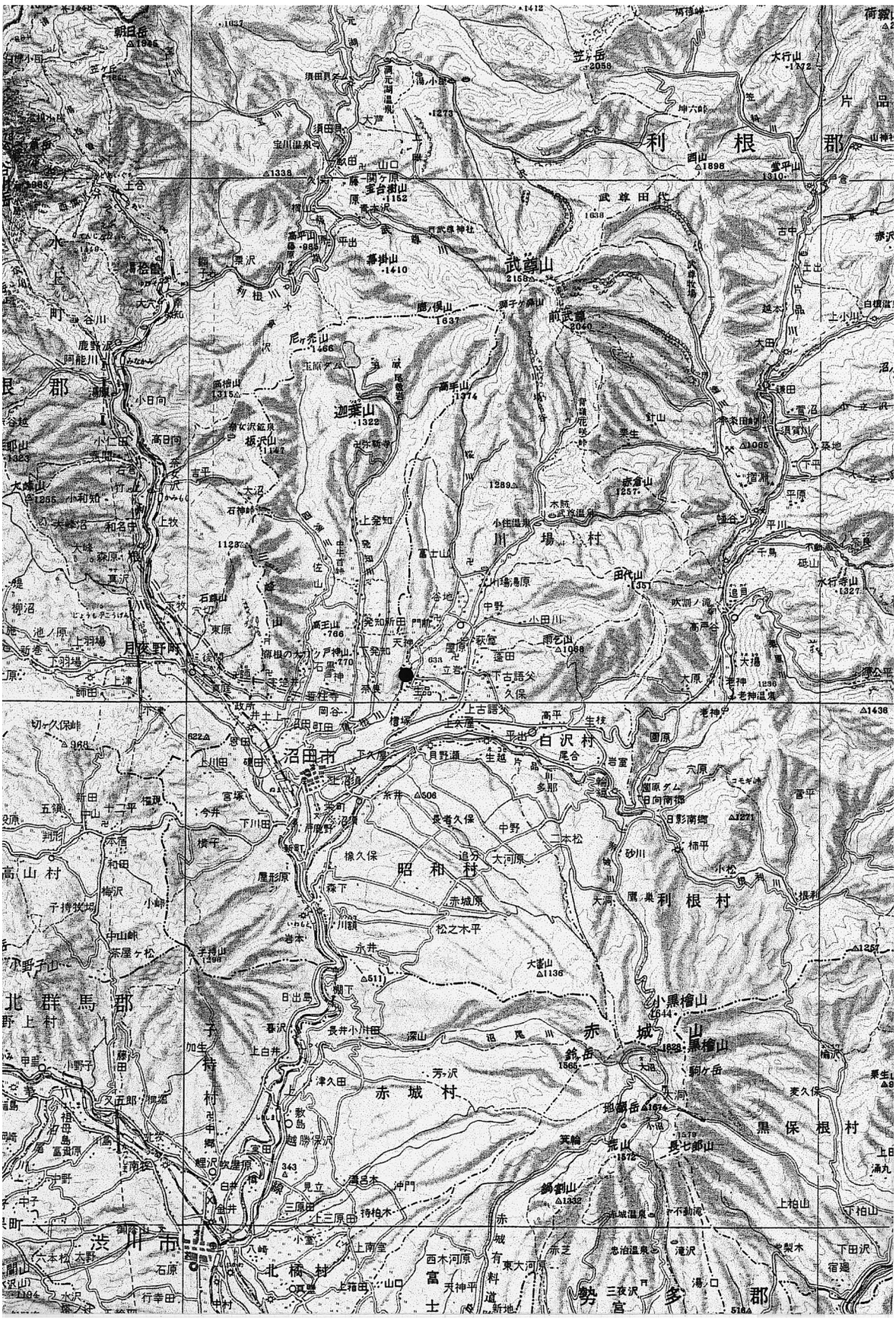
表 NO.　表　題　目……頁
１表　周辺の調査遺跡概要……8
２表　中世・近世土坑一覧……55
３表　西川原古墳群Ｂ区１号古墳周堀出土馬歯計測値……59
遺物観察表
Ａ区９号土坑出土遺物……17
縄文時代～弥生時代遺構外出土遺物……19
Ｂ区１号古墳出土遺物……27
Ｂ区１号竪穴建物出土遺物……32
Ｂ区２号竪穴建物出土遺物……37
Ｂ区３号竪穴建物出土遺物……44
Ｂ区４号竪穴建物出土遺物……49
Ｂ区５号竪穴建物出土遺物……51
平安時代土坑出土遺物……53
平安時代遺構外出土遺物……53
Ａ区壇出土遺物……55
中世・近世遺構外出土遺物……57

図版目次

ＰＬNO.　キャプション　方向
ＰＬ１　Ａ区　全景　南から
Ａ区　全景　北から
ＰＬ２　Ｂ区　全景　東南から
Ｂ区　全景　南から
Ａ区９号土坑　東南から
Ａ区９号土坑　底面状態　東南から
Ａ区９号土坑　土層断面　東南から
ＰＬNO.　キャプション　方向
ＰＬ３　Ｂ区１号古墳　調査前　東から
Ｂ区１号古墳　調査前　東から
Ｂ区１号古墳　表土除去後　南から
Ｂ区１号古墳　表土除去後　東から
Ｂ区１号古墳　全景　南から
ＰＬ４　Ｂ区１号古墳　石室全景　南から
Ｂ区１号古墳　石室全景　南から

ＰＬNO.	キャプション　方向
	Ｂ区１号古墳　石室埋没状態　東から
	Ｂ区１号古墳　石室埋没状態　近接
	Ｂ区１号古墳　石室遺物出土状態①　南から
	Ｂ区１号古墳　石室遺物出土状態②　近接
	Ｂ区１号古墳　石室遺物出土状態③　近接
	Ｂ区１号古墳　石室遺物出土状態④　近接
ＰＬ５	Ｂ区１号古墳　底面玉砂利敷設状態　北から
	Ｂ区１号古墳　石室裏込め断面　南から
	Ｂ区１号古墳　石室内舗石　南から
	Ｂ区１号古墳　石室裏込め除去後　南から
	Ｂ区１号古墳　石室裏込め除去後　北東から
	Ｂ区１号古墳　石室下舗石状態　南から
	Ｂ区１号古墳　石室下舗石状態　南から
	Ｂ区１号古墳　石室下舗石状態　近接
ＰＬ６	Ｂ区１号古墳　周堀遺物出土状態①　南から
	Ｂ区１号古墳　周堀遺物出土状態②　東から
	Ｂ区１号古墳　周堀遺物出土状態③　近接
	Ｂ区１号古墳　周堀遺物出土状態④　近接
	Ｂ区４号土坑　北から
	Ｂ区４号土坑　東から
	Ｂ区４号土坑　蓋石除去後　北から
	Ｂ区４号土坑　側石除去後　北から
ＰＬ７	Ｂ区１号竪穴建物　全景　西から
	Ｂ区１号竪穴建物　全景　西から
	Ｂ区１号竪穴建物　遺物出土状態　西から
	Ｂ区１号竪穴建物　遺物出土状態　近接
	Ｂ区１号竪穴建物　埋没土堆積状態　南から
	Ｂ区１号竪穴建物　カマド　西から
	Ｂ区１号竪穴建物　カマド断面Ｂ－Ｂ’西から
	Ｂ区１号竪穴建物　カマド掘方　西から
ＰＬ８	Ｂ区１号竪穴建物　掘方全景　西から
	Ｂ区１号竪穴建物　掘方断面　西から
	Ｂ区２号竪穴建物　全景　西から
	Ｂ区２号竪穴建物　遺物出土状態　西から
	Ｂ区２号竪穴建物　貯蔵穴　西から
	Ｂ区２号竪穴建物　埋没土堆積状態　北から
	Ｂ区２号竪穴建物　カマド　西から
	Ｂ区２号竪穴建物　カマド断面　西から
ＰＬ９	Ｂ区２号竪穴建物　カマド掘方　西から
	Ｂ区２号竪穴建物　カマド掘方断面　西南から
	Ｂ区２号竪穴建物　掘方全景　西から
	Ｂ区２号竪穴建物　掘方全景　南から
	Ｂ区３号竪穴建物　全景　西から
	Ｂ区３号竪穴建物　遺物出土状態　西から
	Ｂ区３号竪穴建物　埋没土堆積状態　南から
	Ｂ区３号竪穴建物　カマド　西から
ＰＬ10	Ｂ区３号竪穴建物　カマド天井部補強状態　西から
	Ｂ区３号竪穴建物　カマド天井部・袖補強状態　西から
	Ｂ区３号竪穴建物　カマド袖補強状態　西から
	Ｂ区３号竪穴建物　カマド断面Ａ－Ａ’①　南西から
	Ｂ区３号竪穴建物　カマド断面煙道部　南から
	Ｂ区３号竪穴建物　カマド掘方　西から
	Ｂ区３号竪穴建物　掘方全景　西から
	Ｂ区３号竪穴建物　貼床断面　西から

ＰＬNO.	キャプション　方向
ＰＬ11	Ｂ区４号竪穴建物　全景　西から
	Ｂ区４号竪穴建物　遺物出土状態　西から
	Ｂ区４号竪穴建物　埋没土堆積状態　西から
	Ｂ区４号竪穴建物　カマド　西から
	Ｂ区４号竪穴建物　カマド　西から
	Ｂ区４号竪穴建物　カマド掘方　西から
	Ｂ区４号竪穴建物　カマド掘方断面　西から
	Ｂ区４号竪穴建物　カマド掘方断面　南から
ＰＬ12	Ｂ区４号竪穴建物　掘方全景　西から
	Ｂ区４号竪穴建物　掘方断面　南から
	Ｂ区５号竪穴建物　全景　南から
	Ｂ区５号竪穴建物　全景　西から
	Ｂ区５号竪穴建物　埋没土堆積状態　南から
	Ｂ区５号竪穴建物　貯蔵穴　西から
	Ｂ区５号竪穴建物　貯蔵穴断面　西から
	Ｂ区５号竪穴建物　掘方　南から
ＰＬ13	Ｂ区１号土坑　全景　南から
	Ｂ区１号土坑　全景　東から
	Ｂ区１号土坑　敷石除去後　東から
	Ｂ区２号土坑　全景　南から
	Ｂ区２号土坑　埋没状態　南から
	Ｂ区３号土坑　全景　南から
	Ｂ区３号土坑　礫出土状態　南から
	Ｂ区３号土坑　埋没状態　南から
ＰＬ14	Ａ区壇　全景　西から
	Ａ区壇　全景　東から
	Ａ区壇　断面　東から
	Ａ区壇　断面　東から
	Ａ区１号土坑　全景　西から
	Ａ区２号土坑　全景　西から
	Ａ区３号土坑　全景　西から
	Ａ区４号・５号・６号土坑　全景　南西から
ＰＬ15	Ａ区７号土坑　全景　南から
	Ａ区８号土坑　全景　南から
	Ａ区10号土坑　全景　西から
	Ａ区11号土坑　全景　西から
	Ａ区12号土坑　全景　西から
	Ａ区13号土坑　全景　北から
	Ａ区14号・15号土坑　全景　南から
	Ａ区16号土坑　全景　南から
ＰＬ16	Ａ区９号土坑出土遺物
	縄文時代～弥生時代遺構外出土遺物
	Ｂ区１号古墳出土遺物
ＰＬ17	Ｂ区１号古墳出土遺物
ＰＬ18	Ｂ区１号竪穴建物出土遺物
	Ｂ区２号竪穴建物出土遺物
ＰＬ19	Ｂ区２号竪穴建物出土遺物
	Ｂ区３号竪穴建物出土遺物
ＰＬ20	Ｂ区３号竪穴建物出土遺物
	Ｂ区４号竪穴建物出土遺物
ＰＬ21	Ｂ区４号竪穴建物出土遺物
	Ｂ区５号竪穴建物出土遺物
	Ｂ区１号土坑出土遺物
	Ｂ区２号土坑出土遺物
	中世・近世遺構外出土遺物



1図　遺跡位置図(1/200,000)　　● 遺跡地

Ⅰ　調査に至る経緯・経過

1．調査に至る経緯

川場村道生品秋塚線は、川場村生品で接する県道富士山横塚線が沼田市環状線から川場スキー場までのバイパス建設（沼田市環状線の沼田市上原～県道富山横塚線と合流する川場村生品までは市道および村道である。村道部分は群馬県沼田土木事務所にて計画され、2001年度、2002年度、2004年度に財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団で「生品西浦遺跡」として発掘調査が行われ、2005年３月に報告書が刊行されている。）を進める中、現在の村道では取付部の傾斜が急になり、特に冬季には積雪や凍結により車両の通行が困難になり迂回をしていることから新規に建設することとなった。

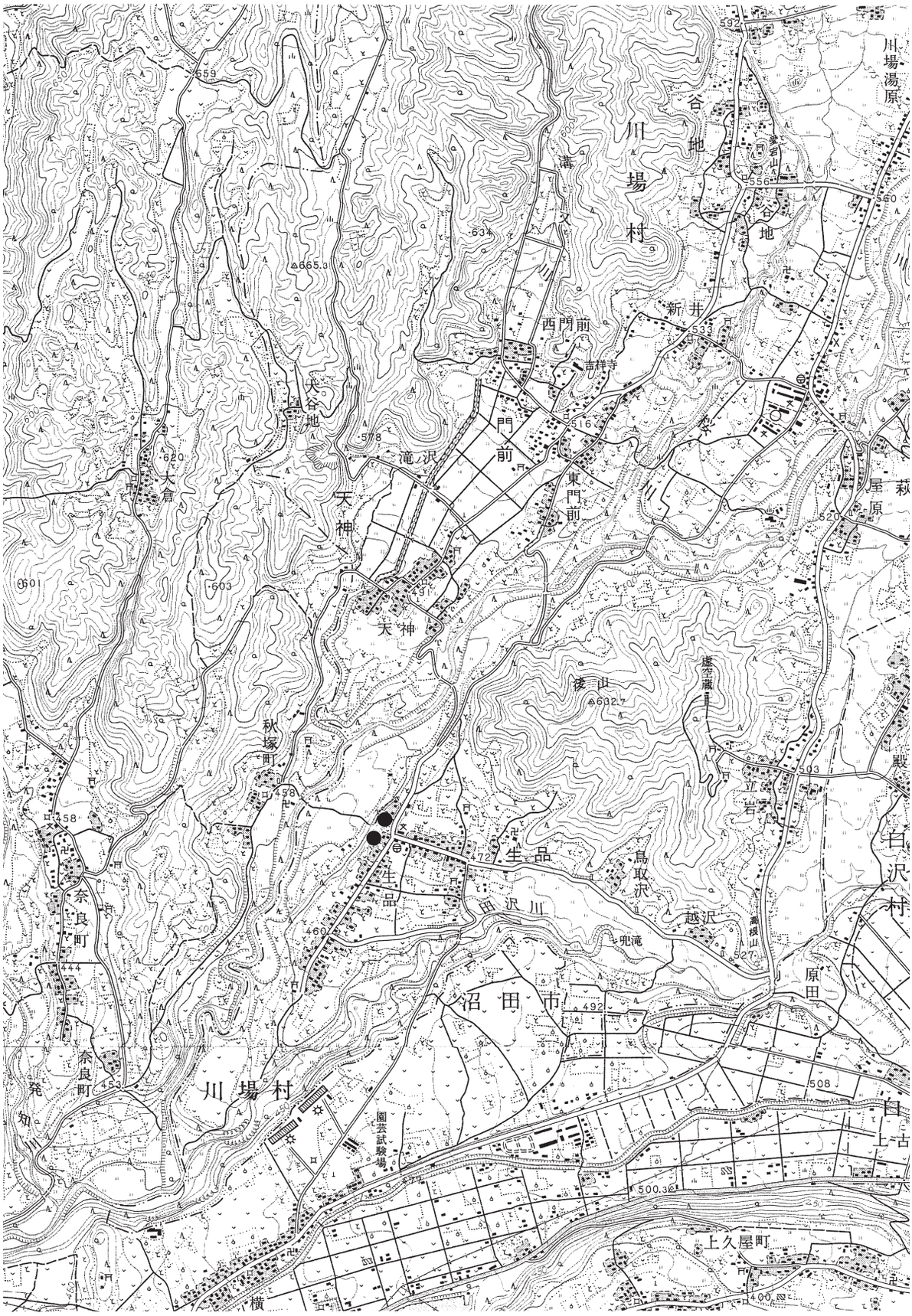
平成17年９月よりこの村道改良工事に伴う埋蔵文化財の取扱いについて、川場村田園整備課・川場村教育委員会と群馬県教育委員会文化課で協議を重ねてきた。

村道新設地には、上毛古墳綜覧（昭和13年３月31日刊行、群馬県）に川場村56号～65号古墳が登載されている。平成18年１月13日に全村を対象に、村教委と県教委で包蔵地再確認を行い、平成18年３月８日付けで群馬県文化財情報システムに登載し、本地域は「西川原古墳群」として掲載された。

当地域の試掘・確認調査を実施するにあたり、村教委には埋蔵文化財専門職員が配置されていないことから、平成18年３月16日付け（川教発第33号）で村教委から県教委に職員派遣依頼があり、平成18年３月29日に県教委文化課職員により調査を実施した。その結果、県教委は古墳と住居跡を確認し、発掘調査が必要であることを村教委に伝え、村教委は村田園整備課に遺跡が確認され、発掘調査が必要であることを通知した。

平成19年３月９日付けで川場村長（田園整備課）より文化財保護法第94条の通知が村教委を経由し、県教委へ提出された。県教委は平成19年３月13日付け（文第722－93号）で「工事着手前に発掘調査を実施するよう」勧告を行った。この発掘調査の実施にあたっては、村教委には埋蔵文化財専門職員が配置されていないことから、県教委文化課が支援を行うこととし、事務処理は村教委が行い、本発掘調査については、隣接する県道富士山横塚線の発掘調査を実施している財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が行うことで調整した。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団では、平成19年度事業として取組、平成19年６月１日付けで川場村長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長との間で「埋蔵文化財発掘調査・整理委託契約」を締結した。本契約を受けて、事業団は村教委へ平成19年６月27日付け（群埋第34－８号）で文化財保護法第92条の届出を行った。村教委は、平成19年６月27日付け（川教発第84号）により、県教委へ進達した。県教委は平成19年７月２日付け（文第720－23号）により発掘調査の指示を村教委を経由し財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長あて通知した。



２図　遺跡位置図（1/25,000）　　● 調査地点

２．調査の経過

発掘調査は２地点に分割しているため薄根川上位河岸段丘面の地点をＡ区、中位河岸段丘面の地点をＢ区と呼称することにした。調査面積はＡ区285㎡、Ｂ区591㎡の計876㎡である。なお、Ｂ区の道路部分は357㎡である。発掘調査は調査の効率や排出土の仮置き場などのため2007年７月１日から10月31日にまでの期間で３ヶ月間の予定で実施する県道冨士山横塚線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（生品西浦遺跡Ｊ区とＨ・Ｉ区の前年度未了であった旧石器調査）期間内の１ヶ月を予定していた。そのため生品西浦遺跡Ｊ区の調査が終了した後の2007年９月18日よりＡ区、Ｂ区を同時に着手した。

Ａ区・Ｂ区とも古墳および古墳と見られる小規模な土山が存在するため、その箇所を除いて表土を重機で掘削した。その結果、Ａ区の土山周囲には周堀などが確認できないことから土山が古墳であるか否かを確認するため頂上部中央に交点として十字状に試掘坑を設定した。また、表土10～20㎝ほど除去したところ表土層下がすぐにローム層であったことから縄文時代から中世・近世の遺構検出作業を行った。これらの調査の結果、土山は近世以降の「お宮」を祭った壇であることが判明し、ローム面からは16基の土坑を検出した。壇遺構は表面を覆っていた土砂を除去した後に盛り土を掘削し、盛り土層下の遺構検出とともに５×２ｍの試掘坑を設定してローム層下の試掘を行い10月９日に終了した。

Ｂ区は現状が栗の果樹園であり、樹木の上部だけが伐採された状態のため、重機掘削に支障があるため、根本からの伐採を行った。その後、土山に露出している礫の状態などから古墳であることが明確であることから、まず後世の耕作等で寄せ集められた小礫を取り除く作業を行うとともに表土掘削を行った。その結果、古墳は石室天井部の礫は残存していないことと側壁および奥壁上部の礫は大部分が消失しており、一部残存しているものも原位置を保っていないこと、墳丘の盛土は全く残存していないことが判明した。しかし、石室や石室裏込めの下部は良好な状態であることからすぐに石室の調査に着手した。古墳の石室は下部の残存状態が良好であったことや石室に使用されている礫が人手では動かされる重量でないことからＢ区の調査期間の当初から最後まで時間を要した。また、古墳の周辺からは竪穴建物５軒と土坑３基、石棺墓１基などを検出した。竪穴建物一部重複が確認されたことによって新旧を確認しながらも掘削可能な範囲は平行しながら調査を行った。調査では埋没状態を観察するための断面観察用のベルトを残し、床面までの掘削、カマド調査、掘方の調査を行った。調査は遺構の調査終了後、試掘坑を設定して堆積しているHr－FP層下、黒色土層下の礫層上面での遺構確認を行い終了した。

なお、埋め戻しは生品西浦遺跡Ｈ区・Ｉ区の旧石器調査の埋め戻しと一緒に実施した。また、出土遺物は土器などが遺物収納用箱で５箱と大刀や鏃などの金属器が出土した。土器の洗浄・注記は報告書刊行の整理期間が迫っているため調査終了後担当者および整理補助員によって行った。金属器の錆落としなどの処理は当事業団保存処理室で実施した。

3図　発掘調査区図(1/2,000)

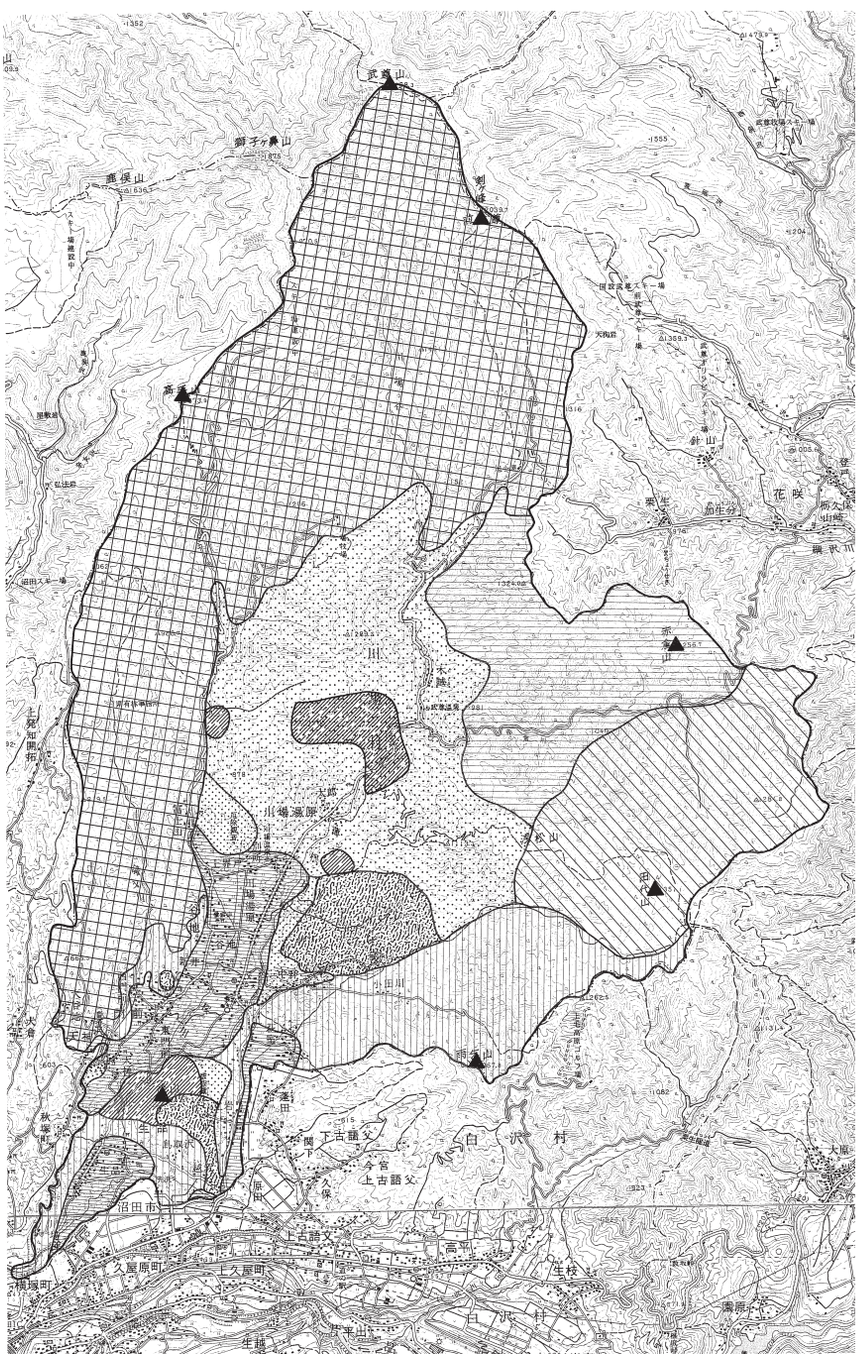
Ⅱ　遺跡地の環境

1．地理的環境

川場村は県の北部、標高2.158mの武尊山の南麓に位置する。標高は村役場付近で520m、生品の集落では470～480mである。気候は冷涼であり、年平均気温は11.0℃、冬は平均気温6.3℃まで下がる。山岳地帯の積雪量は多く、年によって異なるが２～３mに達することもある。しかし、生品では日陰などを除いてほとんど根雪となることはない。地形的には南西部を除いて三方を武尊山、赤倉山、赤松山、田代山、雨乞山、高手山に囲まれ、村面積85.2㎢の約80%が山林で占められている。これらの山地から流れ出す薄根川、桜川、溝又川、田沢川が標高600mにかかるあたりからその流域に平地を形成する。この平地は幅約１㎞、長さ４㎞にわたり、各河川に沿ってほぼ北東から南西に続くが、上記四河川がほぼ並行して流れるため、利根郡内の他の利根川支流の平地よりやや広いのが特徴的である。この平地上にはかなりの起伏があり、微高地上は集落、畑地に、低地部は水田として利用がなされている。しかし、この起伏も近年の圃場整備によってほとんど平坦にされてしまっている。

遺跡はこれら河川のうち薄根川に桜川が合流した200mほど下流200m左岸に形成された河岸段丘面に立地している。そしてＡ区は上位河岸段丘面から段丘崖に移行する地点、Ｂ区は中位河岸段丘面に立地する。各地区の標高はＡ区470～472m、Ｂ区463～464mである。

遺跡地の北東に位置する後山は中生層および、蛇紋岩からなる山で武尊山から流れ出ている薄根川によって現在の山形を形づけられている。これら川場村の地形形成には前述の山々と古川場湖と薄根川をはじめ、諸支流の河川による浸食と堆積作用が大きな役割をはたしている。



凡例

- 結晶片岩類
- 第三紀層
- 花崗岩
- 石英粗面岩
- 石英安山岩
- 蛇紋岩
- 塩基性岩（輝緑岩）
- 安山岩（武尊熔岩）
- 第四紀堆積物

４図　川場村地質図（1/50,000）

2．歴史的環境

川場村の遺跡・遺物散布地は河川に沿った平地および平地縁辺部の丘陵緩斜面に集中する。しかし、村内での発掘調査事例は少なく詳細な点は不明である。本項では西川原古墳群を中心に周辺遺跡について概観する。

旧石器時代　川場村内では隣接する生品西浦遺跡のＤ区、Ｈ・Ｉ区でややまとまった出土を見ることができる。生品西浦遺跡ではＤ区で台石や剥片がまとまって出土しており、石器製作工房と見られる。Ｈ・Ｉ区では円礫や縦長剥片などが出土しているが、散発的な出土でしかない。これらの石器はともに浅間山ＢＰ層下からの出土である。この他、周辺では沼田市土塔原遺跡群戸神諏訪遺跡（戸神諏訪遺跡は関越自動車道建設から工業団地造成に伴う発掘調査など４次にわたる発掘調査が行われており、市教育委員会ではこれらを総称して土塔原遺跡群と称している。以後「戸神諏訪」と略す）から１点出土例が見られるだけであるが、三峰山西麓のみなかみ町（旧月夜野町）後田遺跡や三峰神社裏遺跡、大友館址遺跡では大規模な石器試作工房が調査されている。

縄文時代　川場村内で門前橋詰遺跡や内出遺跡、生品西浦遺跡で遺構・遺物が検出・出土している。門前橋詰遺跡では前期の竪穴建物１軒が調査されている。内出遺跡では落し穴が１基調査されている。生品西浦遺跡からは早期鵜が島台式土器や前期諸磯ｂ式土器を伴う土坑や多数の落し穴が検出されている。また、薄根川右岸、戸神山麓では奈良原遺跡や岡谷十二遺跡で前期の集落、内出遺跡の南に位置する沼田市（旧白沢村）寺谷遺跡では中期の集落が調査されている。

弥生時代　川場村内でも多くの遺跡が存在しており、集落の調査も行われている。門前橋詰遺跡や舛海戸遺跡で後期の竪穴建物が調査されている他、生品西浦遺跡Ｊ区や田沢川左岸の高野原遺跡では集落が調査されている。この他、立岩では中期の山草荷式土器、門前では渋川市有馬遺跡から出土した人形土器と同様なものが出土している。また、沼田市戸神諏訪遺跡では後期樽式の大規模な集落が検出されている。

古墳時代　この時期集落は弥生時代から継続する前期の集落は舛海戸遺跡や戸神諏訪遺跡などで確認されているが、中期の集落は寺谷遺跡で竪穴建物が３軒、生品西浦遺跡で竪穴建物が４軒検出されているだけで弥生時代から古墳時代前期の集落に比べるとほとんど確認されていない状況である。しかし、後期６世紀代以降の集落は生品西浦遺跡や寺谷遺跡、沼田市石墨遺跡などでややまとまった軒数の竪穴建物が検出されているが、三峰山西麓のみなかみ町後田遺跡や師Ｂ遺跡に比べると検出されている竪穴建物の軒数も少ない。また、生産域は石墨遺跡でHr-FP層下から水田跡が検出されている。Hr-FP層下水田にはこの他に沼田市下川田平井遺跡、昭和村軍原Ⅱ遺跡、糸井太夫遺跡などで検出されている。

川場村内の古墳は「上毛古墳綜覧」によると85基が確認され、その後の「川場村の歴史と文化」では95基とされている。これらの古墳は生品34基、天神24基、谷地14基と生品と天神に大半が存在する。現在、天神では圃場整備が進み古墳の存在は確認できないが、生品では段丘崖に近いところに数基が残っている。これらの古墳はすべて小規模な横穴石室をもつ円墳である。また、古墳は集落と同様に前期、中期のものは確認されていない。発掘調査は生品西浦遺跡で５基の古墳で行われており、大刀や鏃、鐙、環状鏡板付轡、絞具などの馬具などが出土している。田沢川左岸の高野原遺跡ではこの付近で数少ないHr-FP降下前の古墳が調査されているが、主体部はすでに削平された状態であった。周辺では薄根川の対岸に位置する沼田市秋塚古墳群で10基の古墳が調査されている。秋塚古墳群も７世紀代の小規模な横穴石室をもつ円墳で大刀や馬具の他に銀象嵌が装飾された大刀鍔や大刀鞘尻金具が出土している。薄根川のやや下流右岸には60基ほどが確認されている奈良古墳群が存在する。奈良古墳群では史跡整備のための発掘調査が行われている。この古墳群も７世紀代の

Ⅱ　遺跡地の環境

1表　周辺の調査遺跡概要

遺跡NO.	遺跡名(所在地)	調査の内容	文献NO.
1	生品西浦遺跡 (利根郡川場村大字生品)	本遺跡の南側に位置し、薄根川左岸中位･上位河岸段丘面に立地する。縄文時代は落し穴･土坑、弥生時代は竪穴建物1軒、古墳時代は中期から後期にかけての集落と終末期の古墳5基、奈良平安時代の集落、中近世は屋敷跡、墓坑を検出。古墳からは副葬品に大刀、鉄鏃、壺鐙などの馬具が出土している。	1
2	門前橋詰遺跡 (利根郡川場村大字門前)	薄根川の支流、溝又川と桜川に挟まれた平地上の微高地に立地する。縄文時代前期諸磯式期の竪穴建物1軒と弥生時代後期の竪穴建物2軒、平安時代の溝1条を検出。出土遺物には縄文時代前期諸磯式土器、弥生土器、「車」と墨書された須恵器椀がある。	2
3	舛海戸遺跡 (利根郡川場村大字門前)	薄根川の支流、溝又川と桜川に挟まれた平地上の微高地、門前橋詰遺跡の南東200mに立地する。弥生時代後期の竪穴建物1軒と古墳時代前期の竪穴建物1軒、平安時代の竪穴建物1軒を検出。出土遺物には弥生土器がある。	2
4	内出遺跡 (利根郡川場村大字荻室)	雨乞山西山麓の小規模な扇状地に立地する。検出された遺構は落し穴、土坑など、出土した遺物は縄文時代中期の土器片、石器、土師器などがある。	3
5	高野原遺跡 (利根郡川場村生品・ 沼田市横塚町)	田沢川左岸の河岸段丘面に立地する。弥生時代後期の集落と古墳、平安時代の墓坑を検出。弥生時代の集落は竪穴住居12軒を検出し、7軒を調査、古墳は4基を調査、そのうち2基は６C.代のもので周堀内にHr-FPが堆積、主体部は造成によって消失。隣接する古墳からは方頭大刀が出土している。	2
6	寺谷遺跡 (沼田市(旧白沢村)古語父)	雨乞山西山麓の小規模な扇状地に立地する。調査は1980年と2001年に実施されている。縄文時代中期、弥生時代中期・後期、古墳時代中期、平安時代の集落を検出、なかでも弥生時代の竪穴住居からは板状鉄斧が出土、古墳時代中期の石製模造品を3，000点あまり使用した祭祀が検出され注目されている。	4・5
7	秋塚古墳群 (沼田市秋塚町)	薄根川右岸の河岸段丘面に立地する。1990年、1991年、1993年にわたり円墳12基を発掘調査している。調査の結果、７C.前半代の終末期古墳と判明。出土遺物には大刀、鏃、馬具、須恵器などがあるが、中でも3号墳からは銀象嵌が施された鞘尻金具が出土。	6・7・8
8	奈良古墳群 (沼田市奈良町)	薄根川左岸の河岸段丘面に立地する。1955年群馬大学、1999年に沼田市教育委員会によって発掘調査が行われた。古墳群は東西400m、南北200mの範囲に60基が確認されていた。古墳の規模は最大でも径20mで大部分は７m～10m前半代である。構築の時期は７C.代で石室は自然石乱石積の横穴石室である。石室にはトの字状をした希なものも存在する。出土遺物には金銅製の馬具を初め大刀、鏃、須恵器などがある。	9 10 11
9	奈良田向遺跡 (沼田市奈良町)	発知川左岸の上位河岸段丘面に立地する。弥生時代後期の竪穴住居3軒と平安時代の竪穴住居13軒などを検出、平安時代の住居の中には小鍛冶跡や鞴羽口・鉄滓を検出・出土したものがある。遺物には土器の他に権衡などの鉄製品が注目される。	12
10	奈良原遺跡 (沼田市奈良町)	発知川左岸の上位河岸段丘面に立地する。縄文時代前期の竪穴住居8軒、弥生時代後期の竪穴住居7軒、平安時代の竪穴住居2軒と中世の堀、墓坑を検出。出土遺物には土器、石器、土師器、須恵器、五輪塔などがある。	13
11	上光寺遺跡 (沼田市下発知町他)	発知川右岸の上位河岸段丘面に立地する。縄文時代後期の柄鏡形敷石住居１軒、後期の敷石遺構2基、土坑14基、炉3基、埋設土器3基と弥生時代の竪穴住居2軒、平安時代の掘立柱建物2棟、中世の竪穴遺構、墓坑、土坑、溝、柵状遺構等を検出した。出土遺物には縄文時代後期の土器、石器と渡来銭などがある。	14
12	鎌倉台遺跡 (沼田市高橋場町)	薄根川左岸の沼田台地上の北側縁辺に立地する。縄文時代中期の落し穴3基、土坑14基を検出。	15
13	鎌倉遺跡 (沼田市岡谷町鎌倉)	薄根川左岸の沼田台地の北側縁辺、標高446mに立地する。また、遺跡地の南側には水田として利用されている谷地が存在している。弥生時代後期の竪穴住居9軒を検出。出土遺物には弥生土器の他、縄文時代中期阿玉台式、加曽利Ｅ３式などの縄文土器がある。	16
14	清水遺跡 (沼田市横塚町字清水)	薄根川左岸の沼田台地の北側縁辺、標高450mに立地する。古墳時代前期の竪穴住居を1軒検出。出土遺物には土師器椀、壺、台付甕、小型甕等がある。土師器椀には弥生時代後期の様相を呈するものがみられる。	11
15	下宿浦遺跡 (沼田市横塚町下宿浦)	薄根川左岸の沼田台地の北側縁辺、標高460～464mに立地する。縄文時代の落し穴4基、土坑9基と平安時代の掘立柱建物4棟を検出。掘立柱建物は1×１，１×２間と簡素な作りである。出土遺物は縄文土器と古墳時代の土師器がある。	17
16	追墓古墳群 (沼田市上沼須町字追墓)	片品川右岸の中位河岸段丘面の傾斜地に立地する。標高は392m前後、河床からの比高差は約60mである。古墳1基を発掘調査している。古墳はHr-FP層上に構築されている径13mの円墳、石室は自然石乱石積の横穴式両袖型、全長は6.12m、玄室長3.52m、幅2.35mを測る。出土遺物には金環、須恵器高杯がある。構築年代は出土した須恵器が6世紀後半代の様相を呈していることから６世紀末から7世紀初頭とされている。	18
17	下清水遺跡 (沼田市下久屋町字下清水)	片品川右岸の中位河岸段丘面、標高391mに立地する。縄文時代中期加曽利Ｅ式期の柄鏡形住居1軒、竪穴住居3軒検出。出土遺物は中期加曽利Ｅ式の土器と石器、土製耳飾り(耳栓)と古墳時代の土製勾玉がある。	19
18	上久屋橋場遺跡 (沼田市上久屋町字橋場)	片品川右岸の下位河岸段丘面、標高392～394mに立地する。周囲には利南古墳群が存在している。弥生時代後期竪穴住居4基と近世の墓坑1基を検出、古墳と想定された高まりを調査したが、古墳である確証は得られていない。出土遺物には弥生土器、天保通宝、キセルなどがある。	19・20
19	馬場遺跡 (沼田市上久屋町字馬場)	片品川右岸の中位河岸段丘面、標高410mに立地する。中世の堀1条、溝1条、土坑6基と時期不詳の竪穴状遺構を3基検出。出土遺物には縄文時代の土器、石器、中世の石臼、陶器、凹石がある。	19
20	大友館跡 (川場村大字谷地字中原)	薄根川右岸の台地上に立地する。大伴氏にかかわる館跡でかつては四方に土塁がめぐっていたとされる。発掘調査では土塁と堀を検出。出土遺物には陶器、砥石、キセルなどがある。	21

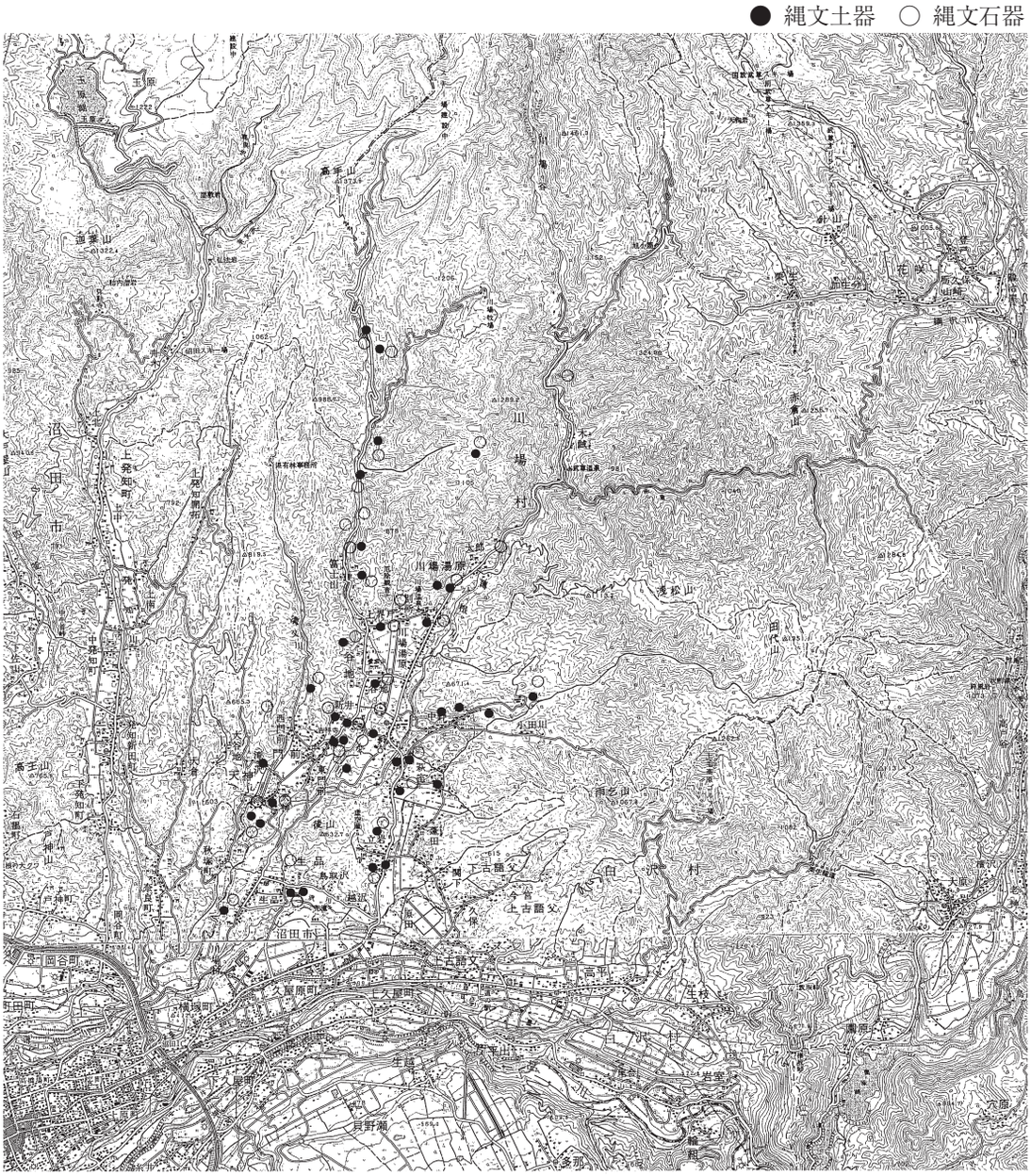
5図　周辺の調査遺跡図（1/25,000）

小規模な横穴式石室をもつ円墳であるが、10号古墳と呼称されている古墳は石室が玄室右壁面にＴ字状に側室を付設したきわめて類例が少ない古墳が存在している。出土遺物には大刀、鏃、馬具、須恵器などがあるが、その中でも土地所有者によって保管されている馬具一式は非常に良好な状態のものである。

奈良・平安時代　川場村村内では生品西浦遺跡で竪穴建物５軒が検出されている。また、県道部分の調査でも多くの竪穴建物や土坑が検出されている。この他、寺谷遺跡や舛海戸遺跡で竪穴建物、田沢川左岸の高野原遺跡では墓坑が検出されている。この時代は評里、郡郷によって地方を区分しているが、遺跡地が所在する生品はその地名から「和名類聚抄」に記載されている利根郡男信郷に比定されている。古代利根郡男信郷は古墳群や集落遺跡の分布からその領域は西は発知川付近、南は沼田台地を境とするとみられる。

中世　村内では門前に鎌倉時代から室町時代の守護、大名となった豊後大友氏と関わりのある館が存在している他、門前には中巌円月によって延元元(1336)年に開山した吉祥寺が現存する。

● 縄文土器　○ 縄文石器

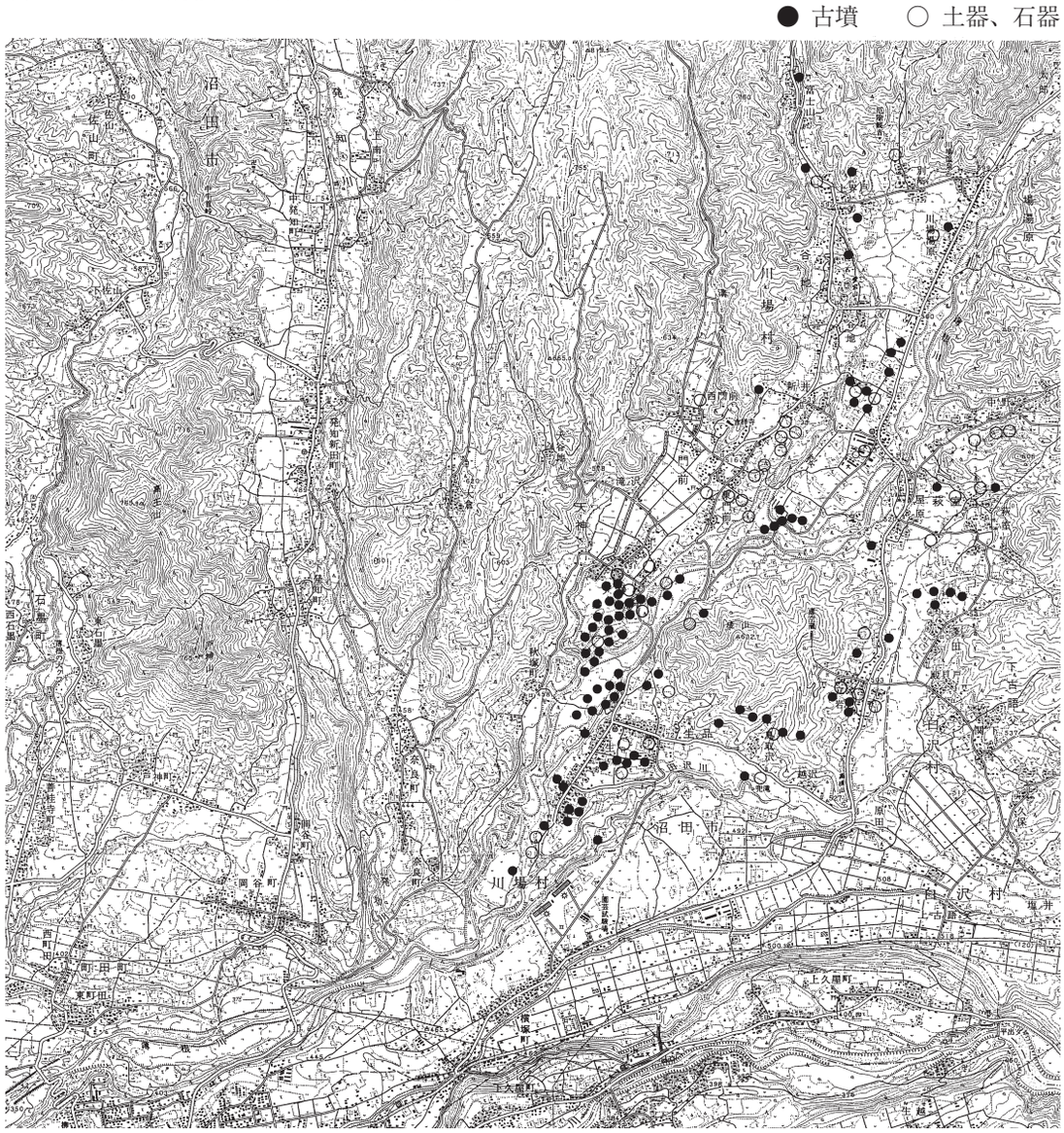


６図　川場村の縄文土器・石器分布図(1/100,000)

周辺調査遺跡文献

1　財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団「生品西浦遺跡～終末期･馬具出土古墳の調査～、－村道生品下り線埋蔵文化財発掘調査報告書－」2005
2　財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団「門前橋詰・舛海戸遺跡　高野原遺跡－公共開発関連出土品等整理報告書－」1989
3　群馬県利根郡川場村教育委員会「『内出遺跡』発掘調査報告書」1981
4　群馬県利根郡白沢村教育委員会「『寺谷遺跡』発掘調査報告書(図版編)」1981
5　白沢村教育委員会「寺谷遺跡－農用地総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」2003
6　沼田市教育委員会「秋塚古墳群Ⅰ－平成２年度土地改良総合整備事業秋塚地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」1991
7　沼田市教育委員会「秋塚古墳群Ⅱ－平成３年度土地改良総合整備事業秋塚地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」1992
8　沼田市教育委員会「秋塚古墳群Ⅲ－平成５年度土地改良総合整備事業秋塚地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」1994
9　沼田市教育委員会「奈良古墳群－平成11年度県営中山間地域総合整備事業みくに地区奈良南部工区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」2001
10　沼田市教育委員会「奈良古墳群　確認調査－平成16・17年度保存目的の埋蔵文化財発掘調査概報－」2007
11　沼田市「沼田市史　資料編Ⅰ　原始古代・中世」
12　沼田市教育委員会「奈良地区遺跡群(奈良田向遺跡)－土地改良総合整備事業奈良地区に係る埋蔵文化財発掘調査の概要－」1990
13　沼田市教育委員会「奈良地区遺跡群(奈良原遺跡)－土地改良総合整備事業奈良地区に係る埋蔵文化財発掘調査の概要－」1991
14　沼田市教育委員会「発知南部知己遺跡群上光寺遺跡－平成7年度農用地総合整備事業発知南部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」1996
15　沼田市教育委員会「鎌倉台遺跡－水資源開発公団沼田総合管理用宿舎新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」1990
16　財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団「師遺跡・鎌倉遺跡－関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第28集－」1989
17　沼田市教育委員会「下宿浦遺跡－地方特定道路整備事業桜ヶ丘横塚線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」1996
18　沼田市教育委員会「追墓古墳(旧利南村第8号古墳)－利根郡沼田市広域斎場(ぬまた聖苑)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」1989
19　沼田市教育委員会「上久屋地区遺跡群下清水遺跡・馬場遺跡・橋場遺跡・十二反遺跡－県営緊急畑地帯総合整備事業上久屋地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」1993
20　沼田市教育委員会「上久屋橋場遺跡－有限会社沼田物産土砂採取に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」1989
21　群馬県利根郡川場村教育委員会「大友館跡発掘調査報告書」1983

● 古墳　　○ 土器、石器



７図　川場村の古墳と弥生土器・土師器分布図(1/50,000)

Ⅲ　調査の方法

1．調査区の設定

調査にあたってグリッドの設定は生品西浦遺跡と同様に国家座標Ⅸ系（世界測地系）を用いて10mを基準とし、適時５m、１mなどを併用して対応した。各グリッドの名称はＸ軸、Ｙ軸とも座標値の下３桁を表記することとした。一例としてＸ＝75,560～75,570、Ｙ＝－66,730～－66,740の10m四方は560－730と表記した。また、範囲を狭めたグリッドの表記は560～565－570～575などとした。

2．調査の手順

調査は古墳や壇のように地上に残る遺構では現況の状態を１/100の現況図の作成を行ってから掘削等の作業に着手した。Ａ区壇遺構は頂部で交差するようにトレンチを設定して盛り土の状態を観察し、堆積土の除去を行った後に1/20で平面図と断面図を測量した。Ａ区の土坑などは埋没状態、堆積状態を観察するため半裁状態で掘削を行い、断面観察、写真撮影、測量を行い、残りを掘削後埋没状態、平面状態の測量を行った。なお、壇の詳細図、調査区の全体図等は測量業者に委託した。

Ｂ区古墳は耕作等で寄せ集められた礫を除去した結果、墳丘の盛り土はすべて除去されていたため、石室および裏込めの礫だけの状態であった。そのため、この状態の詳細図を作成し、原位置石室中央部で埋没状態が観察できるように半裁状態で掘削を行った。

竪穴建物、土坑などは一部Ⅳ層上面で確認し、重複する遺構について新旧関係を確認するため一部トレンチによる調査を行った。そして埋没状態、堆積状態を観察するため土層観察用のベルトを残すか、半裁状態で掘削を行い、断面観察、写真撮影、測量を行い、残りを掘削後平面状態の測量を行った。竪穴建物カマドは原則十字に土層観察用のベルトを設定して調査を行った。なお、遺物出土状態図は作業員によって平板測量、その他詳細図、調査区の全体図等は測量業者に委託した。

3．遺跡地の基本層序

基本土層は生品西浦遺跡（2005年刊行）と同様である。なお、Ａ区は傾斜地のため表土がほとんど流出して黒褐色土が10cmほど堆積しているだけでほとんど残っていない状態であった。Ｂ区は中位河岸段丘面に相当するが山側の東半ではⅣ層Hr-FPの堆積が確認された。

確認された層位は以下のとおりである。

Ⅰ層　黒褐色土　耕作土、Hr-FPを多量に含む。

Ⅱ層　生品西浦遺跡では浅間粕川軽石の堆積が確認できる箇所があるが、本遺跡では確認できなかった。

Ⅲ層　黒褐色土　やや褐色が強い、Hr-FPを30％ほど含む。

Ⅳ層　Hr-FP、なお、Ｂ区西半では堆積が確認されなかった。

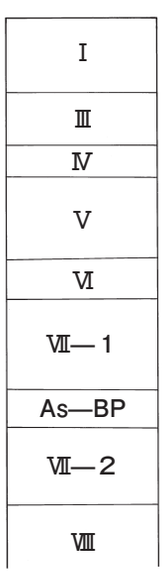
Ⅴ層　黒色土　含有物はほとんどみられない。

Ⅵ層　ローム漸移層

Ⅶ層　ローム

Ⅷ層　径10～20cmの円礫からなる礫層

なお、Ｂ区西半では段丘崖に近いためいわゆる表土の堆積も少なく、Ⅴ層下では薄根川の元河床とみられる礫層が表れる。



８図　遺跡地土層堆積模式図

Ⅳ　検出した遺構と出土した遺物

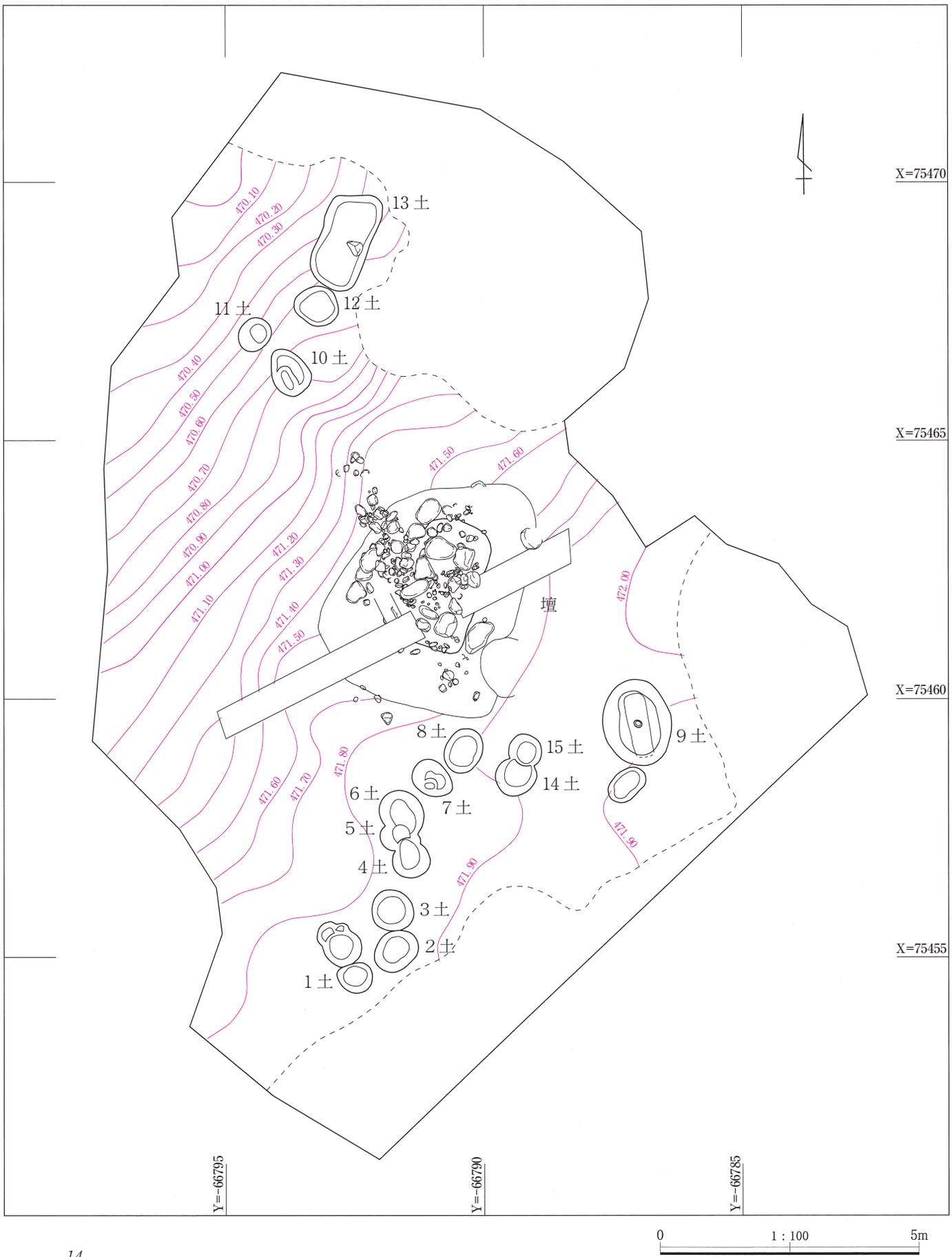
1．概要

遺構の検出はＡ区ではⅡ層からⅤ層にかけての層位が存在していないためⅥ層、Ⅶ層で行った。Ｂ区はⅣ層Hr-FPが残存していたのでこの層位上面を目安に行ったが、西側ではＡ区と同様に表土層が流出しており、Ⅴ層からⅦ層にかけてもごくわずかしか確認することができないため礫層での遺構確認を行った。

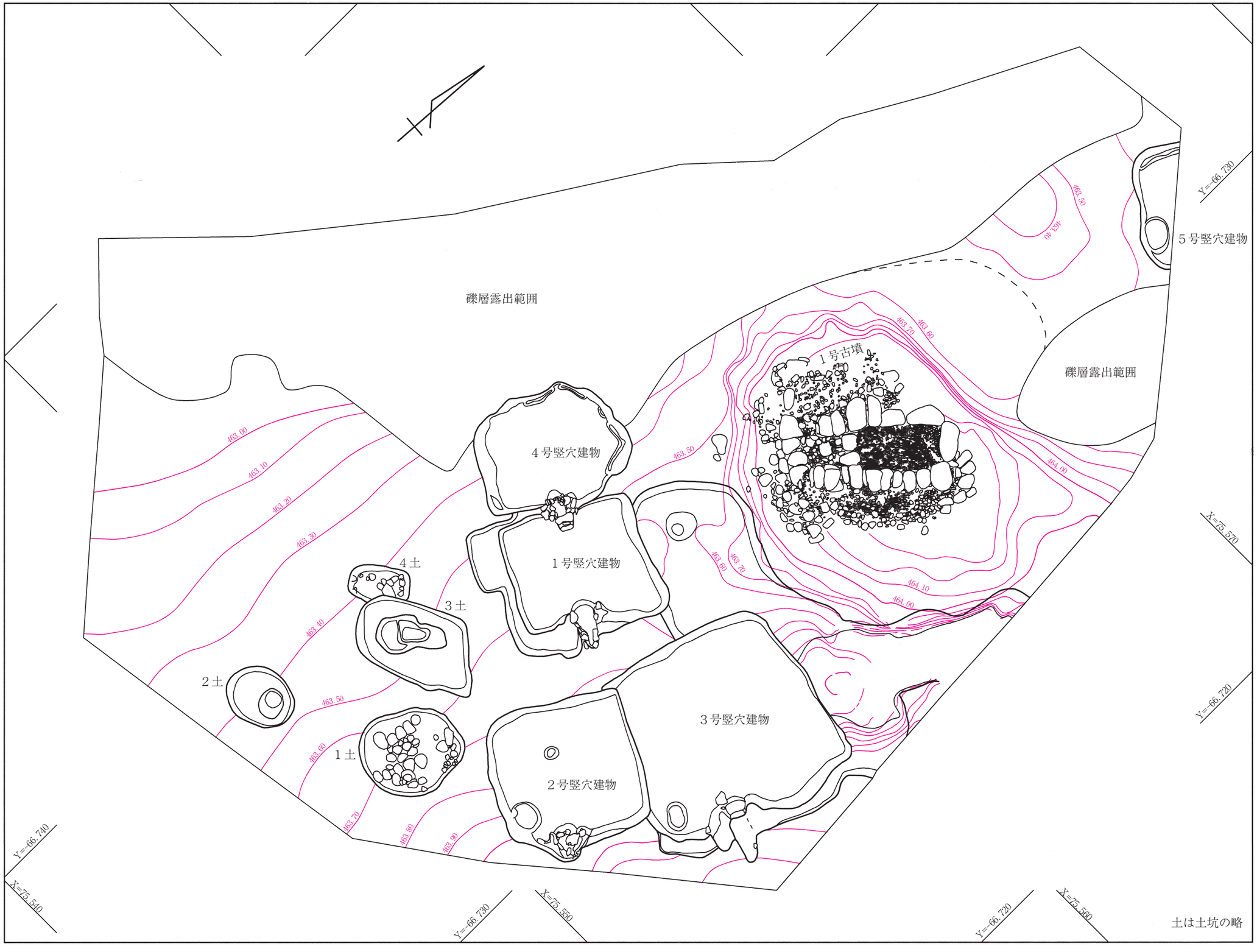
Ａ区では盛り土されていた宮を祭る壇と土坑16基を検出した。壇は当初、古墳の墳丘ではないかと想定されたが、試掘などの結果、上面に配置された礫が方形にならぶことや配置された礫中から近世陶磁器などが出土したことなどから「壇」と判断した。土坑は縄文時代の落し穴１基の他は出土遺物がないため明確にできない点もあるが埋没土などから中近世に比定される。

Ｂ区では古墳時代の古墳と小石棺墓各１基、平安時代の竪穴建物5軒、土坑３基などを検出した。なお、Ｂ区１号古墳は上毛古墳総覧川場村57号古墳、隣の栗林に所在する古墳は上毛古墳総覧川場村58号古墳に該当する。

９図　Ｂ区発掘調査前現況図



10図　A区発掘調査全体図



11図　B区発掘調査全体図

0　1：100　5m

２．縄文時代～弥生時代

（１）土坑・落とし穴

Ａ区９号土坑

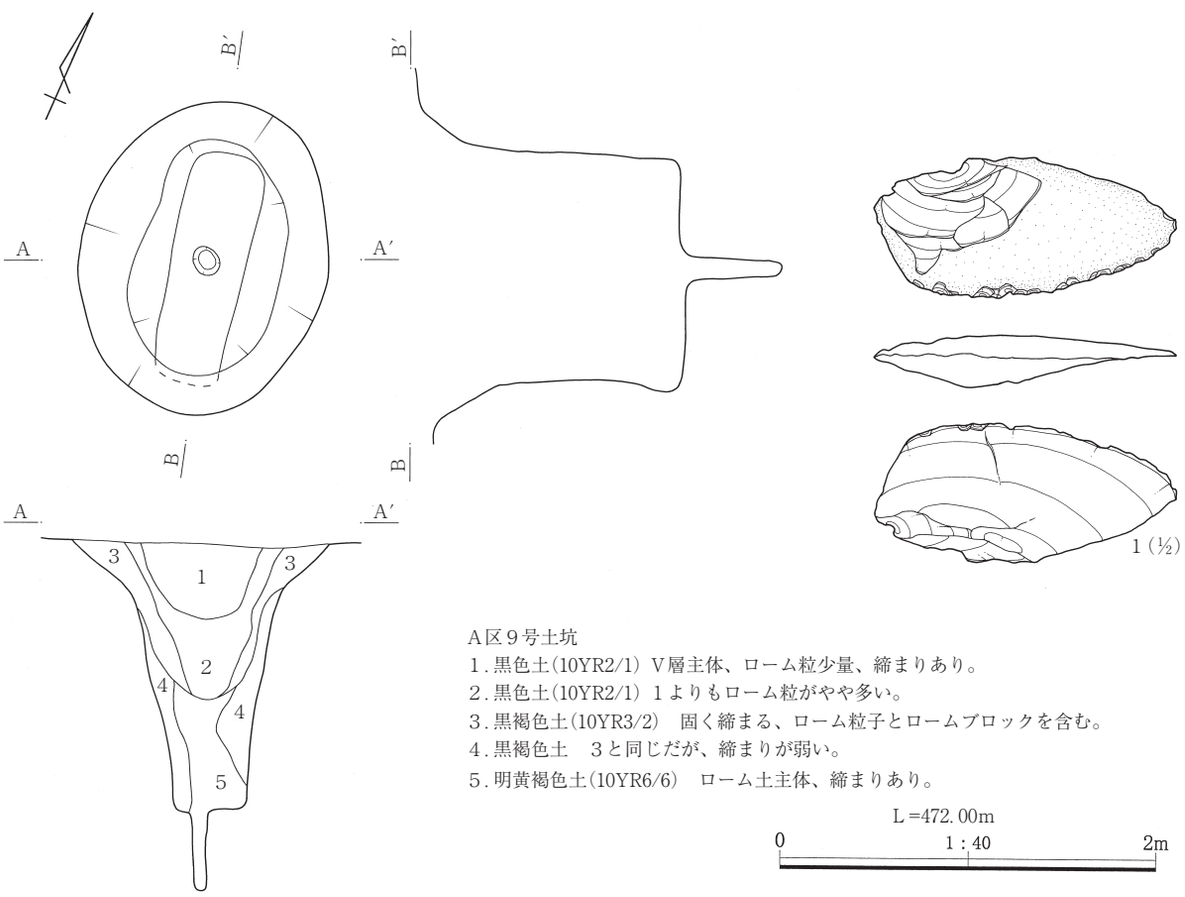
Ａ区東南部、Ｘ＝75,458～75,460－Ｙ＝－66,786～－66,787に位置する。本遺構の性格は形態や底面に小穴を有することから狩猟用の落し穴と判断される。

他遺構との重複関係はＡ区壇と僅かに重複するが、Ａ区壇の崩落土が本遺構の一部に覆う程度であった。新旧関係は当然本遺構のほうが古い。確認面での平面形態は楕円形、底面は短辺が弧状を呈するが長辺の東辺と西辺はほぼ並行し直線を呈する形状で、ほぼ中央に逆茂木を差し込んだ小穴を検出した。断面形態は上部より３分の１ほどのところに稜をもつ逆台形を呈す。規模は確認面で長径1.70m、短径1.34m、底面までの深度1.49m、底面が長径1.26m、短径0.40m、底面小穴が径0.16m、深度0.43mを測る。断面形態は短径部分が下部になるにしたがい細くなる逆台形状、長径部分は箱状を呈するが南辺下部は壁面がやや掘り込まれている。

埋没状態は壁際はⅦ層の崩落、中央部はⅤ層の流れ込みが観察されたことから自然埋没と考えられる。

遺物は１の削器がⅦ層中ＢＰ層下から出土しただけである。

本遺構の時期は出土した遺物から縄文時代であることはわかるが、詳細な時期の比定はできない。



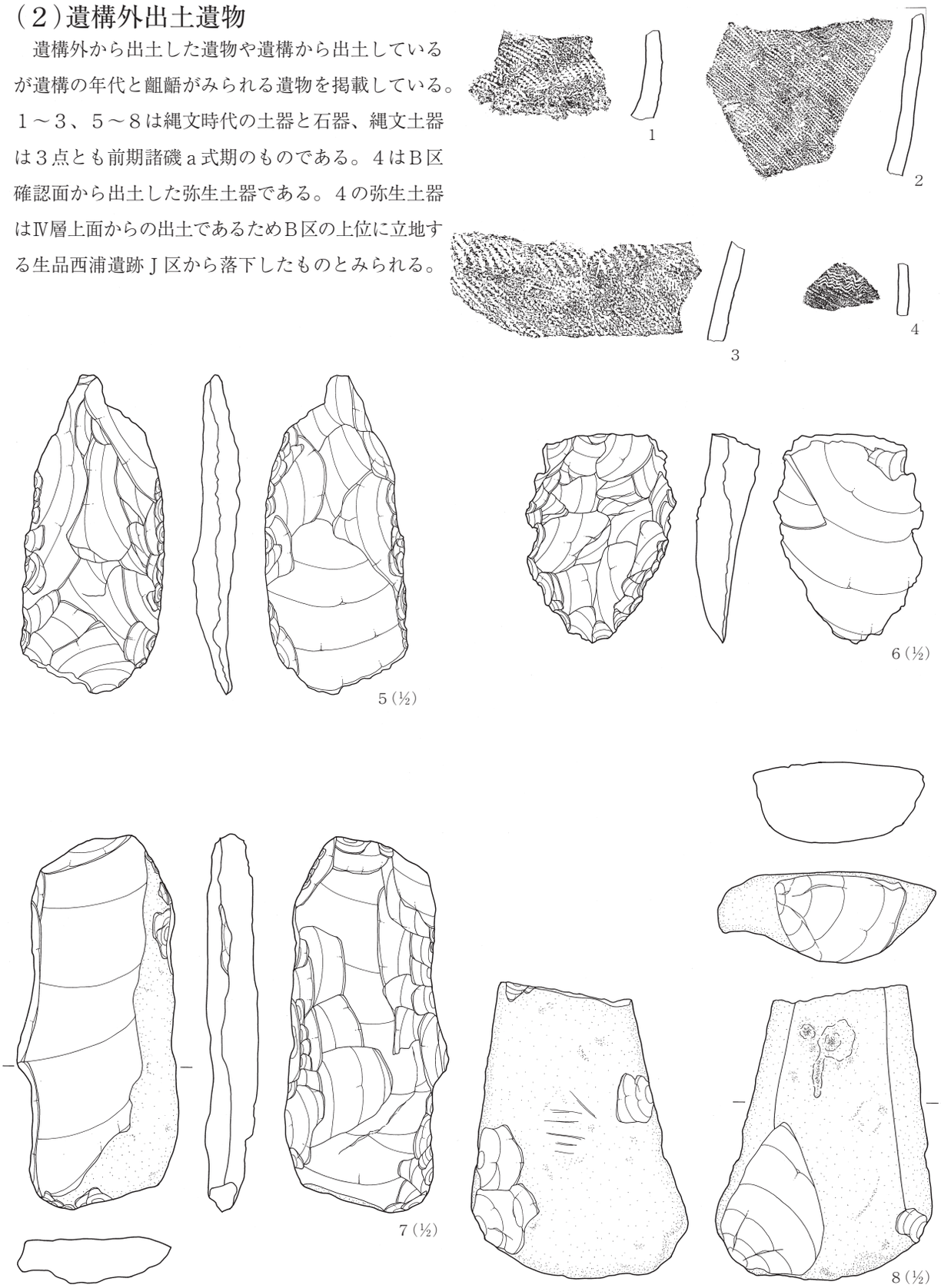
Ａ区９号土坑

NO.	種　類	器　種	出土位置	残存率	計　測　値	摘　要
1	石器	削器	壁際	完形	長 3.7 幅 8.1 厚 1.4 重 28.1	頁岩、PL16

12図　Ａ区９号土坑平面図・断面図・出土遺物図

（２）遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物や遺構から出土しているが遺構の年代と齟齬がみられる遺物を掲載している。１～３、５～８は縄文時代の土器と石器、縄文土器は３点とも前期諸磯ａ式期のものである。４はＢ区確認面から出土した弥生土器である。４の弥生土器はⅣ層上面からの出土であるためＢ区の上位に立地する生品西浦遺跡Ｊ区から落下したものとみられる。



13図　縄文時代～弥生時代遺構外出土遺物図

縄文時代～弥生時代遺構外出土遺物

NO. PL	種　類 器　種	出土位置 残存率	計　測　値	胎土/焼成/ 色調	成形・整形の特徴	摘　要
1	縄文土器 深鉢	Ｂ区5号竪穴建物 胴部片		細砂粒/良好/黄橙	１段４条、ＲＬ横位。	諸磯ａ式
2	縄文土器 深鉢	Ｂ区5号竪穴建物 胴部片		細砂粒/良好/赤褐	ＲＬ横位、（２段時の撚りが弱いため節の傾斜が強い）。	諸磯ａ式
3	縄文土器 深鉢	Ｂ区5号竪穴建物 胴部片		細砂粒/良好/黒褐	ＲＬ横位。	諸磯ａ式
4	弥生土器 甕	Ｂ区2号竪穴建物 胴部片		細砂粒/良好/黄橙	胴部上位に波状文。	後期樽式
NO.	種　類	器　種	出土位置	残存率	計　測　値	摘　要
5	石器	削器	Ｂ区	ほぼ完形	長 11.1　幅　4.8　厚　1.4　重 70.5	安山岩、PL16
6	石器	打製石斧	Ｂ区1号竪穴建物	上半欠損	長 (7.2)　幅　5.2　厚　2.2　重 62.3	安山岩、PL16
7	石器	打製石斧	Ｂ区1号古墳上部	ほぼ完形	長 13.1　幅　5.7　厚　1.8　重 190.5	片岩、PL16
8	石器	磨製石斧	Ａ区	上半欠損	長 (10.2) 幅　7.5　厚　3.1　重 271.8	安山岩、PL16

３．古墳時代

（１）古墳・墓坑

Ｂ区１号古墳

本古墳はＢ区調査区の北側、Ｘ＝75,558～75,570－Ｙ＝－66,725～－66,736に位置する。墳丘部は全体が調査区内に存在したが、東周堀の一部は道路下に延びている。調査前は栗林として耕作されており、石室およびその周辺付近に耕作によって出た小礫が廃棄のため集積された状態であった。

他遺構との重複関係は周堀でＢ区１号竪穴建物と３号竪穴建物と重複しているのが確認された。新旧関係は本古墳のほうが古いが、平面での確認は埋没土が本古墳周堀、竪穴建物ともにHr-FPを多量に含む黒褐色土であるため明確ではなかったが、断面観察や竪穴建物床面などから判断した。

墳丘は耕作によってほとんど削り取られた状態であった。そして石室周囲には耕作によって出た礫が廃棄・集積された状態であった。これら礫や表土を除去するとすぐに石室の下部や石室裏込めが表れた状態で石室上部および墳丘盛土自体の残存は確認されなかった。ただし、石室東側ではわずかに残存が確認された。なお、墳丘下にはⅣ層Hr-FPが堆積しており、その上部はほとんど撹拌されていない状態のⅢ層が堆積している。墳丘にはHr-FPを取り除いた下部のⅤ層を盛り上げているため地山と盛土を明確に区分することは困難であった。

また、墳丘に伴う葺石や根石などは全く残存していない状態であった。

周堀は羨道前部左側から墳丘東側にかけて検出されたが、西側は表土下ですぐにⅧ層の礫層が露出する状態のため存在したか否かも明らかでない。

周堀は東側は礫層まで達しているが、東南部はⅤ層下部までであった。規模は東側で幅4.50m、深度0.70m、東南部で幅3.20m、深度0.30mを測る。

石室は地元の方によると戦前には開口しており石室内部へ出入りできたとのことである。しかし、現状は天井石がすべて取り除かれ、奥壁や側壁も上半部の礫がすでに消失した状態であった。天井石は周辺にも残存しておらず、側壁も一部が石室内や石室西脇に放置されていたが大部分は周囲にも残存していなかった。

石室の構造は自然石乱積両袖型横穴石室である。開口方位はＳ－38°－Ｅを指す。石室の規模は全長4.35mを測る。羨道は長さ2.24m、幅は入り口部で0.78m、奥部で0.90m、玄室は長さ2.11m、幅は入り口部1.12m、中間部最大幅1.26m、奥部0.98mである。

羨道入り口と玄室手前には径40～50㎝、厚さ10㎝前後の川原石が置かれ、その間には径５㎝ほどの小礫が厚さ10㎝ほど敷きつめられていた。玄室手前は径40～50㎝の川原石の上に同様な礫が積み重ねられており、当時の閉塞状態を一部残していた。

玄室は明確な胴張りには至らないがわずかに膨ら

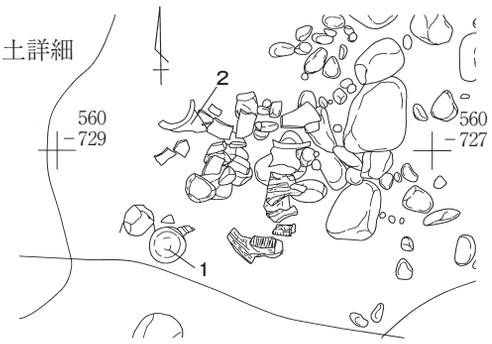
みがみられる。羨道から見ると左袖部は10cm、右袖部は15cmの広がりがある。奥壁は幅100cm、高さ45cm、厚さ50cmの安山岩が据えられているが、本来なら同様な礫がもう一段積み重ねられ室内高も１m前後あったとみられる。側壁は奥壁側は１段しか残存していないが入り口部付近では２段目まで残存していた。使用されている礫は幅60～100cm、高さ25～50cm、厚さ50～90cmほどである。石室側壁、奥壁の構築方法は左袖の奥壁より２石は横積みであるのに対して他の礫はすべて小口積みであった。

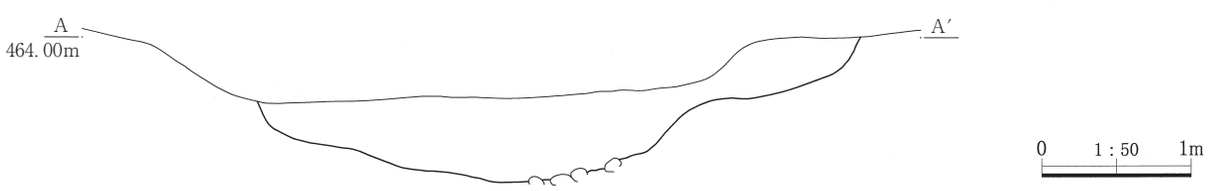
壁面に比べて床面の残存状態は良好で径５～10cmの小礫を厚さ10～15cmほど敷きつめている。奥壁から羨道にかけては緩い傾斜がみられる。下部の石室基部では舗石面が確認された。舗石面の範囲は石室主軸方位と同様な方位で石室主軸方向が幅方向よりやや長い長方形である。その範囲に径20～40cmの扁平な円礫を整然と敷きつめてあった。その範囲はX＝75,562～75,567－Y＝－66,728～－66,733で規模は軸方向が2.10m、幅1.90mであったが、17図のように石室内部から見るとやや左に寄った位置に側壁の礫が置かれた状態になる。舗石の敷きつめにはⅤ層の上面までⅣ層Hr-FPを取り除いて礫を配置している。そのため石室設置のための掘方は存在していない。

石室裏込めには５～15cmの礫を使用して壁石の周りを馬蹄形に取り囲むように積み重ねられていたと想定されるが、左袖奥寄りから奥壁にかけては欠損した状態であった。その範囲は両側とも1.0mほどで周辺部には30～40cmほどの礫が置かれていた。

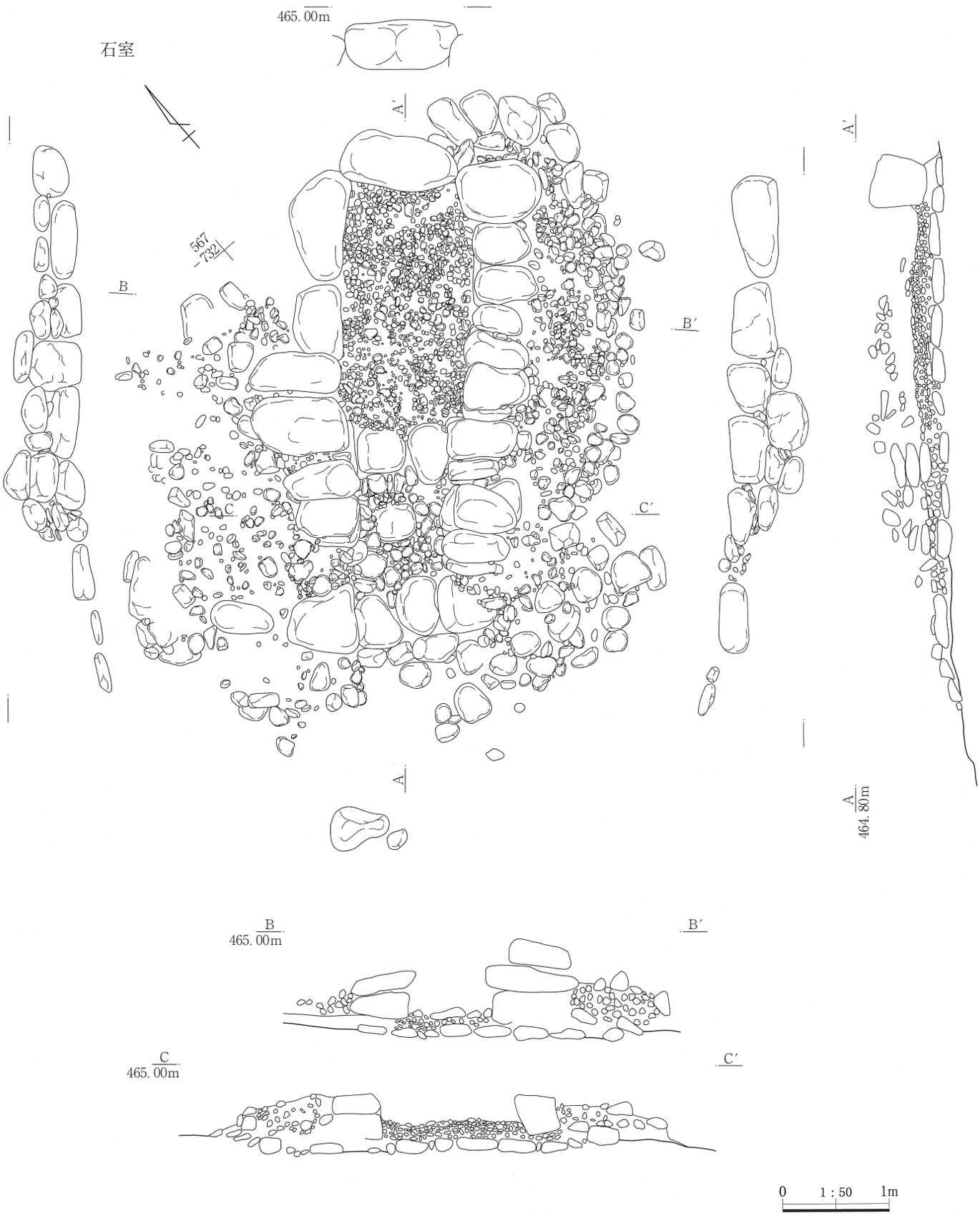
出土遺物は玄室内奥壁よりから勾玉と金環、左壁より小刀と鏃、その手前に刀子、右側壁奥寄りに大刀、裏込め北東角から金環が出土している。金環は玄室奥壁と石室裏込め北東隅から出土しているが、２点とも残存状態が良好で銅製の心に金箔が貼られた可能性が高い。大刀は鍔や銅製鞘金具の一部が残っている状態であり、鞘には表裏・側面を銀象嵌による装飾が施されていた。また、周堀内からは須恵器長頸壺、甕、土師器甕と東南部底面から馬骨が１体出土している。この馬骨は底面付近からの出土で上位には須恵器甕片が出土していることからこの古墳の被葬者が乗馬していた可能性が強い。

本古墳の時期はⅣ層Hr-FPより上位に構築されている点と周堀内から出土した須恵器などから７世紀代の終末期の古墳と考えられる。

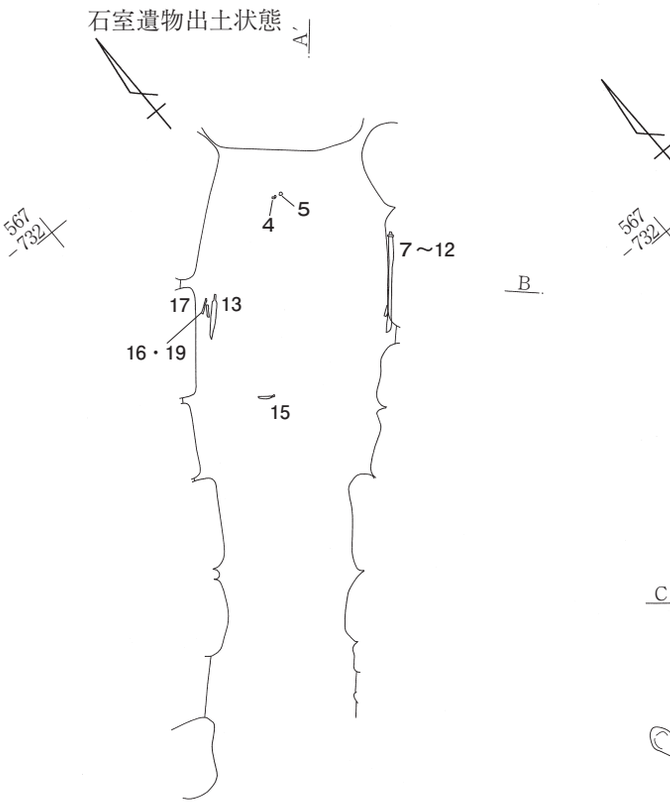




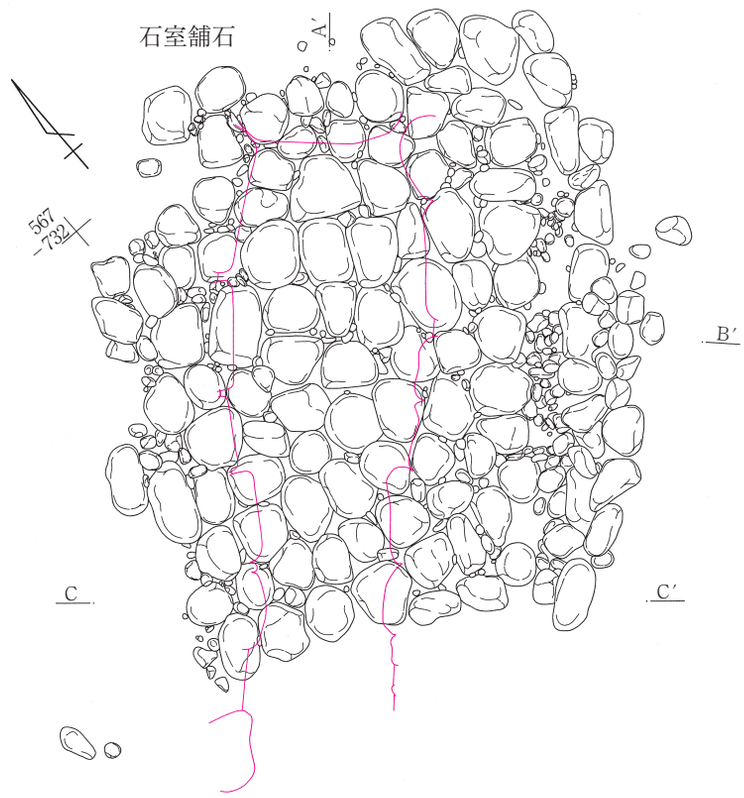
14図　B区1号古墳全体図、周堀遺物出土詳細図、周堀断面図



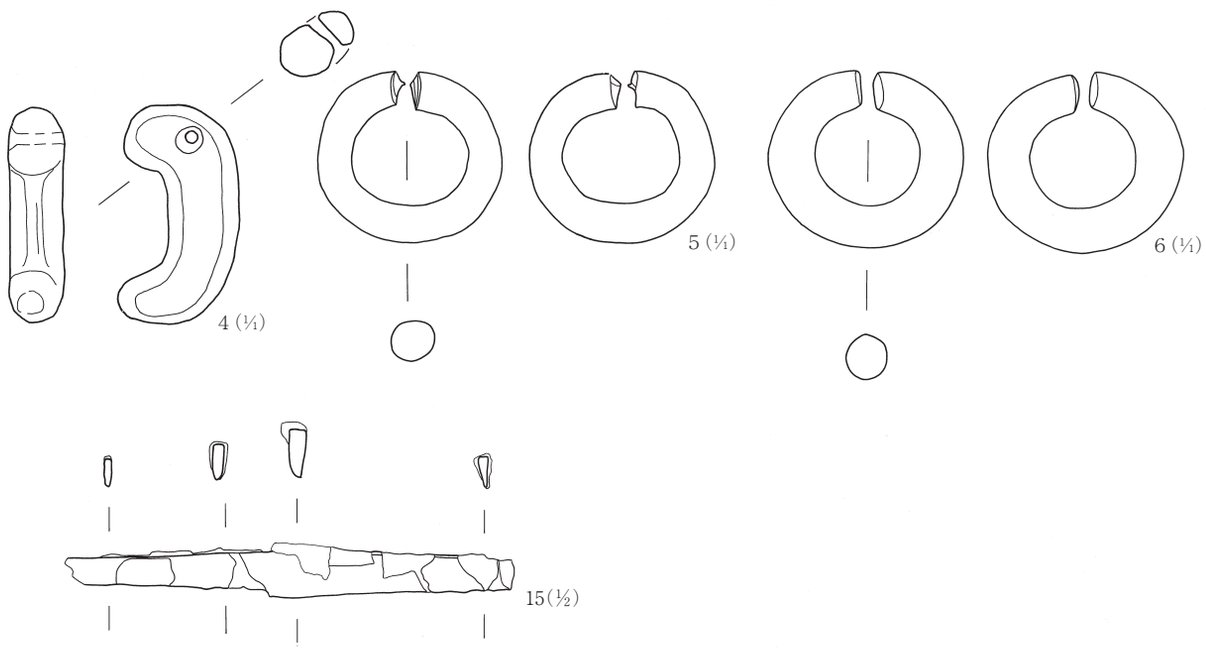
15図　B区１号古墳石室平面図、断面図、壁面図



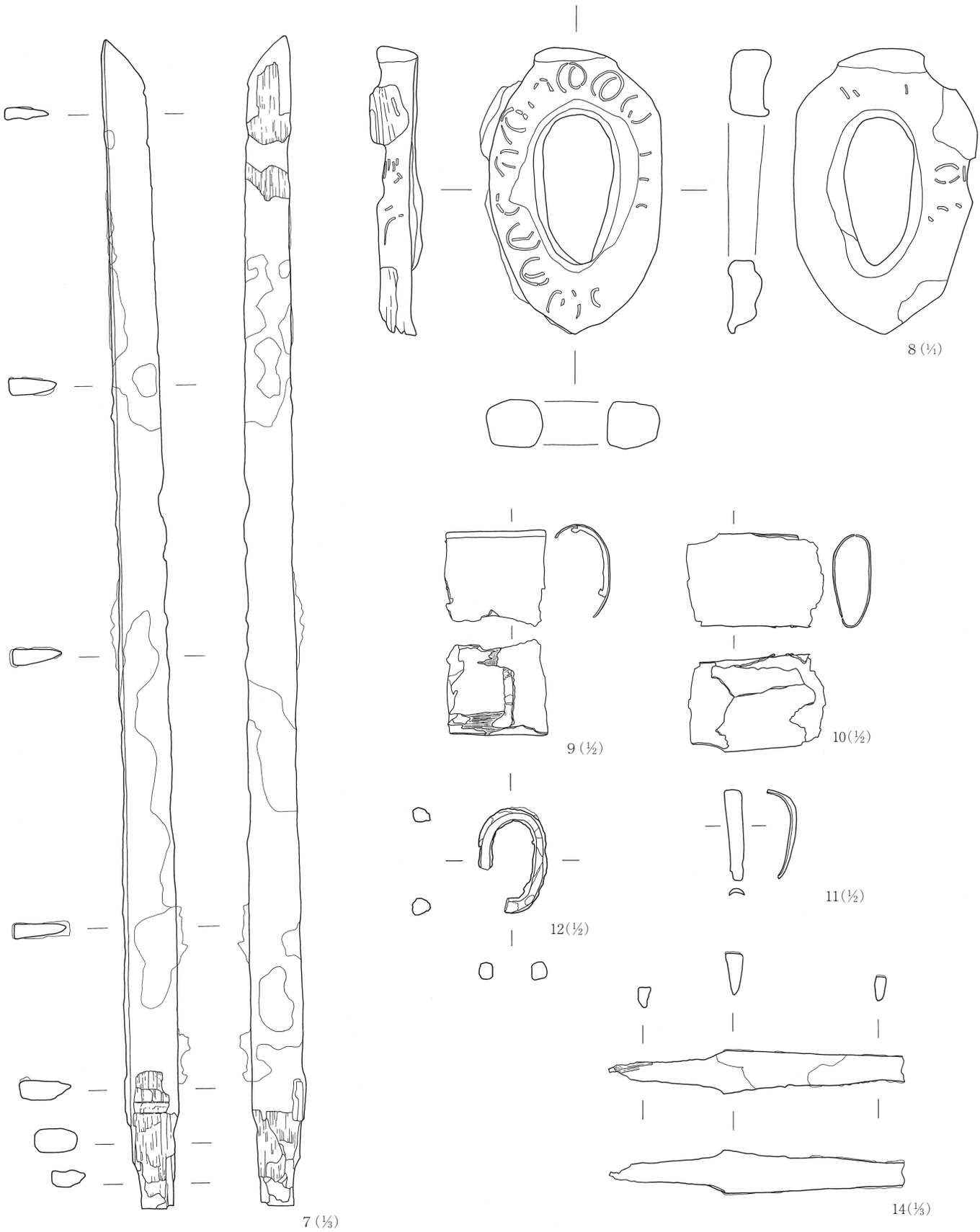
16図　B区1号古墳石室遺物出土状態図



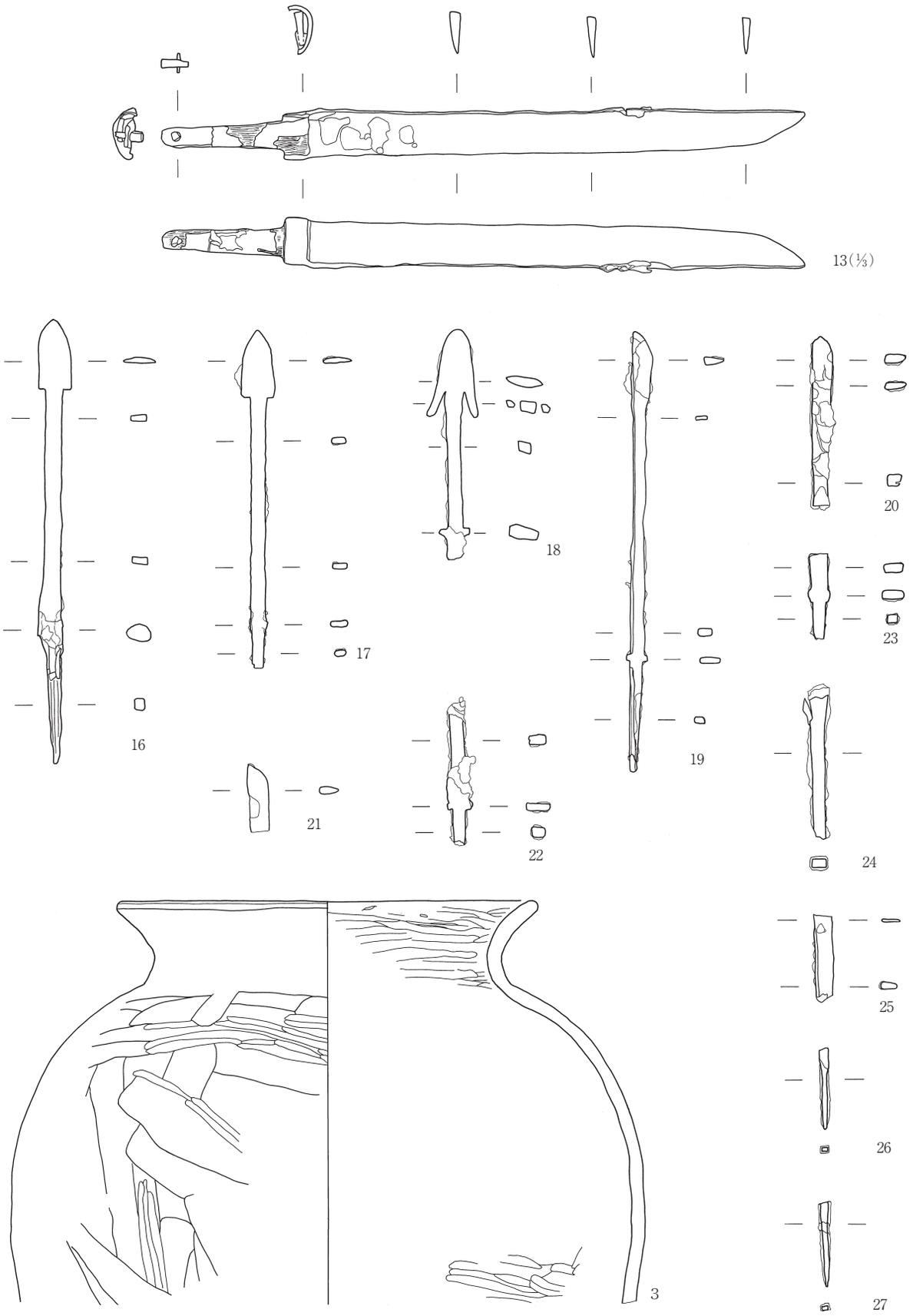
17図　B区１号古墳石室舗石状態図



18図　B区１号古墳出土遺物図（１）

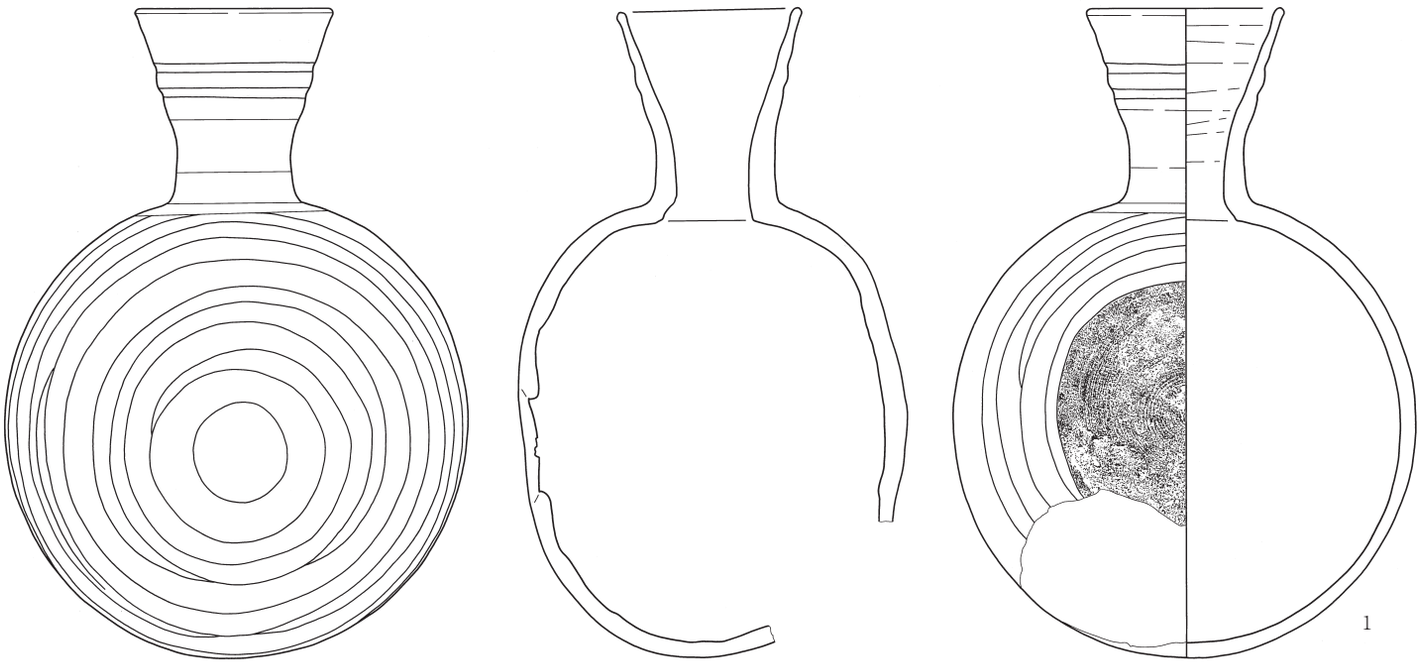


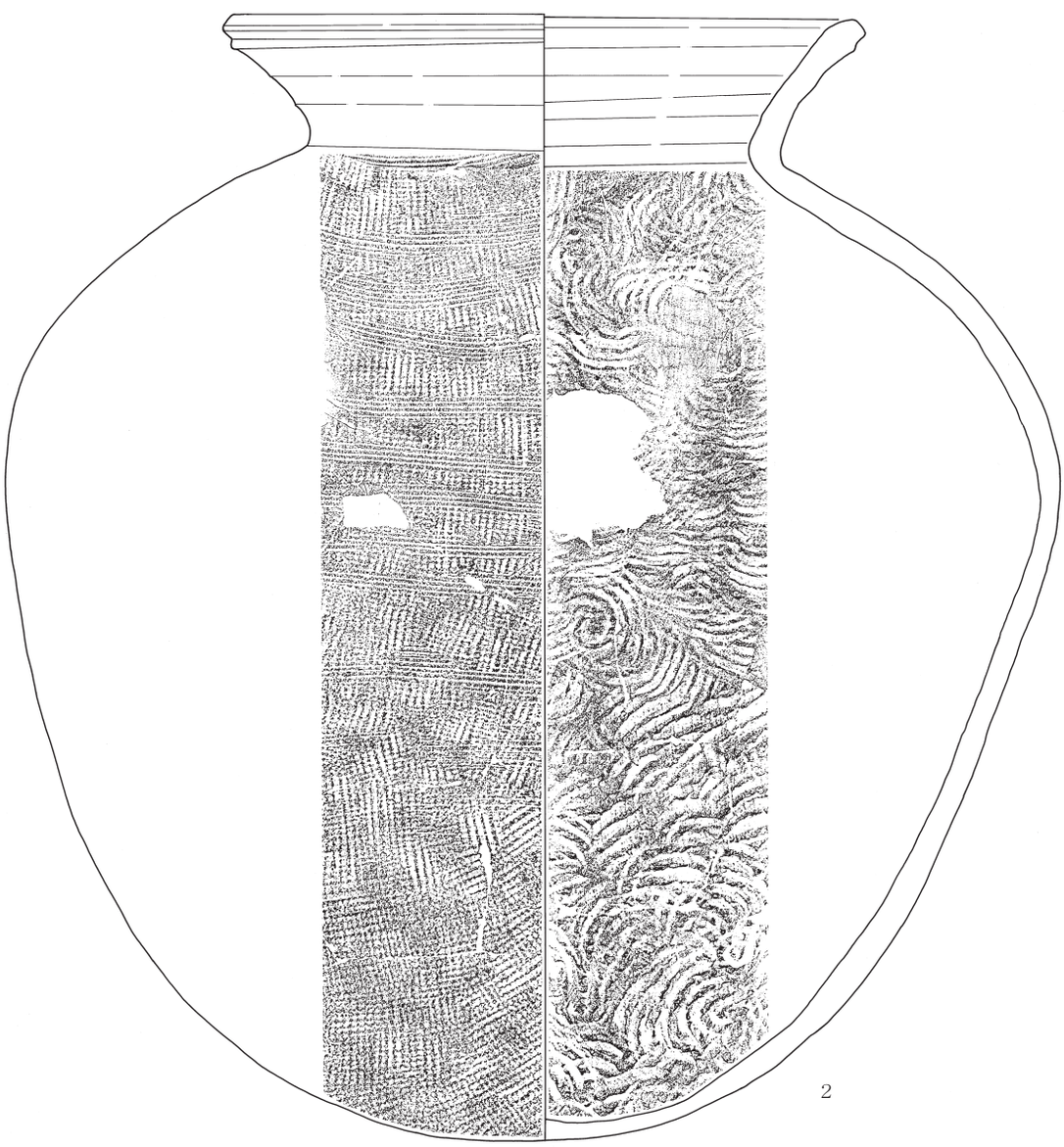
19図　B区１号古墳出土遺物図（２）



20図　B区１号古墳出土遺物図（３）

16～27(1/2)





21図　B区１号古墳出土遺物図（４）

B区１号古墳

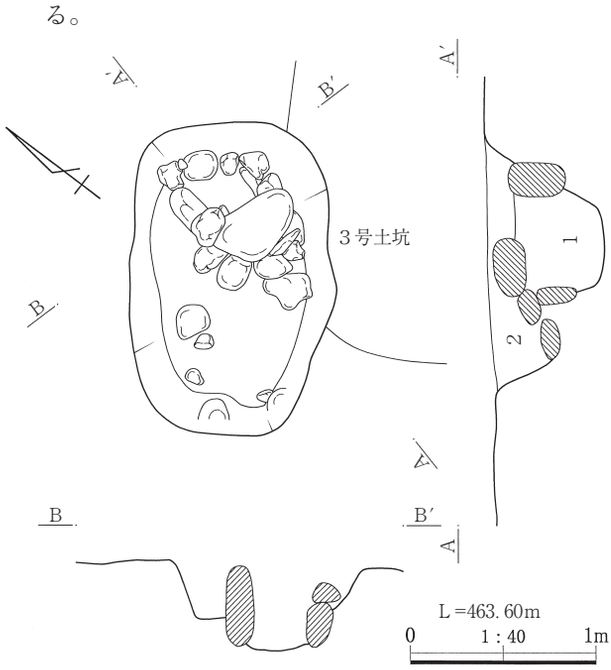
NO. PL	種　類 器　種	出土位置 残存率	計　測　値	胎土/焼成/ 色調	成形・整形の特徴	摘　　要
1 16	須恵器 長頸壺	周堀 一部欠損	口　7.0　胴 18.5 高 26.0	粗砂粒/還元焔/ 灰	ロクロ整形、回転右回りか。胴部表裏とも回転ヘラ削り。	
2 16	須恵器 甕	周堀 底部1/2欠	口 25.4 高 45.8	粗砂粒/還元焔/ 灰	ロクロ整形。胴部外面は平行叩き後カキ目、内面同心円状アテ具痕。	
3 16	土師器 甕	周堀 口～胴上半片	口 21.2　胴 32.6	粗砂粒/良好/ 明赤褐	口縁部横ナデ、胴部ヘラ削りに部分的なヘラ磨き。内面口縁部ヘラ磨き。	
NO.	種　　類	器　　種	出土位置	残存率	計　　測　　値	摘　　要
4	石製品	勾玉	玄室奥壁より	完形	長　2.9　幅　1.5　厚　0.7　孔　0.15	瑪瑙、PL17
5	金属製品	金環	玄室奥壁より	完形	径　2.5×2.3　厚　0.6	金銅製、PL17
6	金属製品	金環	石室裏込北東部	完形	径　2.6×2.4　厚　0.6	金銅製、PL17
7	鉄器	大刀	玄室右側壁際	柄端部欠損	長 64.3　刃部長 56.8　幅　3.0　厚　1.3	柄、鞘の木質残る
8	金属製品	鍔	玄室右側壁際	ほぼ完形	長　5.4　幅　3.2　厚　0.9　孔茎　2.7×1.3	表裏、側面に象眼
9	金属製品	鞘金具	玄室右側壁際	破片	長 (3.2)　幅 (3.0)、(2.0) 厚　0.05	銅製品、鍔より、PL17
10	金属製品	鞘金具	玄室右側壁際	破片	長 (4.9)　幅　3.4、1.35　厚　0.05	銅製品
11	金属製品	鞘金具	玄室右側壁際	破片	長 (3.35) 幅 (0.55)　　厚　0.06	
12	鉄器	鞘金具	玄室右側壁際	3/4		PL17
13	鉄器	小刀	玄室左側壁際	ほぼ完形	長 33.3 刃部長 26.0 柄長 7.3　幅 2.5　厚 1.4	PL17
14	鉄器	小刀	玄室右側壁際	刃部1/2欠損	長 16.3　柄長　6.4　幅　2.4　厚　0.9	PL17
15	鉄器	刀子	玄室中央	刃部1/2欠損	長 11.9　柄長　5.3　幅　1.5　厚　0.7	PL17
16	鉄器	鏃	玄室床面	完形	長 15.5　刃長　2.4　頸長　9.0　茎長　4.1	PL17
17	鉄器	鏃	玄室床面	茎端部欠損	長(11.8) 刃長　2.4　頸長　8.1　茎長　1.5	PL17
18	鉄器	鏃	玄室埋没土	茎部欠損	長 (8.0) 刃長　2.1　頸長　5.0	PL17
19	鉄器	鏃	玄室床面	完形	長 15.3　刃長　0.8　頸長 10.3　茎長　4.2	PL17
20	鉄器	鏃	玄室埋没土	頸部下半欠損	長 (6.05) 刃長　0.8　幅　0.75 厚　0.4	PL17
21	鉄器	鏃	玄室埋没土	刃部片	長 (2.4)　幅 0.7　厚　0.3	
22	鉄器	鏃	玄室床面	茎の一部	長 (5.2)　幅 0.75 厚　0.35	PL17
23	鉄器	鏃	玄室埋没土	茎の一部	長 (3.5)　幅 0.8　厚　0.3	PL17
24	鉄器	鏃	玄室埋没土	茎の一部	長 (6.4)　幅 0.5　厚　0.3	PL17
25	鉄器	鏃	玄室埋没土	茎の一部	長 (3.0)　幅 0.7　厚　0.4	
26	鉄器	鏃	玄室埋没土	茎端部	長 (3.0)　幅 0.4　厚　0.25	PL17
27	鉄器	鏃	玄室床面	茎の一部	長 (2.8)　幅 0.35 厚　0.25	PL17

Ｂ区４号土坑

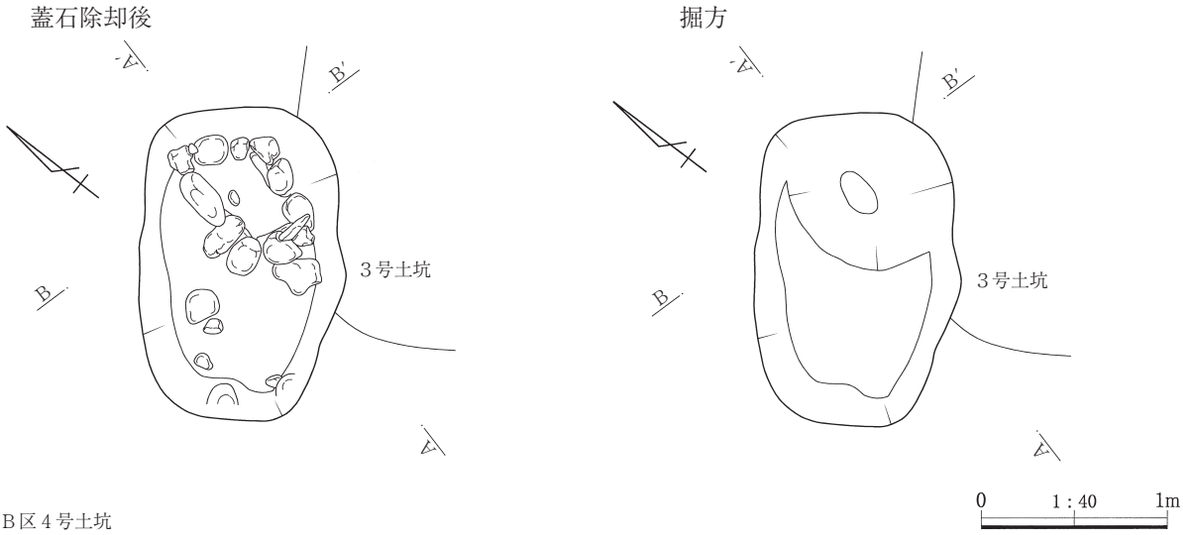
本土坑は検出した状況から小石棺墓と考えられる。位置は調査区の南部、X＝75,552・75,553－Y＝－66,740～－66,738である。確認時には北側の蓋石が耕作によって欠損した状態であったが残存状態良好であった。他遺構との重複関係は西辺側で３号土坑と重複する。新旧関係は本遺構のほうが古い。残存状態は一部耕作によって蓋石が失われているが比較的良好である。平面形態は楕円形を呈するが、西側のテラス状部分は本遺構に伴うか否かは確認できなかった。石棺墓本体の規模は長軸0.85m、短軸0.60m、深度0.70mを測る。

本体側面には長さ25～40㎝、幅15～30㎝、厚さ７～12㎝のやや扁平な礫を立て、その上に長さ50㎝、幅35㎝、厚さ17㎝前後の礫を蓋として置いてあった。埋没土はⅣ層Hr-FPを含め黒色土で埋没しており、埋没状態については不確定である。内部からは遺物などの出土はみられなかった。

本遺構の時期は形態から古墳時代後期に比定される。



22図　Ｂ区４号土坑平面図・断面図（１）



Ｂ区４号土坑
１.黒褐色土(10YR2/2) Ⅲ層とⅤ層の混合土、φ０,５㎝のHr-FPとφ５～10㎝のブロックを20%含む。
２.黒色土(10YR2/1)　Ⅲ層とⅤ層の混合土、φ０,５㎝のHr-FPをやや多く(40%程度)含む。

23図　Ｂ区４号土坑平面図・断面図(２)

４．平安時代

(１)竪穴建物

Ｂ区１号竪穴建物

本遺構はＢ区のほぼ中央、Ｘ＝75,560～75,557－Ｙ＝－66,732～－66,737に位置する。他遺構との重複関係は西辺でＢ区5号竪穴建物、北辺でＢ区1号古墳周堀と重複する。新旧関係は本遺構のほうがＢ区５号竪穴建物より古く、Ｂ区１号古墳周堀より新しい。残存状態はＢ区４号竪穴建物と重複する僅かな部分を欠くが他部分は良好である。本遺構の掘削は東辺のカマド南側から南辺、北辺の中程まで棚状に段を有している。そのため平面形態は棚状を含めると南辺西側に張出しを有する長方形、棚状の内側では南辺が北辺に比べてやや短いがほぼ長方形を呈する。規模は棚状を含めると長軸4.65m、短軸4.10m、内側で長軸3.97m、短軸3.47m、外側の各辺長が北辺3.40m、東辺4.80m、南辺3.70m、西辺4.50m内側の辺長が東辺4.02m、南辺2.95m、西辺3.70m、床面積は9.22㎡を測る。壁高は確認面から28～54㎝である。主軸方位はＮ－119°－Ｅを指す。

内部施設は柱穴、貯蔵穴、周溝などは検出されなかったが、前記のように東辺のカマド南側から南辺、北辺の中程まで棚状に段を有している。この棚状の段が棚であるかⅣ層Hr-FPの崩落によるものなのかは断面観察では判断が難しかったが、棚面の状態が比較的平坦であるため棚の可能性が高い。棚の幅は東辺50㎝、南辺の東側23㎝前後、西側50㎝、西辺５㎝ほどである。

床面は黒色土を10～20㎝ほど埋め戻してその上に壁際30～100㎝内側に３～５㎝ほどローム土と黒色土を混ぜ合わせた土を入れて踏み固めている。

カマドは東辺のほぼ中央に構築されている。残存状態は燃焼部天井部が竪穴建物廃棄時に壊されているが、その部分以外は良好な状態であった。規模は全長1.35m、幅1.40m、燃焼部全長0.75m、幅0.50mである。袖と煙道側面には径15～30㎝の亜角礫を多く使用して補強されていた。煙道は緩い傾斜をもちながら壁外に延びる。

掘方は床面より10～20㎝ほど下まで掘りこまれているが、床下土坑などの施設もなく掘方面もほとんど凹凸はみられない。

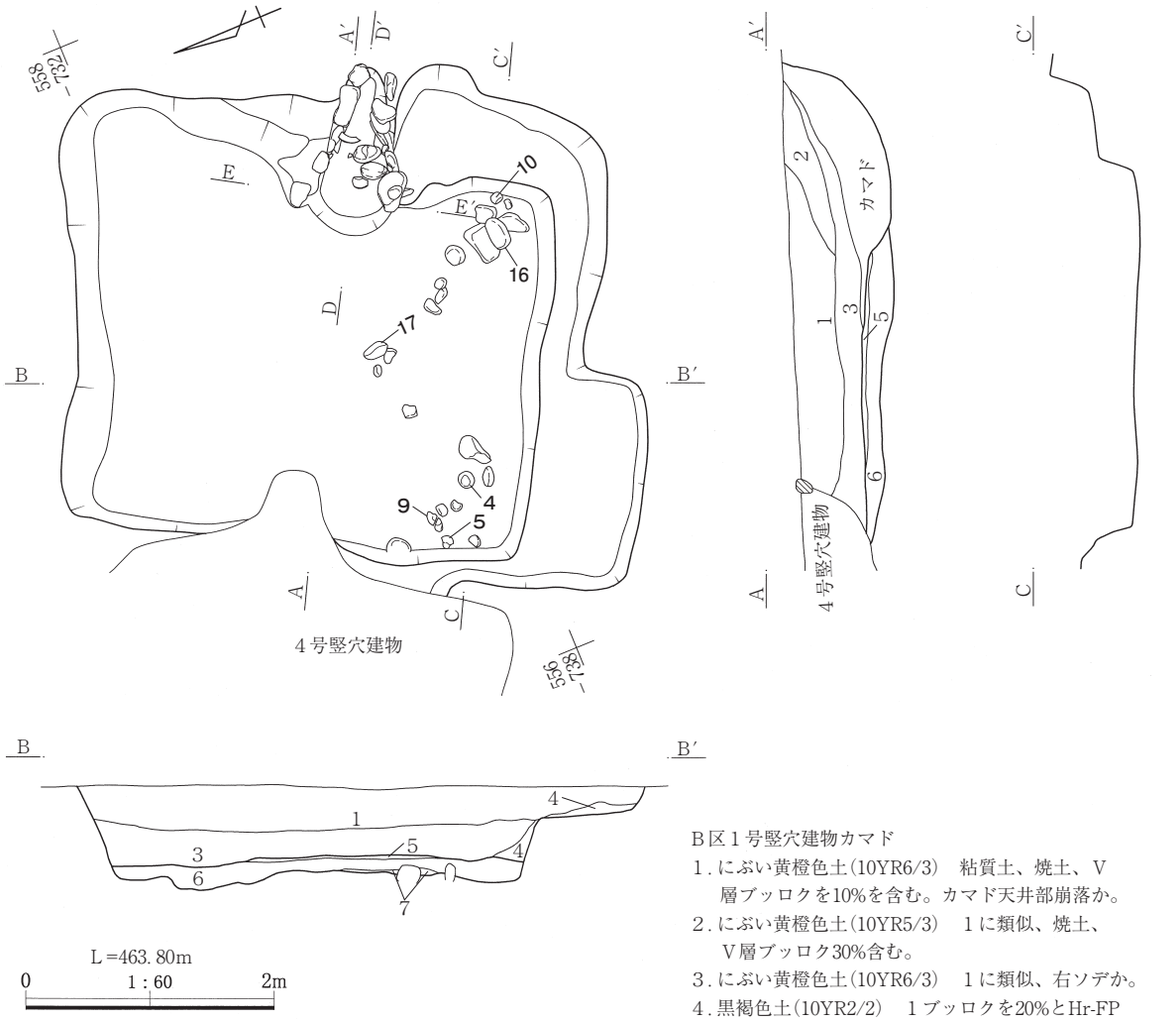
埋没状態は土層断面ではレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没である。

遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、石器などが出土している。その出土は東南角と西南角付近にややまとまった出土がみられた。その中でも９の須恵器椀はカマドと西南角床面より＋18㎝から出土したも

のが接合した。この他の遺物も床面よりやや高い位置から出土しているが、10の須恵器椀は棚から崩落した可能性も窺える。

廃棄状態

本遺構の存続年代は出土遺物から９世紀第３四半期に比定される。

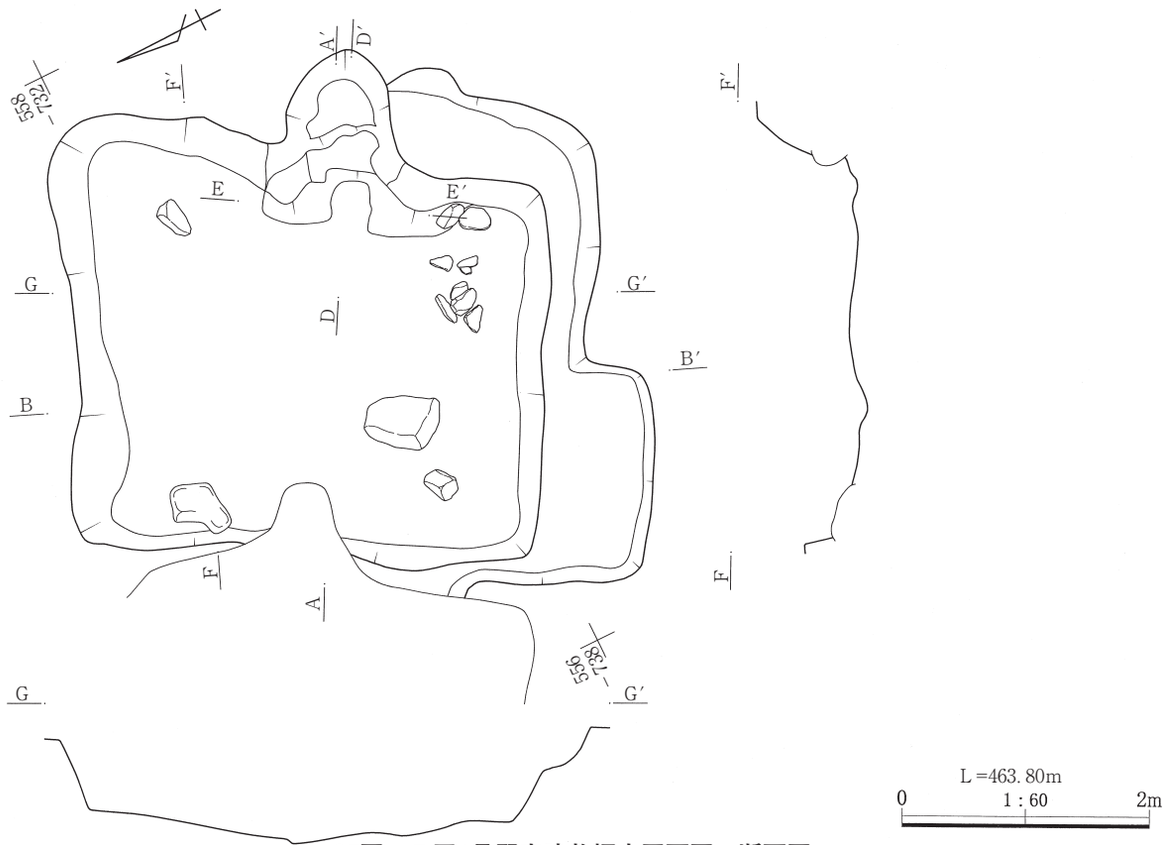


24図　B区１号竪穴建物平面図・断面図

B区１号竪穴建物
1．黒褐色土(10YR3/1)Hr-FP、ローム粒を含む、締まりと粘性あり。
2．褐色土(10YR4/4)　ローム粒多い、締まりと粘性あり。
3．黒褐色土(10YR3/1)ローム粒と焼土粒を含む。
4．黒褐色土(10YR3/1)３よりも焼土粒が多い。
5．にぶい黄橙色(10YR7/4)土と黒褐色土(10YR3/1)の混合、締まりよく固い、貼床土。
6．黒褐色土(10YR3/1)Hr-FP、小礫(φ１～５㎝)含む。
7．黒褐色土(10YR3/3)Hr-FP、小礫(φ１～５㎝)を微量含む。

B区１号竪穴建物カマド
1．にぶい黄橙色土(10YR6/3)　粘質土、焼土、Ⅴ層ブッロクを10%を含む。カマド天井部崩落か。
2．にぶい黄橙色土(10YR5/3)　１に類似、焼土、Ⅴ層ブッロク30%含む。
3．にぶい黄橙色土(10YR6/3)　１に類似、右ソデか。
4．黒褐色土(10YR2/2)　１ブッロクを20%とHr-FPを５%含む。
5．暗褐色土(10YR3/3)　焼土粒５%、Hr-FPを３%含む。
6．焼土ブロック。
7．黒色土(10YR2/1)　Ⅴ層と同様、Ⅴ層の流れ込み。
8．にぶい黄橙色土(10YR6/3)　天井、粘土、焼土粒３%含む。
9．にぶい黄橙色土(10YR6/3)　粘土、左ソデ。
10．黒色土(10YR2/1)　Ⅴ層と同様。
11．暗褐色土(10YR3/3)　Hr-FP、焼土の小ブロックを３%含む、粘質土。
12．浅黄色土(2.5Y7/3)と黒色土(10YR2/1)の混合、貼床土、よく締まり固い。
13．黒褐色土(10YR3/1)　Hr-FP、礫(φ５～20cm)含む。
14．黒褐色土(10YR3/2)　焼土と浅黄色土(2.5Y7/3)を含む。

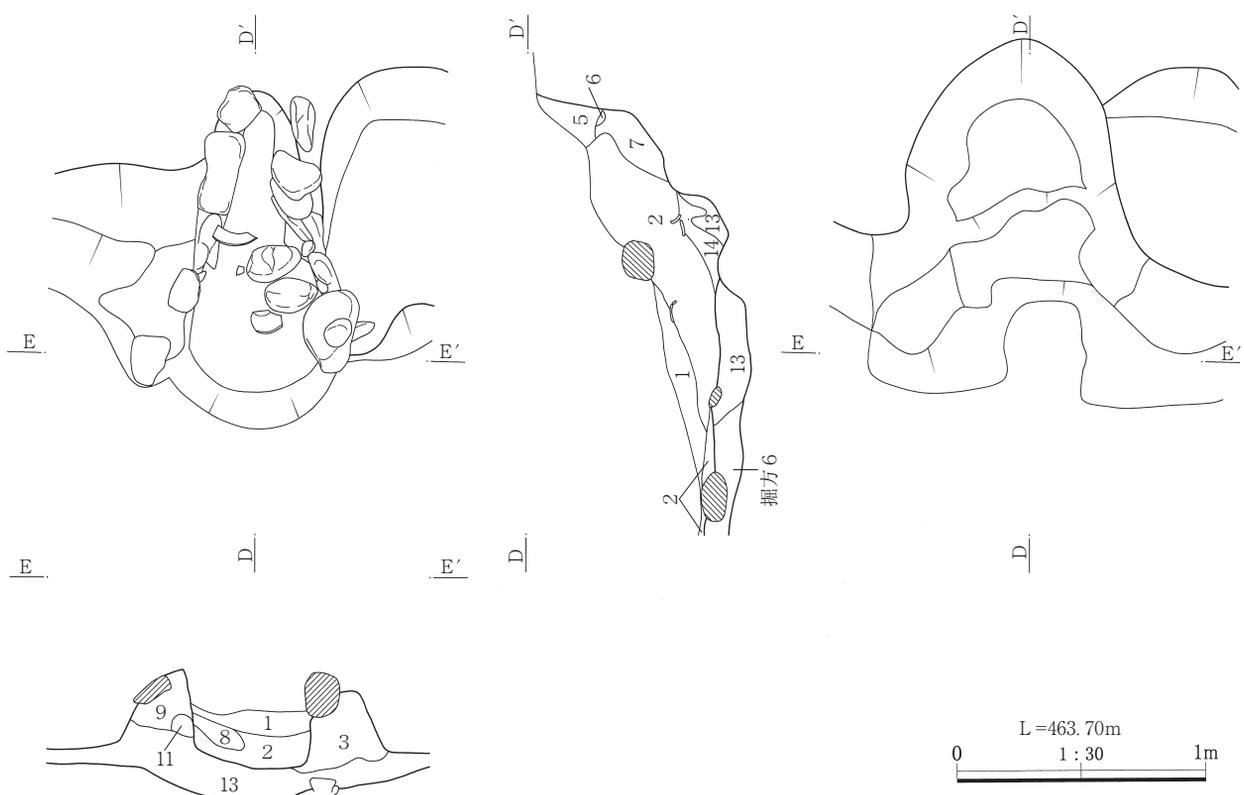
掘方



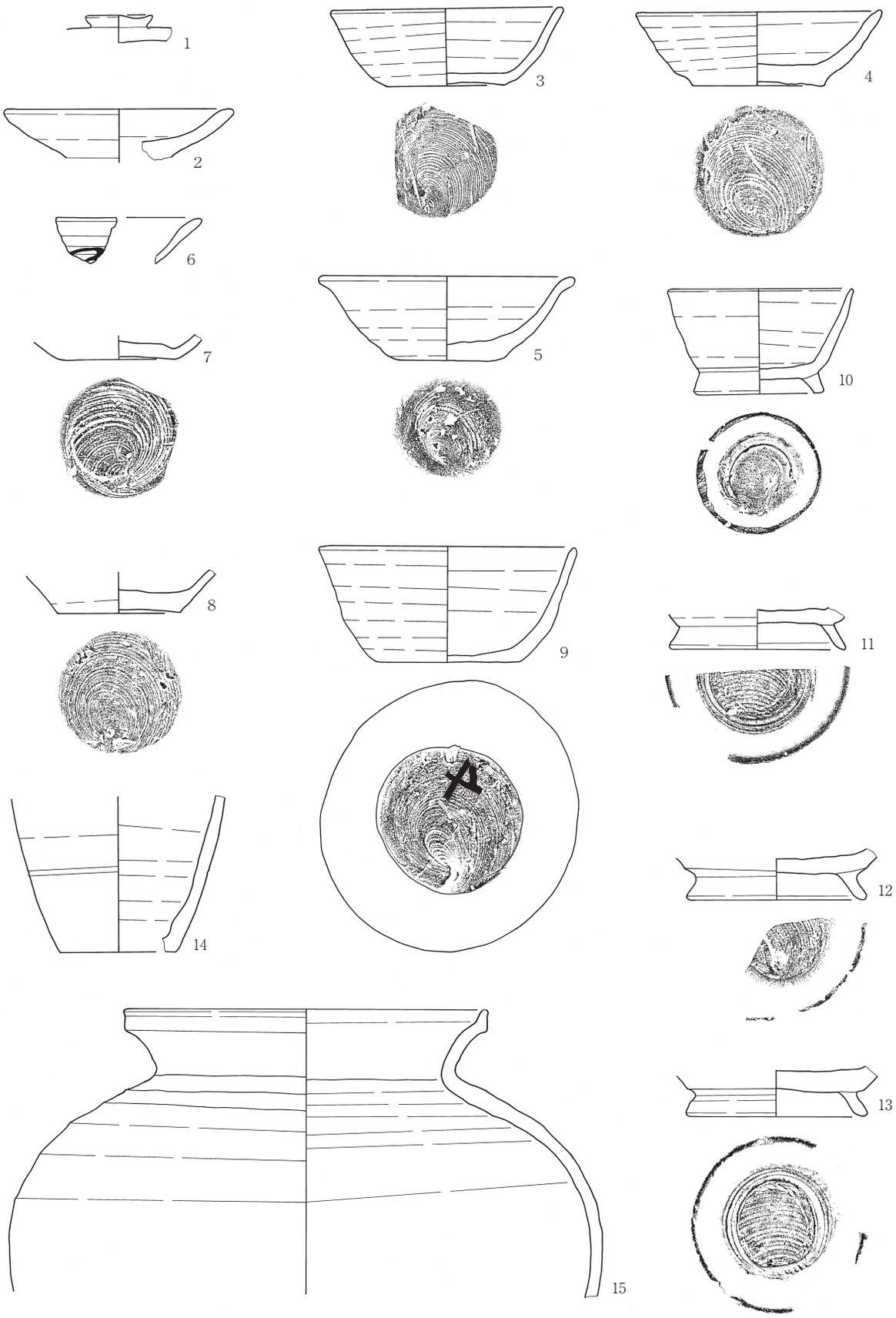
25図　B区1号竪穴建物掘方平面図・断面図

カマド

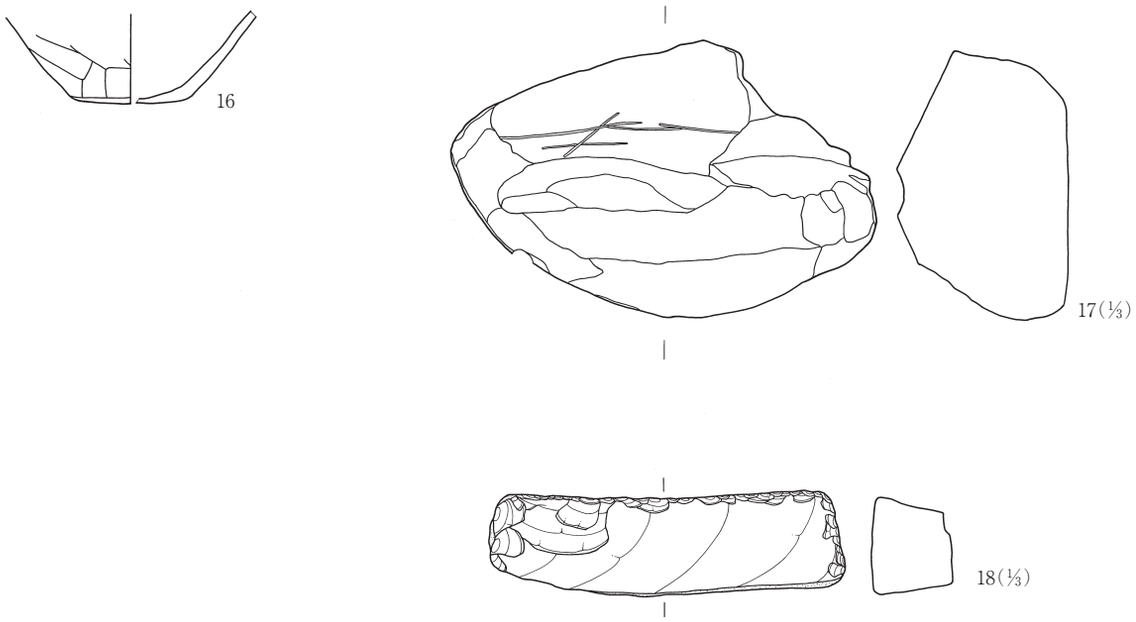
カマド掘方



26図　B区１号竪穴建物カマド平面図・断面図



27図　B区１号竪穴建物出土遺物図（１）



28図　B区１号竪穴建物出土遺物図（２）

B区１号竪穴建物

NO. PL	種　類 器　種	出土位置 残存率	計　測　値	胎土/焼成/ 色調	成形・整形の特徴	摘　　要
1	須恵器 杯蓋	埋没土 摘み	摘　3.4	細砂粒/還元焔/ 灰	ロクロ整形、摘みは貼付。	
2	須恵器 皿	埋没土 口縁部片	口 11.4　底　5.4	細砂粒/酸化焔/ 灰黄	ロクロ整形、摘みは貼付。回転方向不明。高台は貼付。	混入か
3	須恵器 杯	埋没土 1／3	口 11.8　底　6.0 高　4.0	細砂粒/還元焔/ にぶい灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り。	
4 18	須恵器 杯	+18 完形	口 12.5　底　7.0 高　3.9	細砂粒/還元焔/ 灰	ロクロ整形、回転右左回り。底部は回転糸切り。	
5 18	須恵器 杯	+57 1／3	口 12.8　底　5.0 高　4.4	細砂粒/酸化焔/ 灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り。	
6	須恵器 杯	埋没土 口縁部片		細砂粒/酸化焔/ 灰オリーブ	ロクロ整形。	口縁部に墨書、判読不可能
7	須恵器 杯	埋没土 底部	底　6.0	細砂粒/還元焔/ 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り。	
8	須恵器 杯	埋没土 底部	底　6.4	細砂粒/還元焔/ 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り。	
9 18	須恵器 椀	カマド ほぼ完形	口 13.2　底　7.3 高　6.0	粗砂粒/還元焔/ 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り。	底部に「寸」(釈文は「村」)の墨書。
10 18	須恵器 椀	+32 完形	口　9.4　底　6.1 高　6.4	粗砂粒/還元焔/ 青灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。	
11	須恵器 椀	埋没土 底部	底　9.0	細砂粒/還元焔/ 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。	
12	須恵器 椀	埋没土 底部片	底　9.2	細砂粒/還元焔/ 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。	
13	須恵器 椀	埋没土 底部	底　9.2	細砂粒/還元焔/ 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。	
14	灰釉陶器 長頸壺	埋没土 胴部下位片	底　6.0	微砂粒/還元焔/ 灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転ヘラ削り。	
15 18	須恵器 広口壺	カマド 口～胴上半片	口 18.6	粗砂粒/還元焔/ 灰	ロクロ整形、胴部上位は回転ヘラ削り。	
16	土師器 甕	+20 底部片	底　4.5	細砂粒/良好/ 赤褐	口縁部下位は斜め方向のヘラ削り。	
NO.	種　類	器　種	出土位置	残存率	計　測　値	摘　　要
17	石器	砥石	+48	完形	長 17.0　幅 11.1　厚　6.8　重 1603.5	砥沢石、PL18
18	石器	不明	埋没土	ほぼ完形	長 14.1　幅　4.1　厚　3.8　重 339.0	安山岩、PL18

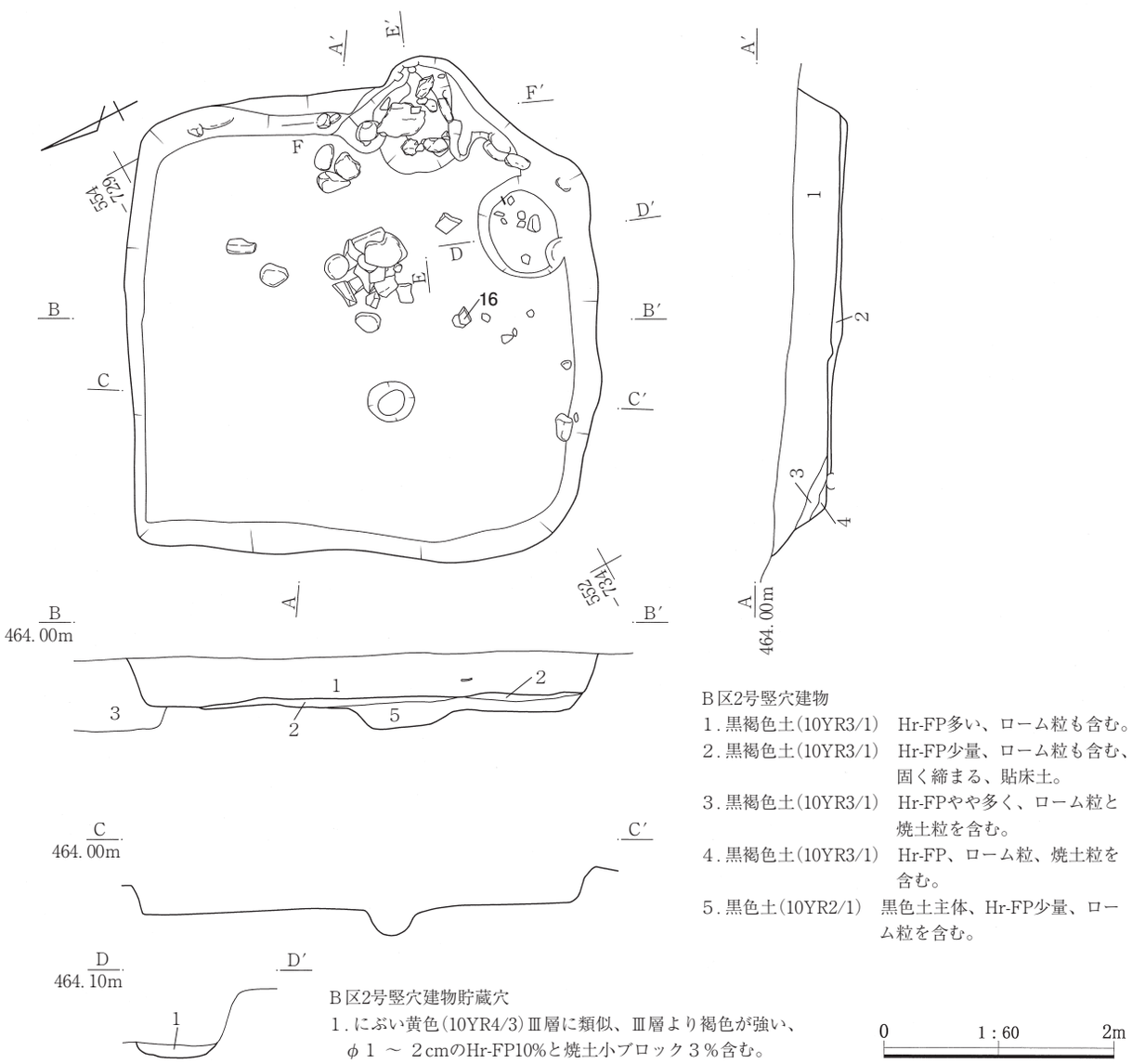
Ｂ区2号竪穴建物

本遺構はＢ区の中ほど東より、Ｘ＝75,550～75,555－Ｙ＝－66,728～－66,733に位置する。他遺構との重複関係は北辺側でＢ区３号住居と重複する。新旧関係は本遺構のほうが新しい。平面形態は南東角を不鮮明ではあるがほぼ方形に近い形態を呈する。残存状態は良好である。規模は長軸4.05m、短軸3.97m、北辺3.64m、東辺3.88m、南辺3.56m、西辺3.82m、床面積は11.42㎡を測る。壁高は確認面より24～34cmである。主軸方位はＮ－123°－Ｅを指す。

内部施設は周溝は検出されなかったが、貯蔵穴と柱穴１本を検出した。貯蔵穴は東南角壁際に掘られていた。平面形態は楕円形で規模は長径87cm、短径72cm、深度14cmを測る。内部からは須恵器甕小片（未掲載）や礫が出土している。柱穴は中央より僅かに西に寄った位置に掘られていた。平面形態は楕円形で規模は長径42cm、短径35cm、深度26cmを測る。

床面は一部黒色土を10～20cmほど埋め戻してその上に５cmほど黒色土に若干ローム土を混ぜ合わせた土を入れて踏み固めている。

廃棄状態



29図　Ｂ区２号竪穴建物平面図・断面図

カマドは東辺の中央より若干南へ寄った位置に構築されていた。残存状態は燃焼部から煙道部天井部が竪穴建物廃棄時に壊されているが、その部分以外は比較的良好な状態であった。規模は全長0.97m、幅1.13m、燃焼部全長0.52m、幅0.50mである。袖には径10～20cmの円礫、角礫を使用して補強しているが他の住居より使用量は少ない。また、天井部には40×30cmの扁平な板状の礫を使用して補強していた。煙道部は屋外に延びるが、１号・３号竪穴建物ほど延びないようである。

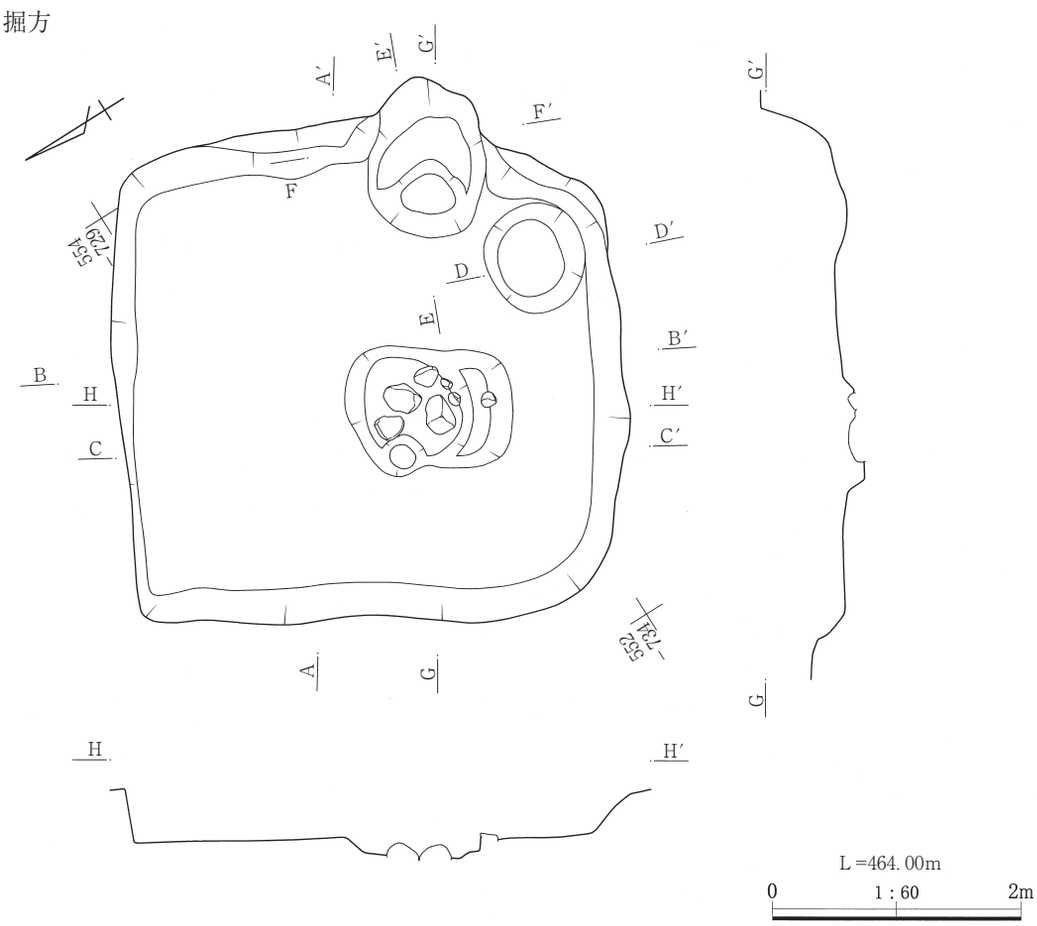
掘方はほぼ中央から隅丸長方形で長軸134cm、短軸95cm、深度20cmを測る土坑を検出した。内部からは径20～30cmの亜角礫が出土しただけで性格などを特定できる資料は見られなかった。

埋没状態は東辺際で僅かに三角堆積が観察できる他はⅣ層Hr-FPを多量に含む黒褐色土で短期間に埋没した様子が観察できた。

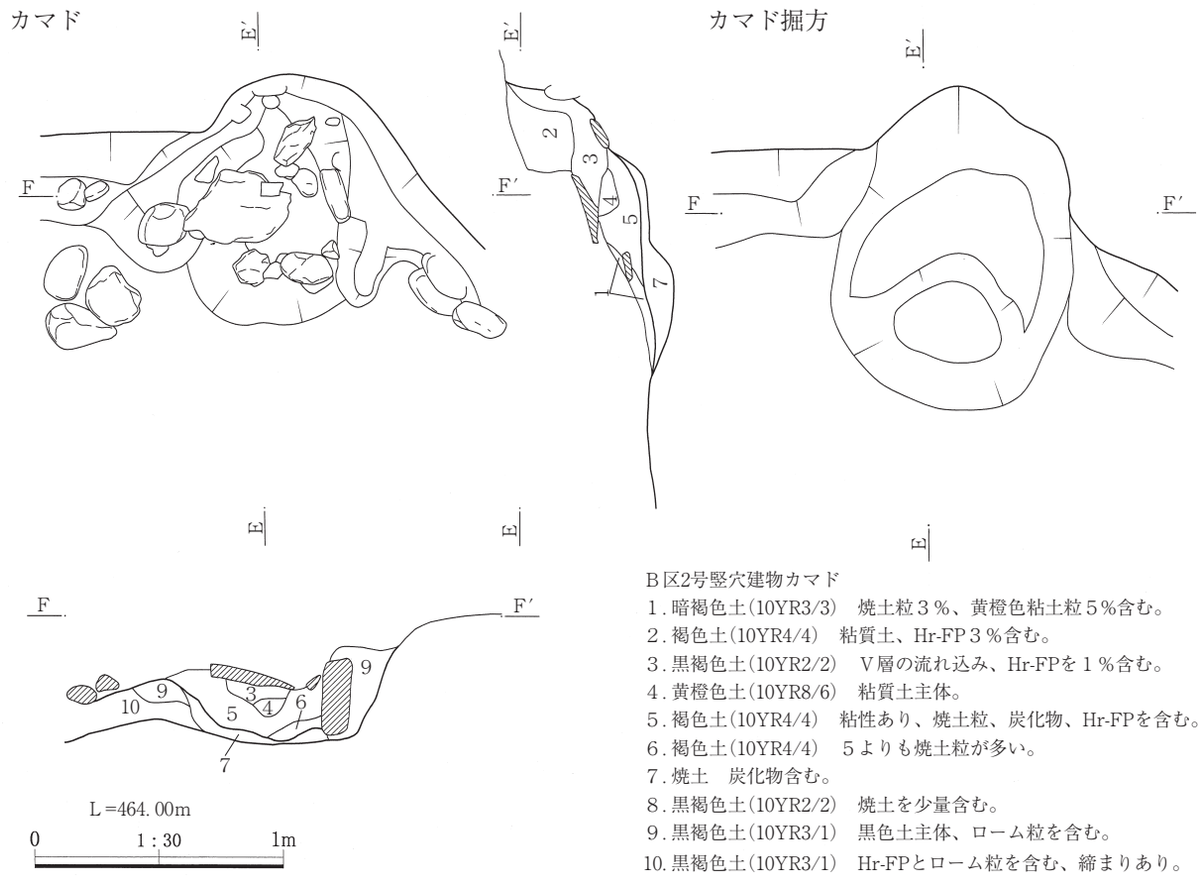
遺物は土師器、須恵器、石器、鉄器などが出土しているが、大部分は小片で図示できたものは少ない。１の土師器杯、17の砥石はカマド内、15の須恵器羽釜は掘方からの出土である。また、床面中央からは径15～30cmの礫が積み上げられた状態で出土していた。

本遺構の存続年代は出土遺物から10世紀第１四半期に比定される。

掘方

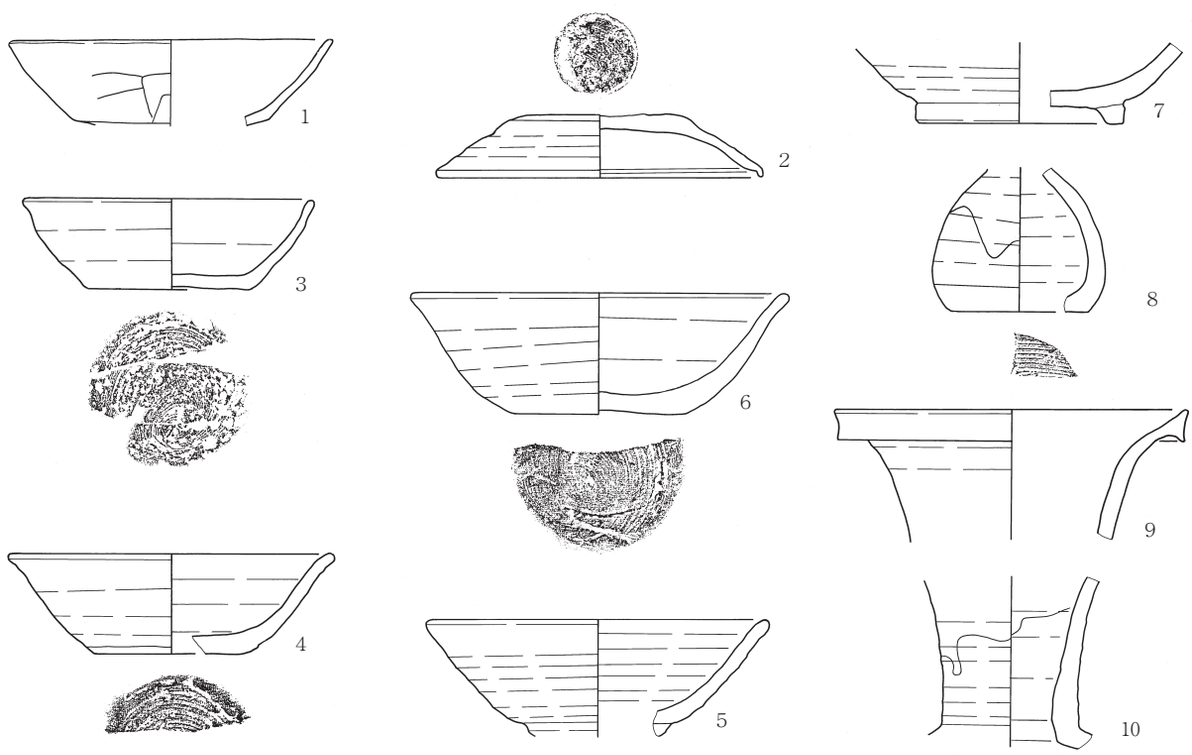


30図　Ｂ区２号竪穴建物掘方平面図・断面図

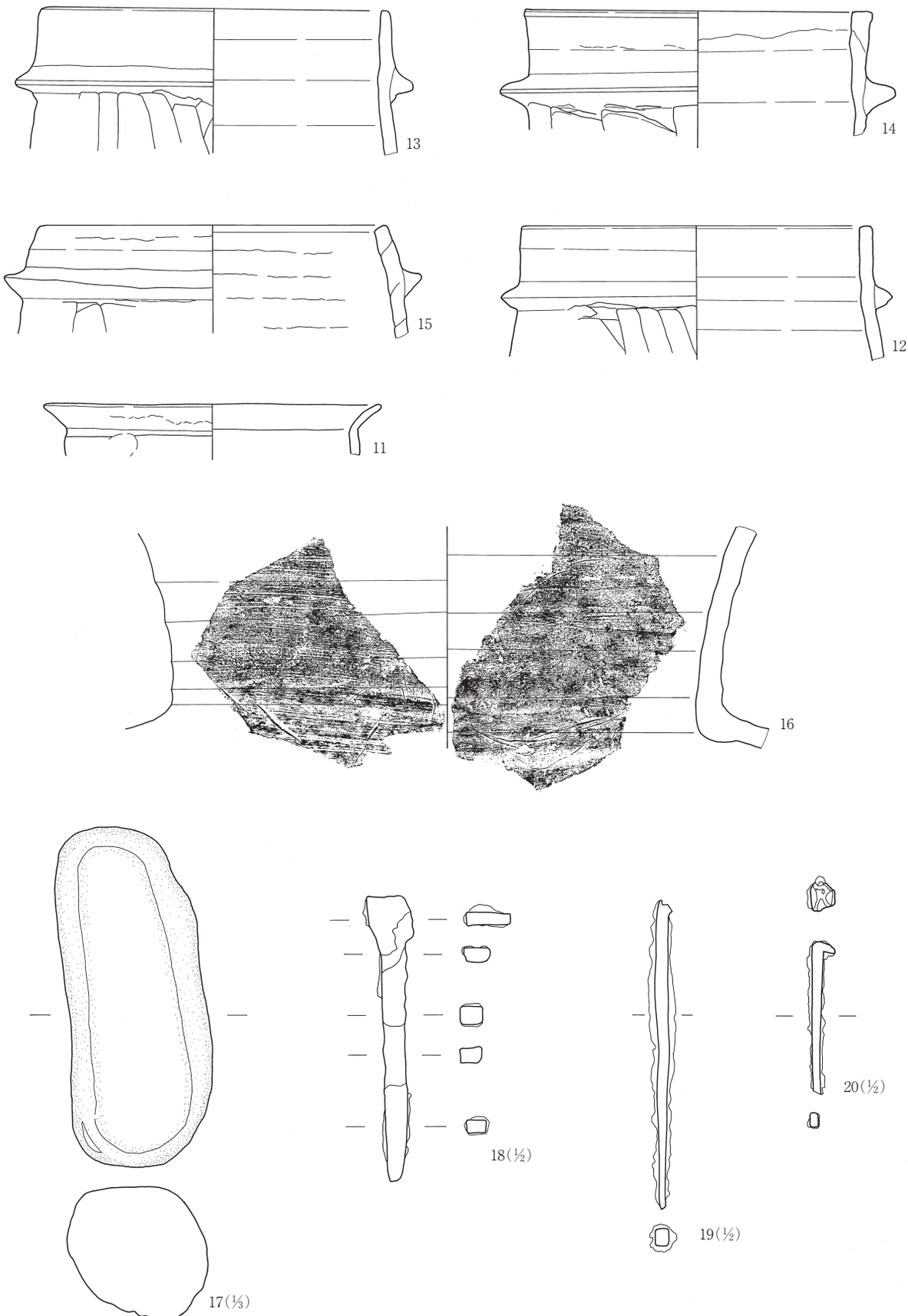


B区2号竪穴建物カマド
1．暗褐色土(10YR3/3)　焼土粒３％、黄橙色粘土粒５％含む。
2．褐色土(10YR4/4)　粘質土、Hr-FP３％含む。
3．黒褐色土(10YR2/2)　Ⅴ層の流れ込み、Hr-FPを１％含む。
4．黄橙色土(10YR8/6)　粘質土主体。
5．褐色土(10YR4/4)　粘性あり、焼土粒、炭化物、Hr-FPを含む。
6．褐色土(10YR4/4)　５よりも焼土粒が多い。
7．焼土　炭化物含む。
8．黒褐色土(10YR2/2)　焼土を少量含む。
9．黒褐色土(10YR3/1)　黒色土主体、ローム粒を含む。
10．黒褐色土(10YR3/1)　Hr-FPとローム粒を含む、締まりあり。

31図　B区２号竪穴建物カマド平面図・断面図



32図　B区２号竪穴建物出土遺物図（１）



33図　B区２号竪穴建物出土遺物図（２）

Ｂ区２号竪穴建物

NO. PL	種　類 器　種	出土位置 残 存 率	計　測　値	胎土/焼成/ 色調	成形・整形の特徴	摘　　要
1	土師器 杯	カマド 口縁部小片	口 12.8　底　7.6 高（3.4）	微砂粒/良好/ 鈍い褐	口縁部上半横ナデ、下半横方向のヘラ削り。底部ヘラ削り。	
2 18	須恵器 杯蓋	埋没土 1/2	口 13.0　高 (2.4)	細砂粒/還元焔/ 灰	ロクロ整形、回転右回り。天井部は回転糸切り後周辺部ナデ。摘みは貼付であるが欠落。	
3 18	須恵器 杯	埋没土 口縁部一部欠	口 11.4　底　6.4 高　3.6	細砂粒/酸化焔/ にぶい黄橙		
4	須恵器 椀	埋没土 １／４	口 12.6　底　6.2 高　4.0	細砂粒/酸化焔/ にぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
5	須恵器 椀	埋没土 口縁部片	口 13.4　底　3.0 高 (4.7)	細砂粒/酸化焔ぎみ /灰黄褐	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付。	
6 18	須恵器 椀	埋没土 １／３	口 14.6　底　7.0 高 (4.8)	粗砂粒/酸化焔ぎみ /灰オリーブ	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り、高台は貼付であるが欠落。	
7	須恵器 椀	埋没土 底部片	底　8.2	粗砂粒/還元焔/ 灰白	ロクロ整形、回転右回りか。高台は貼付。	
8 18	灰釉陶器 小瓶	埋没土 胴部片	底　5.6	微砂粒/還元焔/ 灰白	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転糸切り、胴部最下部は回転ヘラ削り。	大原2号窯式期か
9	灰釉陶器 長頸壺	埋没土 口縁部片	口 13.8	黒色粒/還元焔/ 灰白	ロクロ整形。内面は全面釉薬が付着。	
10	灰釉陶器 長頸壺	埋没土 頸部片	頸　6.5	黒色粒/還元焔/ 灰白	ロクロ整形。内面は内外面に釉薬が付着。	
11	土師器 甕	埋没土 口縁部小片	口 17.6	細砂粒/良好/ 明赤褐	口縁部横ナデ、頸部ナデ。	
12	須恵器 羽釜	埋没土 口縁部片	口 18.0　鍔 20.4	細砂粒/酸化焔/ にぶい黄褐	ロクロ整形、鍔は貼付。胴部は縦方向のヘラ削り。	
13	須恵器 羽釜	埋没土 口～胴上位片	口 19.4　鍔 20.6	細砂粒/酸化焔/ オリーブ黒	ロクロ整形、鍔は貼付。胴部は縦方向のヘラ削り。	
14 18	須恵器 羽釜	埋没土 口～胴上位片	口 18.0　鍔 20.4	粗砂粒/酸化焔/ にぶい黄橙	ロクロ整形、鍔は貼付。胴部は縦方向のヘラ削り。	
15	須恵器 羽釜	堀方 口縁部片	口 18.0　鍔 21.6	粗砂粒/還元焔ぎみ /灰白	内外面に輪積み痕が残る。ロクロ整形、鍔は貼付。胴部は縦方向のヘラ削り。	
16	須恵器 甕	+13 口縁部下半片	頸 29.0	粗砂粒/還元焔ぎみ /灰黄	ロクロ整形。	

NO.	種　類	器　種	出土位置	残 存 率	計　測　値	摘　　要
17	石器	砥石	カマド	完形	長 17.7　幅　7.4　厚　7.0　重 1453.1	砥沢石、PL19
18	鉄器	鑿か	埋没土	上部欠損	長 (9.8)　幅　1.7　厚　0.7	PL19
19	鉄器	鏃または釘	埋没土	柄部か	長(10.7)　幅　0.9　厚　0.9	PL19
20	鉄器	釘	埋没土	上半部	長 (5.4)　幅　1.0　厚　1.0	PL19

Ｂ区3号竪穴建物

本遺構はＢ区の中央東端、Ｘ＝75,553～75,5559－Ｙ＝－66,726～－66,731に位置する。他遺構との重複関係はＢ区２号竪穴建物、Ｂ区１号古墳周堀と重複する。新旧関係は本遺構のほうがＢ区２号竪穴建物より古く、Ｂ区１号古墳周堀より新しい。残存状態はＢ区２号竪穴建物と重複する部分の上位を欠くが全体的には良好である。平面形態は南北が若干長いがほぼ方形を呈する。規模は長軸5.53m、短軸5.53m、北辺4.92m、東辺5.80m、南辺4.72m、西辺4.77m、床面積は24.46㎡を測る。壁高は確認面より30～64㎝である。主軸方位はＮ－115°－Ｅを指す。

内部施設は柱穴、周溝は検出されなかったが、貯蔵穴は検出できた。貯蔵穴は東南角よりに位置し、平面形態は楕円形で規模は長径80㎝、短径53㎝、深度15㎝を測る。内部からは礫とともに９の須恵器椀が出土している。　床面は南西部では20㎝前後、その他の箇所は５㎝ほど黒色土で埋め戻した上にローム土、黒色土を版築状に固めて床面にしていた。

カマドは東辺のやや南へ寄った位置に構築されていた。残存状態は燃焼部の焚口付近の天井部が壊され、燃焼部、煙道部の内部では天井部の崩落がみられたが、その部分以外は非常に良好な状態であった。規模は全長1.83m、幅1.70m、燃焼部全長0.70m、幅0.53mである。袖には長さ30㎝前後の亜角礫を並べて立てて補強し、その礫に長さ40㎝前後、厚さ10

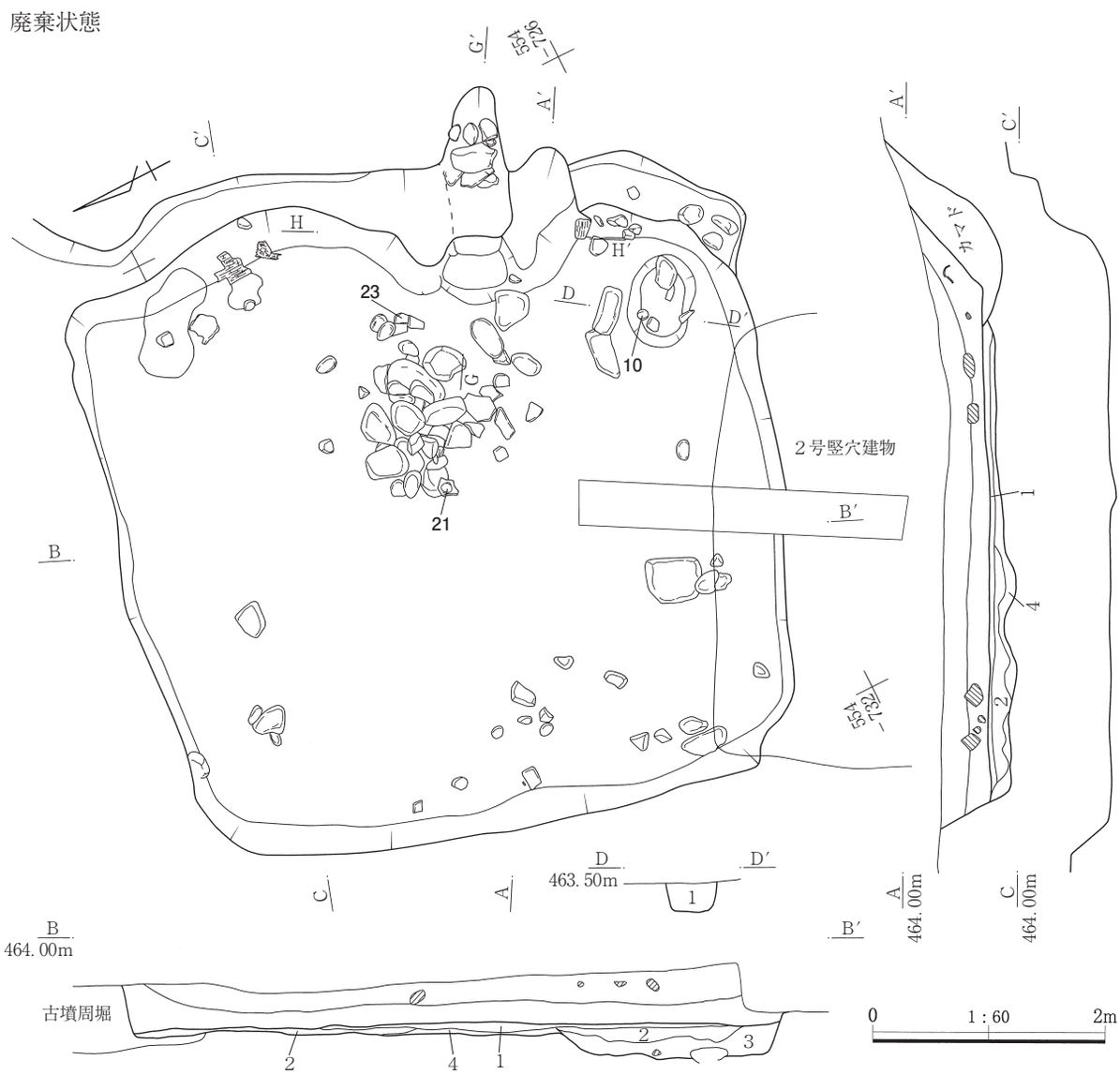
～15cmの扁平な礫を多く渡し天井部の補強としその周りを黄橙色粘土を貼り付けている。煙道部は壁外に長く延びる。

掘方は南側３分の１ほどが他の部分より20cmほど深く掘り込まれていた。また、北東角際ではやや歪んだ楕円形で径70×50cm、深度25cmの土坑状の落ち込みが検出されたが、この落ち込みもＢ区２号竪穴建物のものと同様で８点ほどの礫が出土しただけであった。

埋没状態は東から多量のⅣ層Hr-FPを含む黒褐色土で埋没した様子が観察できることから自然埋没である。なお、東辺カマド北側では黄橙色粘土の流れ込みとともに焼土、炭化材が確認され、部分的に屋根材が焼失した様子が窺えた。

遺物は土師器、須恵器、石器、鉄器などが出土しているが、大部分は小片で図示できたものは遺物量の割には少ない。６の須恵器杯、23の須恵器甕、19の土師器甕はカマド内、15の土師器甕、24の石製紡錘車は掘方、18の釘は床面からの出土である。また、床面中央からは径15～50cmの礫が多量に積み上げられた状態で出土していた。

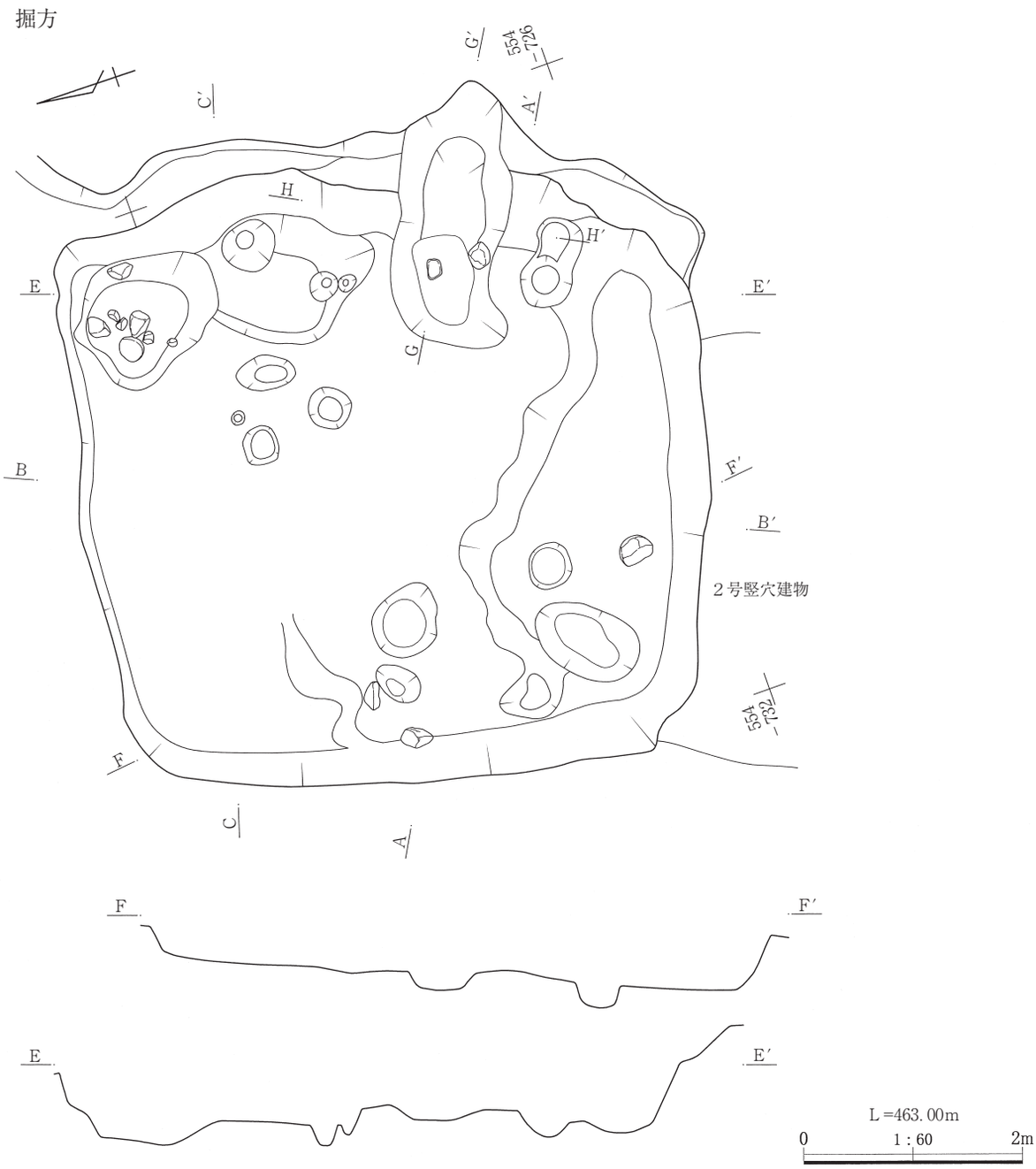
本遺構の存続年代は出土遺物から９世紀第３四半期に比定される。



34図　Ｂ区３号竪穴建物平面図・断面図

B区３号竪穴建物
1．黄橙色土(10YR7/8)と黒褐色土(10YR3/1)との互層、２～３㎝の互層で数層が重なる、締まりよく固い。貼床土。
2．暗褐色土(10YR3/3) Hr-FP、黄橙色土粒(10YR7/8)、礫(φ１～３㎝)を多く含む。
3．黒色土(10YR2/1) Hr-FP 、小礫(φ１ ～５㎝)を含む。
4．黒色土(10YR2/1) Hr-FPをごく少量含む。

B区３号竪穴建物貯蔵穴
1．黒褐色土(10YR3/2) Ⅲ層に類似、黄橙色粘土の小ブロックを10％含む。

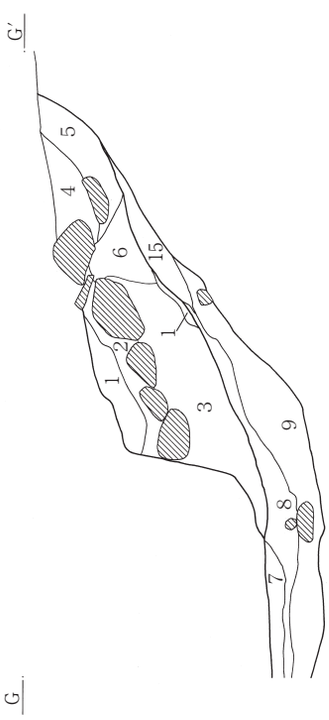


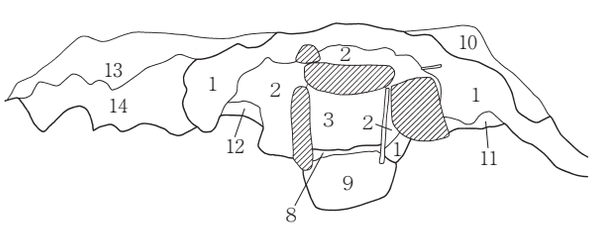
35図　B区３号竪穴建物掘方平面図・断面図

カマド

B区３号竪穴建物カマド
1. 黄橙色土(10YR8/6) カマド天井部、粘土。
2. １の焼土化したものカマド天井部、粘土。
3. 黒褐色土(10YR2/3) Ⅴ層の流れ込み、焼土粒を５％含む。
4. 暗褐色土(10YR3/3) 竪穴建物埋没土と同様、流れ込み。
5. 黒褐色土(10YR2/3) 焼土含む。
6. 褐灰色土(7.5YR4/1) 焼土多く含む、締まり弱くボソボソの状態。
7. 黄橙色土(10YR8/6)と黒褐色土(10YR2/3)の互層、貼り床、固く締まっている。
8. 焼土 黄橙色土が焼土化したものか、黒褐色土(10YR2/3)、炭化物を含む。
9. 暗褐色土(10YR3/3) 小礫(φ１～３㎝)を多く含む。
10. にぶい黄橙色土(10YR6/4)黄橙粘土(カマド構築土)とⅤ層、Ⅲ層を30％含む。
11. 黒褐色土(10YR2/2)焼土、黄橙色土粒を含む。
12. 黒褐色土(10YR2/2)焼土粒、黄橙色土粒を含む。
13. 黄橙色土(10YR8/6)黄橙粘土(カマド構築土)の流れだし。
14. 黒褐色土(10YR2/2)Ⅴ層主体、黄橙色粘土ブロックを５％とHr-FPを３％含む。
15. 暗褐色土(10YR3/2)焼土、炭化物を多量に含む。

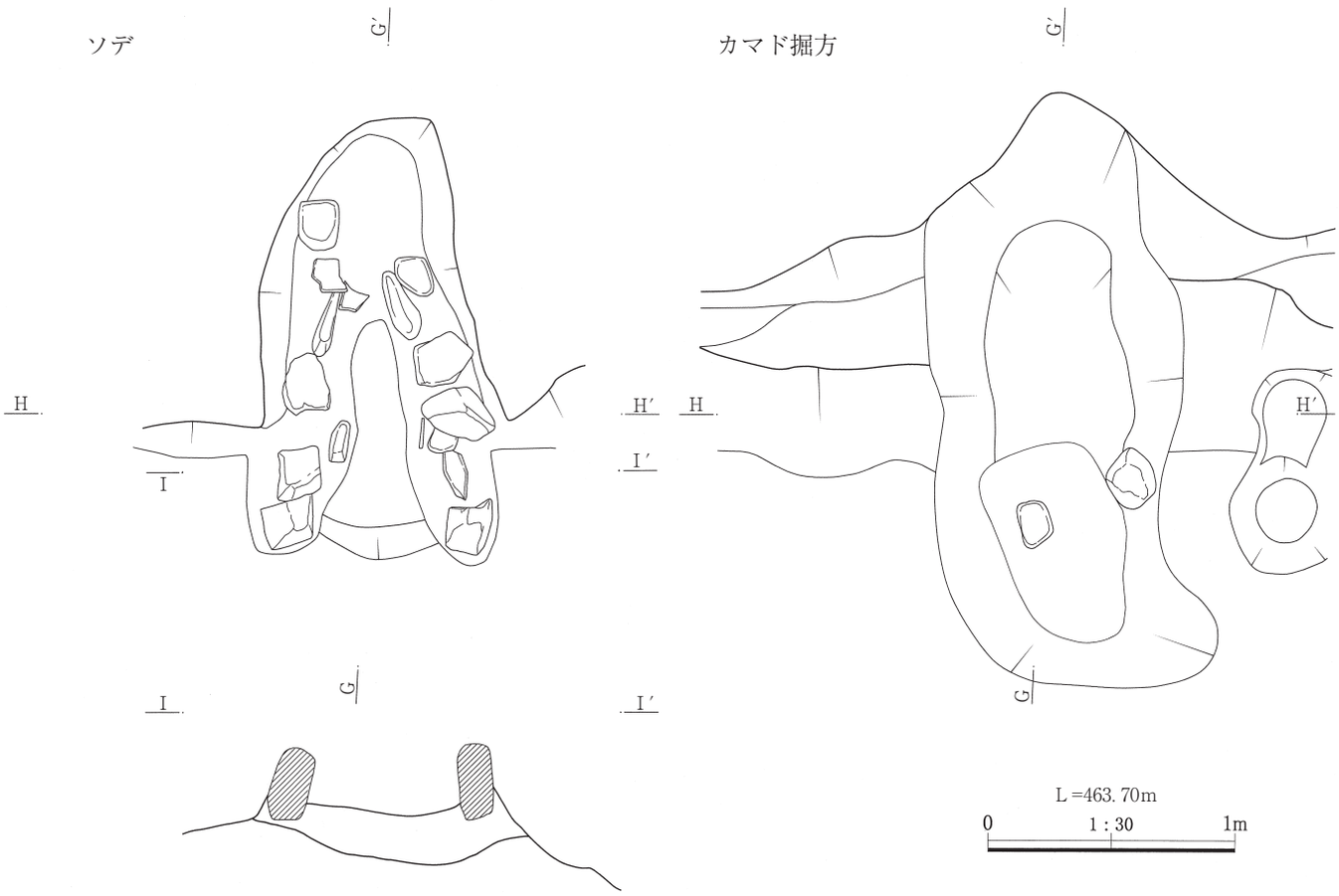
天井部



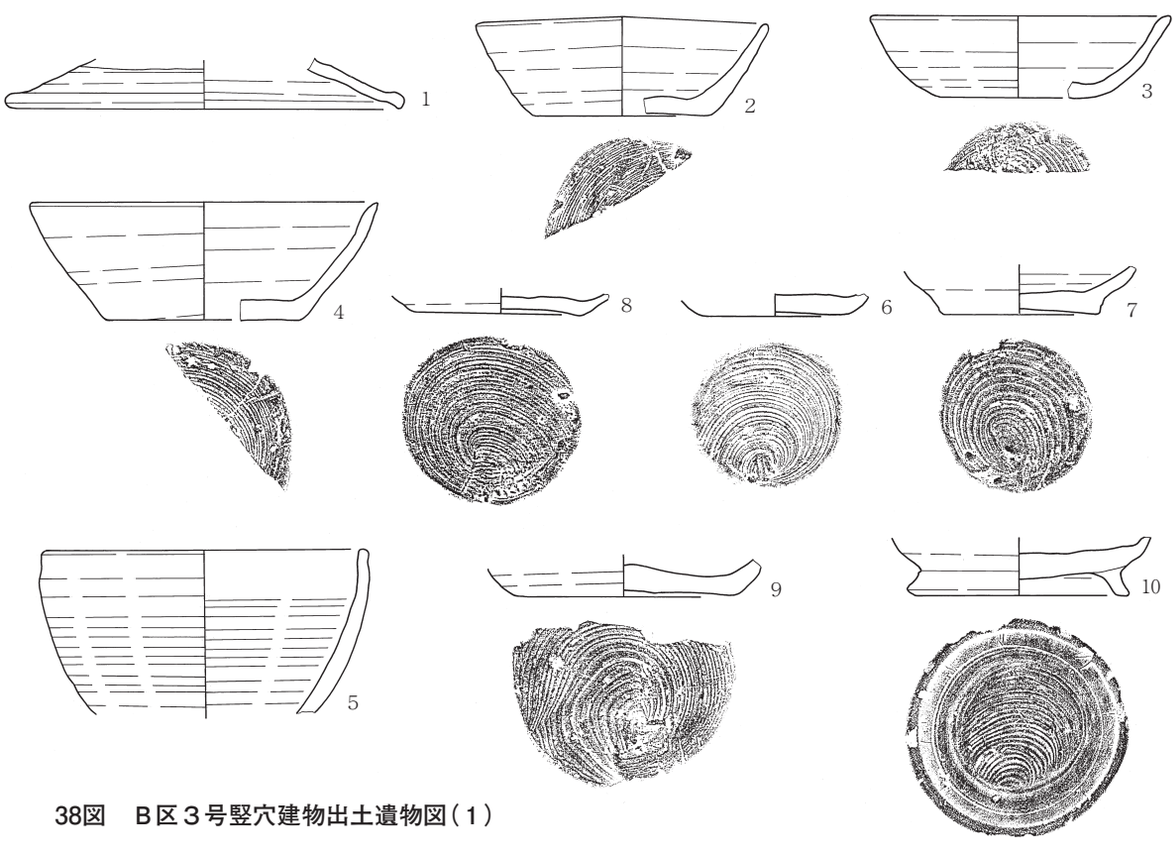


L＝464.30m
0　1：30　1m

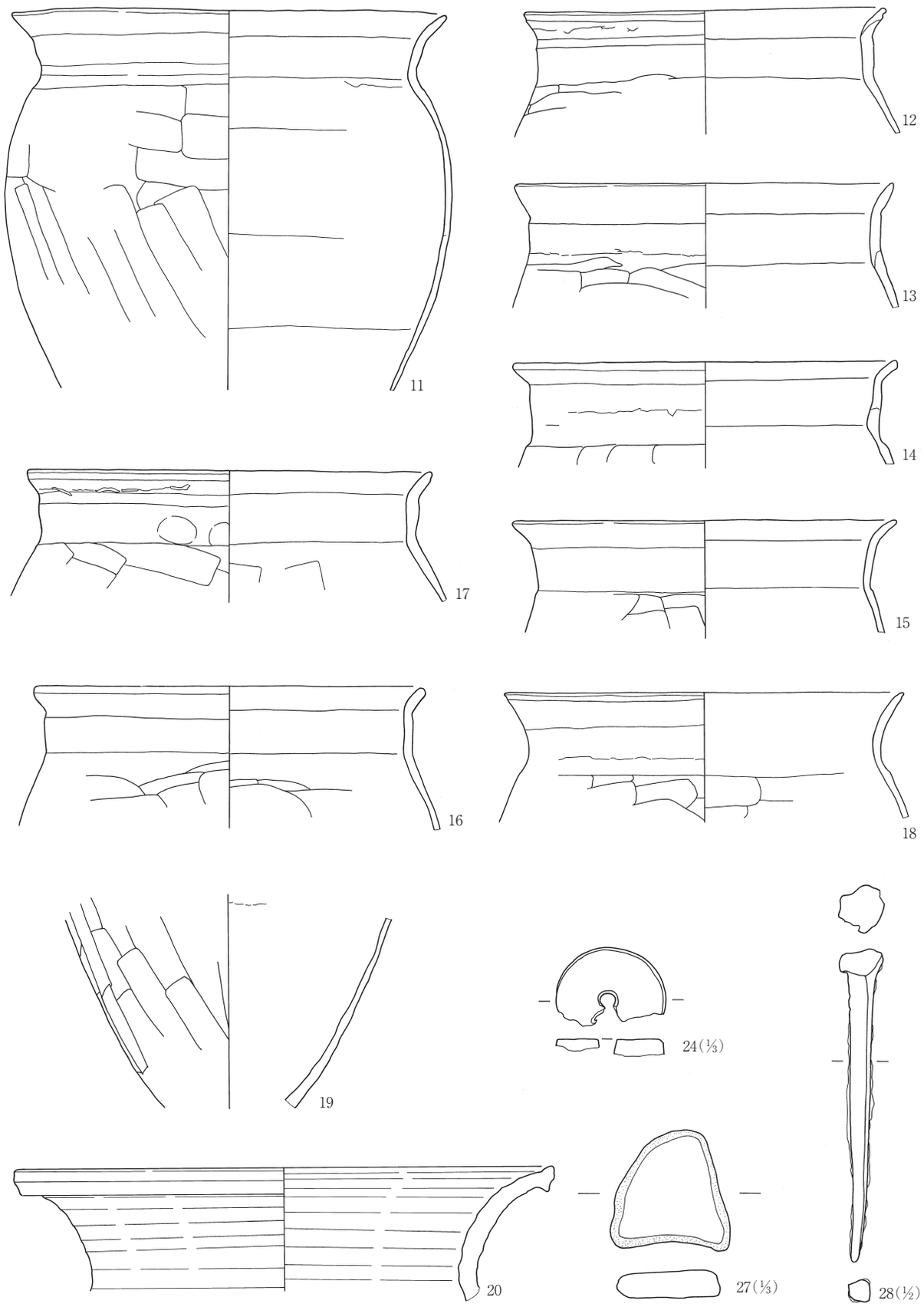
36図　Ｂ区３号竪穴建物カマド平面図・断面図(１)



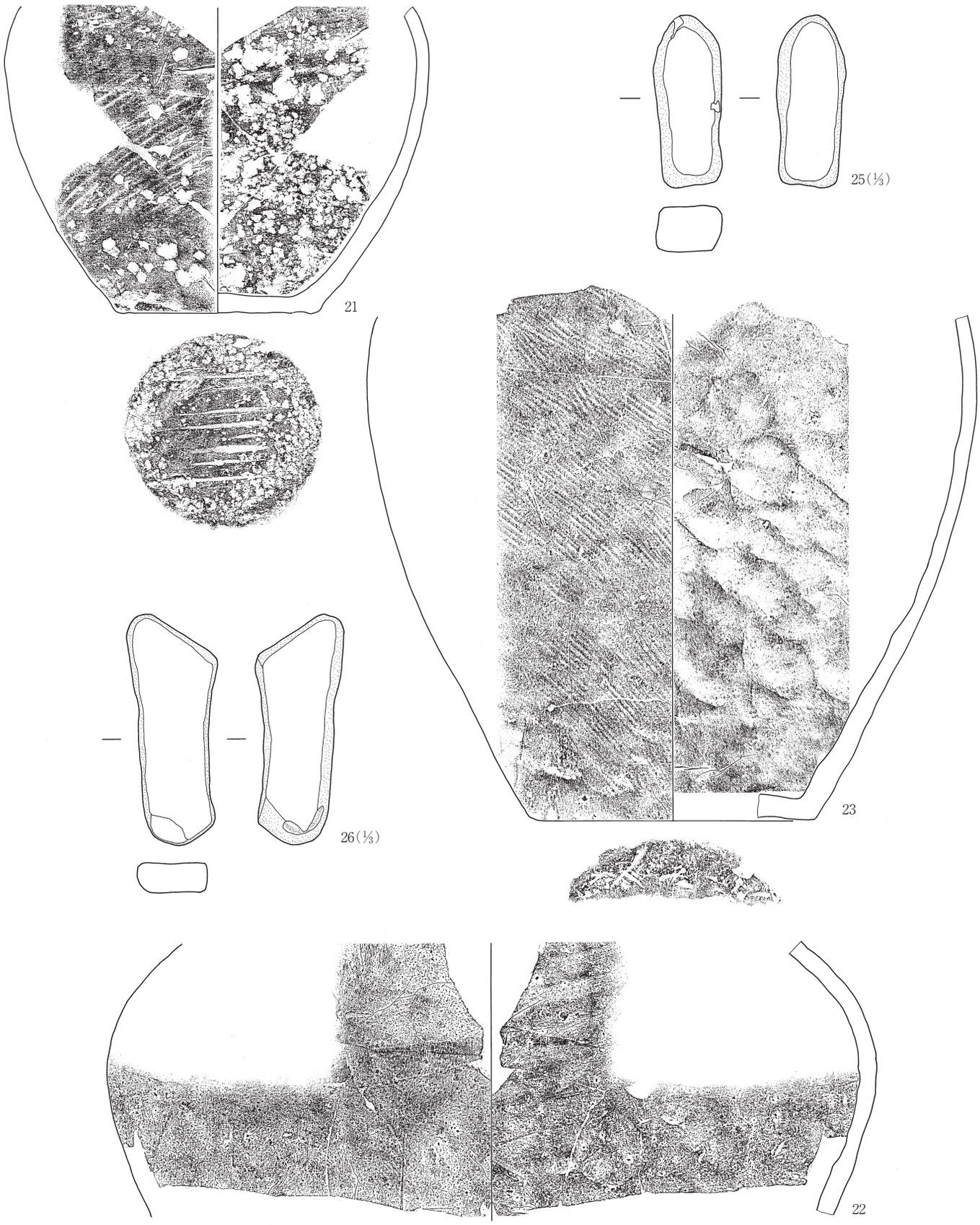
37図　B区３号竪穴建物カマド平面図・断面図（２）



38図　B区３号竪穴建物出土遺物図（１）



39図　Ｂ区３号竪穴建物出土遺物図（２）



40図　B区３号竪穴建物出土遺物図（３）

B区３号竪穴建物

NO. PL	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/ 色調	成形・整形の特徴	摘　要
1	須恵器 杯蓋	埋没土 口縁部片	口 15.6	粗砂粒/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。天井部中程までは回転ヘラ削り。	
2	須恵器 杯	埋没土 1／5	口 11.4 底 7.0 高 3.9	細砂粒/還元焔/オリーブ黒	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
3	須恵器 杯	埋没土 1/5	口 11.8 底 6.4 高 3.3	粗砂粒/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
4 19	須恵器 杯	埋没土 1／4	口 13.6 底 7.6 高 4.7	粗砂粒/還元焔/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
5	須恵器 椀	埋没土 口縁部片	口 13.2	細砂粒/還元焔/灰	ロクロ整形、内外面とも細かくロクロ痕が残る。	
6	須恵器 杯	カマド 底部	底 5.8	細砂粒/酸化焔/にぶい橙	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
7	須恵器 杯	埋没土 底部	底 6.2	粗砂粒/酸化焔/にぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
8	須恵器 杯	埋没土 底部	底 6.6	細砂粒/酸化焔/にぶい橙	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
9	須恵器 杯	埋没土 底部片	底 8.8	粗砂粒/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
10	須恵器 椀	貯蔵穴内 底部	底 8.0	細砂粒/還元焔/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り、高台は貼付。	
11 19	土師器 甕	埋没土 口～胴中位片	口 22.4	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、頸部はナデ、胴部上位は横方向ヘラ削り、中位は斜め方向ヘラ削り。	
12 19	土師器 甕	埋没土 口縁部片	口 18.8	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、頸部ナデ、胴部上位は横方向のヘラ削り。	
13	土師器 甕	埋没土 口縁部片	口 19.6	細砂粒/良好/褐	頸部に輪積み痕が残る。口縁部横ナデ、頸部ナデ、胴部上位は横方向のヘラ削り。	
14	土師器 甕	埋没土 口縁部片	口 20.0	細砂粒/良好/にぶい褐	口縁部横ナデ、頸部ナデ、胴部上位は横方向のヘラ削り。	
15	土師器 甕	掘方 口縁部片	口 20.0	細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部横ナデ、頸部ナデ、胴部上位は横方向のヘラ削り。	
16 19	土師器 甕	埋没土 口～胴上位片	口 20.0	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、頸部ナデ、胴部上位は横方向のヘラ削り。	
17 19	土師器 甕	埋没土 口～胴上位片	口 20.8	細砂粒/良好/にぶい褐	口縁部横ナデ、頸部ナデ、胴部上位は横方向のヘラ削り。	
18	土師器 甕	埋没土 口縁部片	口 22.0	細砂粒/良好/にぶい褐	口縁部横ナデ、頸部ナデ、胴部上位は横方向のヘラ削り。内面胴部はナデ。	
19 19	土師器 甕	カマド 胴部下位片		細砂粒/良好/にぶい褐	内面に輪積み痕が残る。胴部下位は縦方向のヘラ削り。内面はヘラナデ。	
20 19	須恵器 甕	埋没土 口縁部片	口 28.0	粗砂粒/還元焔/灰	ロクロ整形。	
21 19	須恵器 甕	＋１５ 胴部下位～底部	底 11.0	粗砂粒/還元焔/灰	ロクロ整形。胴部下半には叩き痕が残る。	
22	須恵器 甕	埋没土 胴部上位片		粗砂粒/還元焔/灰	ロクロ整形、内外面ともナデであるが、内面にはアテ具痕がかすかに残る。	
23 19	須恵器 甕	カマド、+10 胴部上位～底部	底 15.6	粗砂粒/還元焔/灰	ロクロ整形。胴部外面には叩き痕、内面にはアテ具痕が残る。	
NO.	種　類	器　種	出土位置	残存率	計　測　値	摘　要
24	石製品	紡錘車	掘方	1/2裏面剥落	径 5.6 孔 1.0	PL19
25	石器	砥石	埋没土	完形	長 9.6 幅 3.7 厚 2.5 重 163.6	PL20
26	石器	砥石	埋没土	完形	長 12.8 幅 4.8 厚 1.6 重 170.0	PL20
27	石器	砥石	埋没土	完形	長 6.3 幅 5.2 厚 1.5 重 89.3	PL20
28	鉄器	釘	カマド前床直	完形	長 10.9 幅 0.9 厚 0.8	PL20

B区４号竪穴建物

本遺構はB区中央やや西より、X＝75,556～75,560－Y＝－66,736～－66,739に位置する。他遺構との重複関係は東辺際でB区１号竪穴建物と重複する。新旧関係は本遺構のほうが新しい。残存状態は西側が確認面から床面まで浅いが比較的良好である。平面形態は北側辺が中程で山折り状に角度をもつため変則的な五角形を呈する。規模は南北4.17m、東西3.

24m、東辺3.00m、南辺2.47m、西辺3.15m、北辺の西側1.95m、東側1.53m、床面積は8.87㎡を測る。壁高は西側が確認面から10～57cmである。主軸方位はN－245°－Eを指す。

内部施設は柱穴、貯蔵穴は検出されなかったが、周溝は西辺から北辺で断続的ではあるが検出された。周溝は幅15cm前後、深度５～10cmである。

床面は東から西へ向けてわずかに傾斜しており、ローム土に黒色土を混ぜたものを踏みしめて貼床としていた。

カマドは東辺の中央やや北側に構築されている。残存状態は燃焼部天井部が竪穴建物廃棄時に壊されているが、その部分以外は良好な状態であった。規模は全長1.20m、幅0.98m、燃焼部全長0.70m、幅0.35mである。袖は両袖とも径10cm前後で長さ20～30cmの棒状円礫を立てた状態に設置し、その周りを粘土で覆っていた。天井部の煙道よりでは長さ50cm前後、幅10～20cm、厚さ20cm前後の亜角礫を使用して補強していた。燃焼部でも支脚に径７cm、長さ25cmと径10cm、長さ20cmの棒状円礫を５cmの間隔で立てて使用していた。

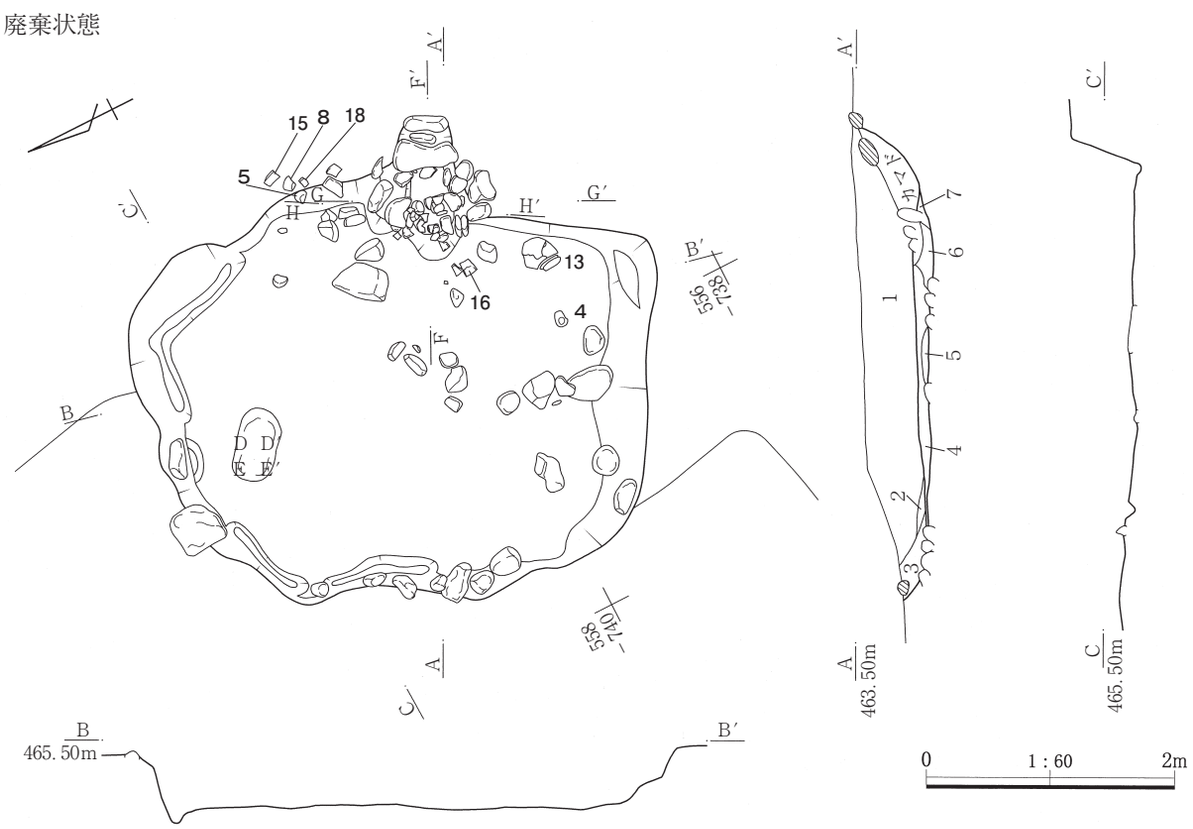
掘方は西側は下層に堆積している礫層上面まで掘り込まれており、東側もこれに対応した深さまでの掘り込みであった。掘方面はほぼ平坦な状態であるが、北東角に円形で径50cm、深度20cm、北西部に楕円形で径60×30cm、深度10cmの落ち込みが確認された。これらの落ち込みは遺物などの出土もないため床下土坑などの施設ではないとみられる。

埋没状態は大部分がHr-FPを多量に含む黒褐色土で短時間に埋没した様子が観察された。

遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、石器などが出土している。その出土はカマド、床面東南角付近、カマド北側の壁上部分にまとまった出土がみられた。カマド北側壁上からは椀などの食膳具がまとまって出土し、東南角からは完形に近い残存状態で13の須恵器羽釜が横転して押し潰された状態で出土している。

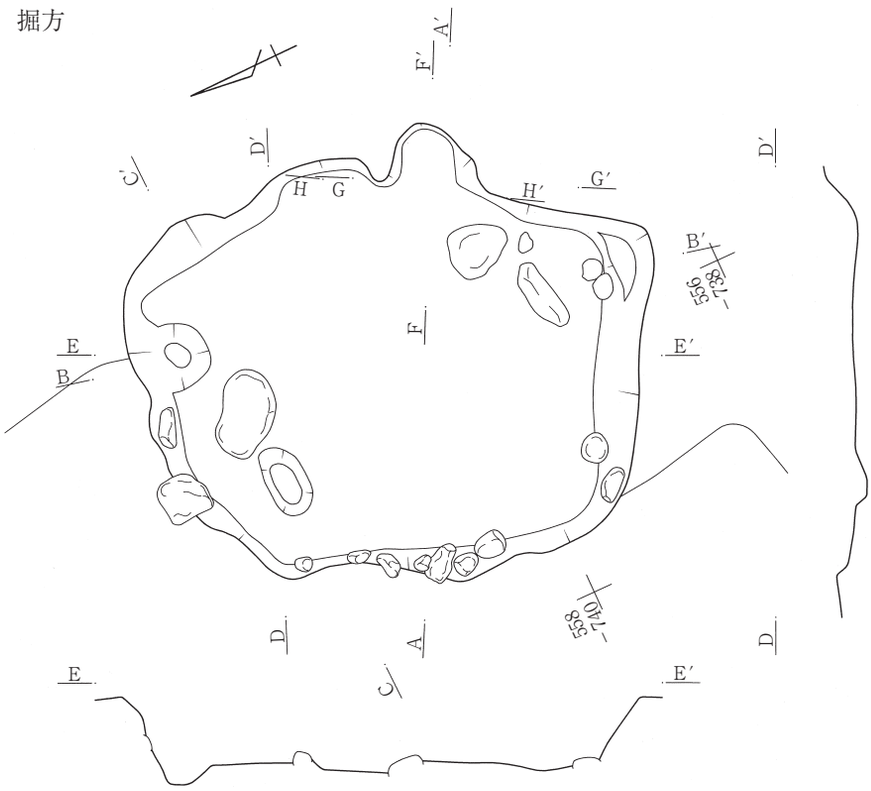
本遺構の存続年代は出土遺物から10世紀第２四半期に比定される。

廃棄状態



41図　B区４号竪穴建物平面図・断面図

掘方

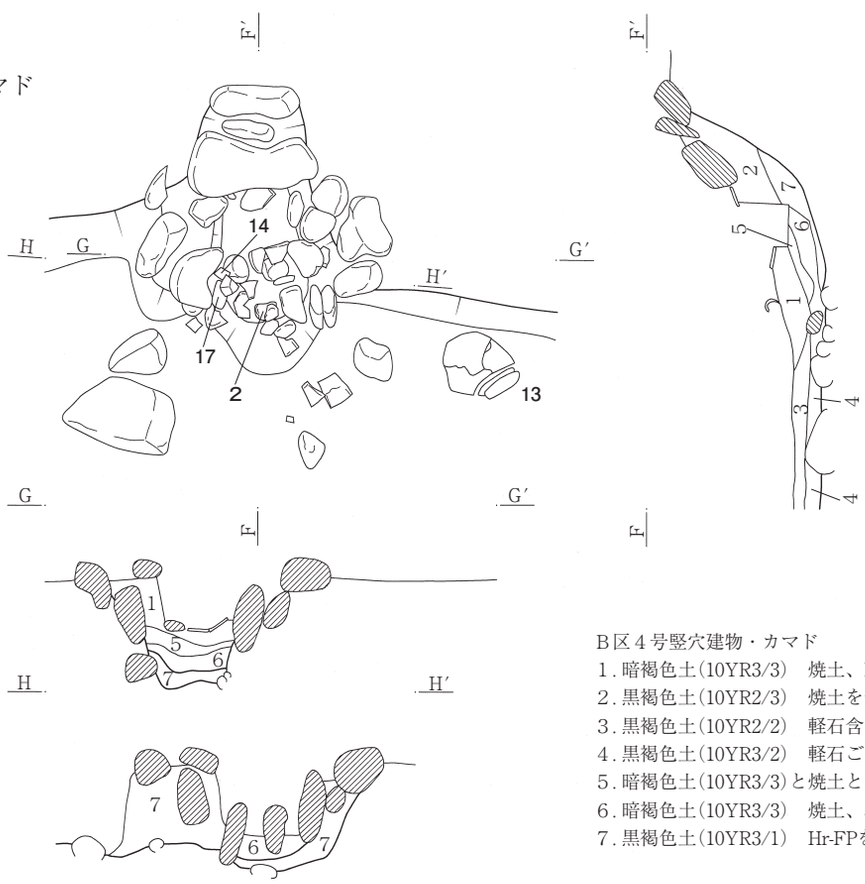


B区4号竪穴建物
1. 黒褐色土　多量のHr-FPと少量のローム粒を含む。
2. 黒褐色土　Ⅴ層の流れ込み、Hr-FP 1％
3. 黒褐色土　Ⅴ層の流れ込み。
4. 黄褐色土　粘質土、ローム土主体、貼床土。
5. ロームブロック主体、黒色土を含む。
6. 5に類似、焼土粒を含む。
7. 6に類似、6より焼土粒が多い。

L＝463.00m
0　1：60　2m

42図　B区４号竪穴建物掘方平面図・断面図

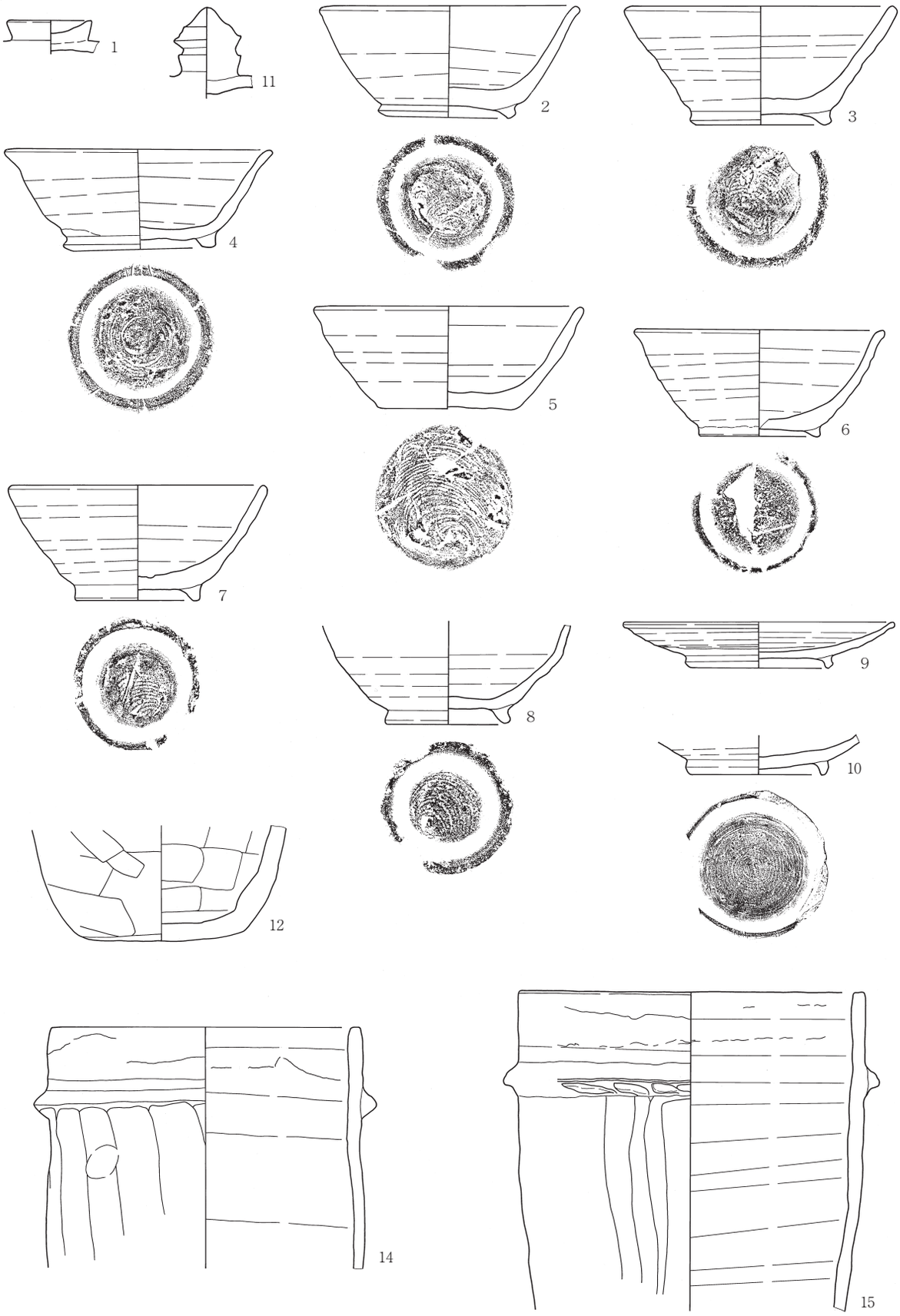
カマド



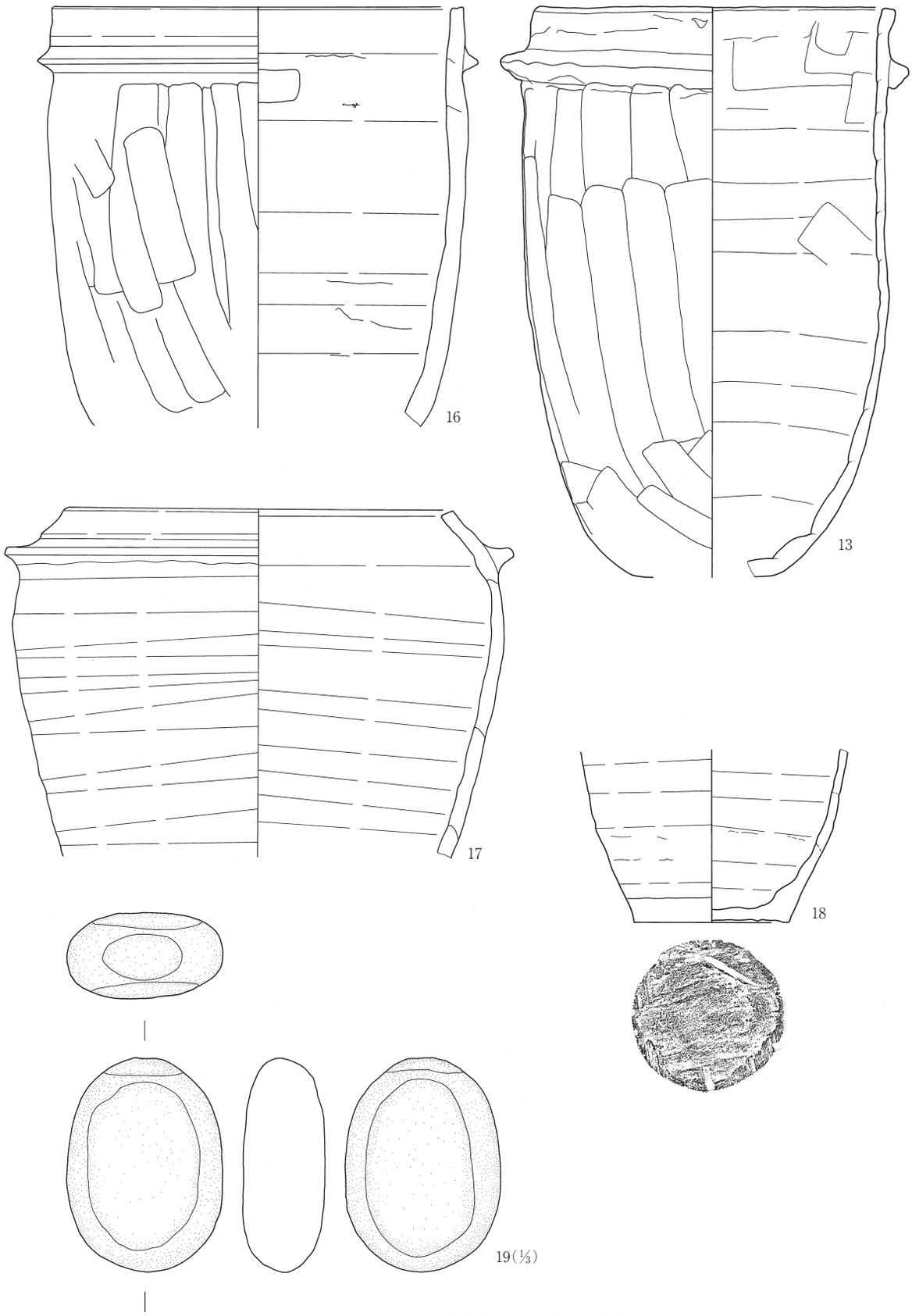
L＝463.60m
0　1：30　1m

B区４号竪穴建物・カマド
1. 暗褐色土(10YR3/3)　焼土、Hr-FP５％、粘質土。
2. 黒褐色土(10YR2/3)　焼土を含む、Hr-FPを若干含む。
3. 黒褐色土(10YR2/2)　軽石含む、締まり強い。
4. 黒褐色土(10YR3/2)　軽石ごくまばら、締まりやや強い。
5. 暗褐色土(10YR3/3)と焼土との混合土。
6. 暗褐色土(10YR3/3)　焼土、小礫を含む。
7. 黒褐色土(10YR3/1)　Hr-FPを少量、ローム粒含む、締まりあり。

43図　B区４号竪穴建物カマド平面図・断面図



44図　B区４号竪穴建物出土遺物図（１）



45図　Ｂ区４号竪穴建物出土遺物図（２）

B区４号竪穴建物

NO. PL	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/ 色調	成形・整形の特徴	摘　要
1	須恵器 杯蓋	埋没土 摘み	摘　4.3	細砂粒/還元焔/ 灰	ロクロ整形。摘みは貼付。	
2 20	須恵器 椀	東壁上(棚) ３／４	口 13.2　底　7.0 高　6.4	粗砂粒/酸化焔/ 暗灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切りか、高台は貼付。	
3 20	須恵器 椀	埋没土 口縁部一部欠	口 13.5　底　7.2 高　6.5	粗砂粒/還元焔/ 黄灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り、高台は貼付。	
4 20	須恵器 椀	＋１３ 口縁部一部欠	口 13.6　底　7.6 高　7.4	粗砂粒/還元焔/ 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部切り離し技法はナデのため不明、高台は貼付。	
5 20	須恵器 椀	東壁上(棚) １／２	口 13.8　底　7.2 高　5.3	粗砂粒/酸化焔/ にぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
6 20	須恵器 椀	埋没土 ２／３	口 12.6　底　6.2 高　5.5	粗砂粒/還元焔/ にぶい黄褐	ロクロ整形、回転右回り。底部切り離し技法はナデのため不明。高台は貼付。	
7 20	須恵器 椀	カマド ２／３	口 13.0　底　6.4 高　6.0	粗砂粒/還元焔/ 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り、高台は貼付。	
8 20	須恵器 椀	東壁上(棚) 底～口縁部片	底　3.2	粗砂粒/酸化焔/ にぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り、高台は貼付。	
9 20	灰釉陶器 皿	埋没土下部 １／２	口 13.8　底　7.5 高　2.4	夾雑物なし/還元焔 /灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部はナデ、高台は貼付。施釉方法は漬け掛けか。	大原2号窯式期
10 20	灰釉陶器 皿	掘方 底部	底　6.7	白色粒/還元焔/ 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部はヘラ削り後ナデ、高台は貼付。施釉方法不明。	大原2号窯式期
11 20	須恵器 短頸壺蓋	床直 摘み		粗砂粒/酸化焔/ にぶい褐	ロクロ整形、摘みは貼付。	
12 20	土師器 甕	カマド 底～胴下位片	底　8.4	粗砂粒/良好/ 灰黄褐	胴部下位は横方向のヘラ削り、底部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
13 21	須恵器 羽釜	床直 一部欠損	口 17.6　鍔 20.8 底　7.2　高 29.0	粗砂粒/還元焔ぎみ /にぶい黄橙	内面に輪積み痕が残る。ロクロ整形、鍔は貼付。胴部は底部へ向けての縦方向ヘラ削り。	
14 20	須恵器 羽釜	カマド 口～胴上位片	口 15.2　鍔 17.8	粗砂粒/酸化焔/ にぶい黄橙	輪積み痕が残る。ロクロ整形、鍔は貼付。胴部は鍔へ向けての縦方向ヘラ削り。	
15 21	須恵器 羽釜	東壁上(棚) 口～胴上位片	口 17.6　鍔 19.4	粗砂粒/酸化焔/ にぶい褐	ロクロ整形、口縁部に輪積み痕が残る。鍔は貼付。胴部は底部から鍔方向へのヘラ削り。	
16 21	須恵器 羽釜	カマド 口～胴上位片	口 20.8　鍔 22.4	細砂粒/酸化焔/ にぶい黄	ロクロ整形、内面に輪積み痕が残る。鍔は貼付。胴部は下位から鍔へのヘラ削り。	
17 21	須恵器 羽釜	カマド 口～胴中位片	口 20.0　鍔 24.0	細砂粒/酸化焔/ にぶい黄	ロクロ整形、内面に輪積み痕が残る。鍔は貼付。	
18 20	須恵器 甕	東壁上(棚) 胴下位～底	底　7.8	粗砂粒/酸化焔/ 明黄褐	ロクロ整形、輪積み痕が残る。底部ヘラナデ。	
NO.	種　類	器　種	出土位置	残存率	計　測　値	摘　要
19	石器	擦石	カマド	完形	長 10.9　幅　7.9　厚　4.2　重 508.7	PL21

B区5号竪穴建物

本遺構はB区北端、X＝75,574～75,576－Y＝－66,729～－66,731に位置する。遺構の北東側５分の４は調査区外に延びるため全貌は不明である。他遺構との重複関係は調査区内では確認されていない。残存状態は確認面から床面まで浅いが比較的良好である。平面形態は方形または長方形を呈すると想定される。規模は東西3.32m、南北は調査区内で1.45m、南辺3.30mを測る。壁高は確認面から10～15cmと比較的浅い。主軸方位は貯蔵穴の位置などから東カマドと想定されることからN－124°－Eを指す。

内部施設は柱欠は検出されなかったが、貯蔵穴と周溝が検出された。貯蔵穴は東南角の南壁際に位置し、平面形態は楕円形を呈し、規模は長径50cm、短径41cm、深度41cmを測る。周溝は西辺壁際から検出され、幅10cm前後、深度11～15cmである。

床面は西班が地山をそのまま踏み固めていたが、貯蔵穴北側のカマド周辺は20cm前後黒色土にローム土を若干混ぜた土砂で貼床を行っていた。

カマドは調査区内では確認されていないが、貯蔵穴北側の東辺に構築されたと想定される。

掘方は貯蔵穴北側だけ床面より20cmほど彫り込まれていたが、床下土坑などは確認されなかった。

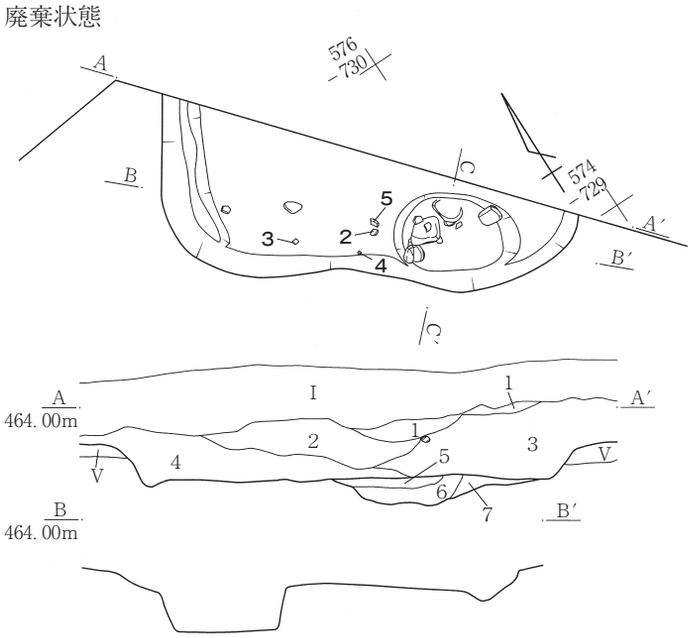
埋没状態は埋没土の状態から比較的短時間による自然埋没が観察できた。

遺物は須恵器椀、羽釜が貯蔵穴や床面から出土し

ているが、その出土量は少なく、図示できた以外はみな小片であった。

本遺構の存続年代は出土遺物から10世紀第２四半期に比定される。

廃棄状態



B区５号竪穴建物・貯蔵穴

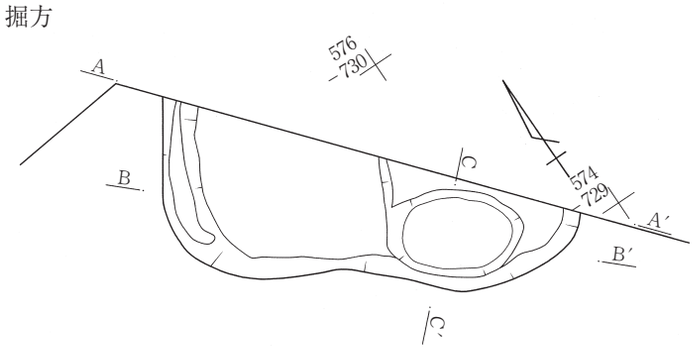
1．黒褐色土(10YR3/2)　Ⅴ層とは異なる、Hr-FPを１％とφ１cmの円礫を３％含む。さらさらして締まりない。

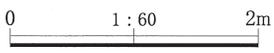
B区５号竪穴建物

1．黒褐色土(10YR2/3)　Ⅲ層に類似、φ１cmのHr-FPを１％とφ１～２cmの円礫を３％含む。
2．黒褐色土(10YR2/2)　Ⅲ層に類似、φ１cmのHr-FPを３％とφ１～２cmの円礫を５～７％含む。
3．黒褐色土(10YR2/2)　２に類似、２よりやや黒い色調。
4．黒褐色土(10YR3/2)　２,３に類似、２,３よりHr-FP、円礫が少ない。
5．黒色土(10YR2/1)と明黄褐色ローム(10YR6/8)との互層、貼り床、締まり固い。
6．黒褐色土(10YR3/2)　ローム粒、小礫(φ５mm)を含む、締まり弱い。
7．オリーブ褐色土(2.5Y4/3)　黒褐色土(10YR3/2)とロームが混じった土。φ５mmの小礫を含む。

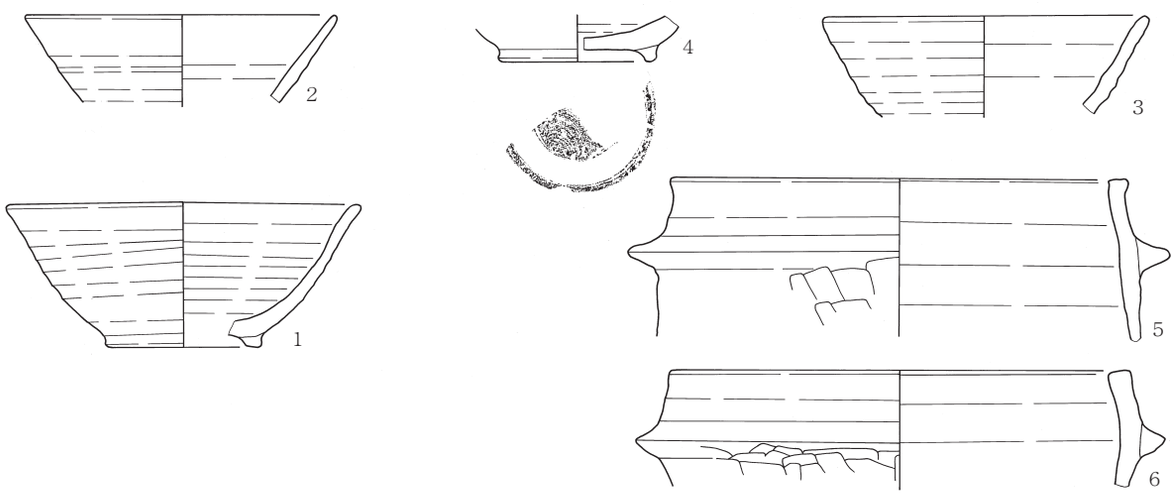
46図　Ｂ区５号竪穴建物平面図・断面図

掘方





47図　Ｂ区５号竪穴建物掘方平面図



48図　Ｂ区５号竪穴建物出土遺物図

Ｂ区５号竪穴建物

NO. PL	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/ 色調	成形・整形の特徴	摘　要
1 21	須恵器 椀	埋没土下部 1/4	口 13.8　底 6.2 高 5.8	細砂粒/還元焔燻 /灰黄褐	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付。	
2	須恵器 椀	＋９ 口縁部片	口 13.0	細砂粒/還元焔/ 黄灰	ロクロ整形、回転右回り。	
3	須恵器 椀	床直 口縁部片	口 13.0	粗砂粒/還元焔/ 灰	ロクロ整形、回転右回り。	
4	須恵器 椀	＋８ 底部片	底　6.0	粗砂粒/酸化焔/ 黄褐	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り、高台貼付。	
5	須恵器 羽釜	＋10 口縁部片	口 18.0　鍔 21.0	粗砂粒/酸化焔/ にぶい黄褐	ロクロ整形。鍔は貼付、胴部は縦方向のへら削り。	
6	須恵器 羽釜	埋没土下部 口縁部片	口 18.0　鍔 21.6	粗砂粒/酸化焔/ にぶい褐	ロクロ整形。鍔は貼付、胴部は縦方向のへら削り。	

（２）土坑

Ｂ区１号土坑

本遺構はＢ区の南端、Ｘ=75,549～75,551－Ｙ＝－66,733～－66,735に位置する。他遺構との重複関係は近年の耕作痕と重複するが、古代や中近世の遺構との重複関係は確認されなかった。残存状態は東側部分で耕作によって一部欠くが比較的良好である。平面形態は隅丸長方形に近い形態である。規模は長軸2.84m、短軸2.34m、深度0.18mを測る。

内部底面には東側の一部で近年の耕作によって礫が取り除かれていたが、全面に径25～35㎝、厚さ10～15㎝の扁平な円礫を主に敷きつめていた。

埋没状態は遺構確認面から底面までが僅かなため明らかにすることはできなかった。

遺物は東隅もから１の須恵器小型広口壺が出土している。

本遺構の時期は出土遺物から10世紀前半代に比定されるが、その性格については明らかにできるような遺物は出土していない。

Ｂ区2号土坑

本遺構はＢ区南端、Ｘ=75,547～75,549－Ｙ＝66,737～66,739に位置する。他遺構との重複関係は確認されず、単独で占地している。平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸1.92m、短軸1.53m、深度0.17mを測る。

内部には東よりにピット状の落ち込みをもつ。この落ち込みは楕円形を呈し、規模が長軸0.78m、短軸0.65m、確認面からの深度0.89mを測る。

埋没状態は土層断面の観察ではほぼ水平な堆積が観察されたが自然埋没か人為的な埋没なのかは判断できなかった。

遺物は土師器甕の小片が20点ほど出土したが、本遺構に伴うものかは明らかではない。

本遺構の時期は埋没土から平安時代に比定した。

Ｂ区3号土坑

本遺構はＢ区南半部、Ｘ=75,551～75,553－Ｙ＝－66,734～－66,738に位置する。他遺構との重複関係はＢ区４号土坑と重複する。新旧関係は本遺構のほうが新しい。平面形態は矩形を呈する。規模は長軸3.41m、短軸2.13m、深度0.20mを測る。

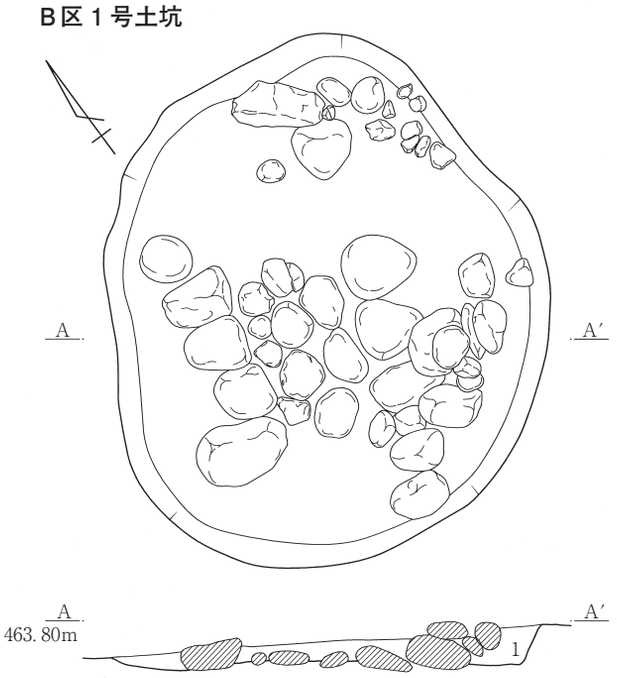
内部には中程に一回り小規模な土坑状の落ち込みをもつ。この落ち込みは楕円形を呈し、断面は西側にテラスをもつ２段の掘り込みである。規模が長軸1.84m、短軸1.00m、確認面からの深度0.75mを測る。

埋没状態は土層断面の観察ではⅣ層Hr-FPを多く含む黒褐色土の単一土だけが観察されることから自然埋没と観あげられる。

遺物は土師器甕や須恵器甕などの小片が300点ほど出土したが、本遺構に伴うものかは明らかではない。

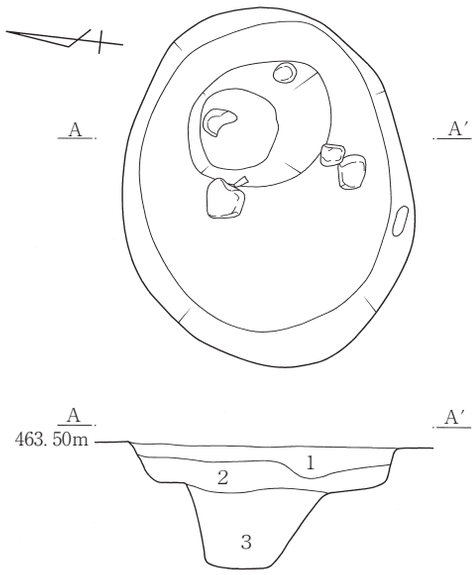
本遺構の時期は出土遺物からは比定できなかったが、埋没土から平安時代に比定される。

B区１号土坑



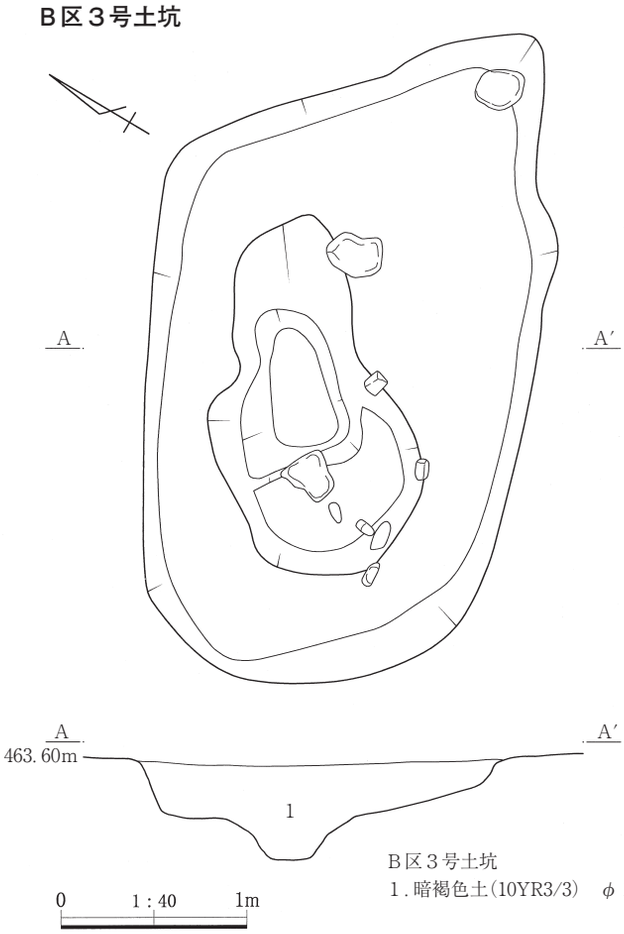
B区１号土坑
1．黒褐色土(10YR3/2)　Ⅲ層に類似、φ１～２㎝のHr-FPを５％とφ２～５㎝の円礫、亜角礫を10％含む。

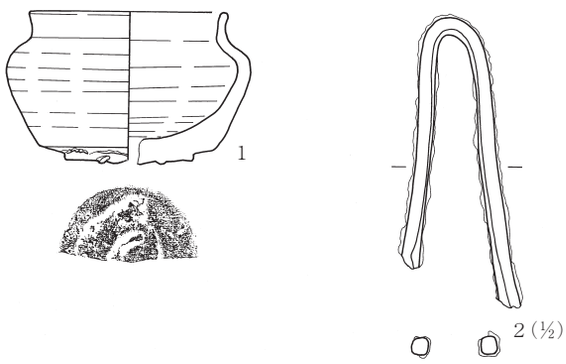
B区２号土坑



B区２号土坑
1．暗褐色土(10YR3/3)　Ⅲ層に類似、φ１～２㎝のHr-FPを３％とφ１～３㎝の円礫、亜角礫を３％含む。
2．Hr-FP主体、黒褐色土(Ⅲ層）が混入。
3．黒褐色土(10YR2/2)　Ⅴ層に類似、φ１㎝のHr-FP、φ１～２㎝の円礫を２％含む。

B区３号土坑





B区３号土坑
1．暗褐色土(10YR3/3)　φ１～２㎝のHr-FPを５～10％含む。

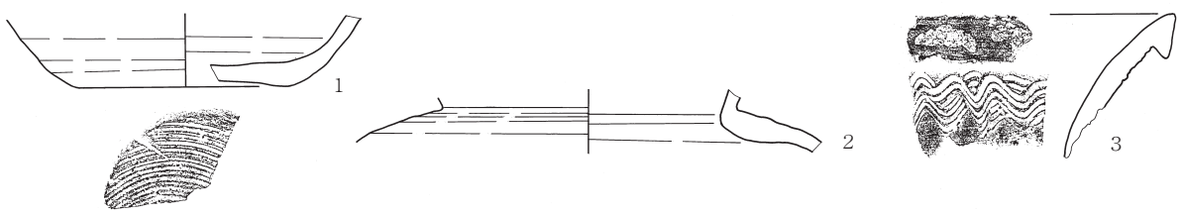
49図　B区1号・2号・3号土坑平面図・断面図・出土遺物図

土坑

NO. PL	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/ 色調	成形・整形の特徴	摘　要
1 21	須恵器 小型壺	B区1号土坑 1／2	口 7.4 底 7.0 高 6.1	細砂粒/還元焔/ 灰黄褐	ロクロ整形、回転右回り。底部ヘラ起こし。内外面に自然釉が付着。	
NO.	種　類	器　種	出土位置	残存率	計　測　値	
2	鉄器	棒状	2号土坑	一部片か	長 (7.8) 幅 0.6 厚 0.6	直線か、PL21

(3)遺構外出土遺物

遺構外としてあつかった遺物のうち図示できたものは3点である。1の須恵器杯はB区1号古墳から出土したものであるが、古墳の年代と遺物の年代が大きく離れるため遺構外として扱った。他の2点は遺構に伴わなかったものである。



50図　平安時代遺構外出土遺物図

平安時代遺構外出土遺物

NO. PL	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/ 色調	成形・整形の特徴	摘　要
1	須恵器 杯	B区1号古墳 底部片	底 8.0	細砂粒/還元焔/ 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
2	須恵器 広口壺	550-740 頸部片	頸 11.8	細砂粒/還元焔/ 灰	ロクロ整形、回転右回りか。	
3	須恵器 甕	B区 口縁部片		粗砂粒/酸化焔/ にぶい黄橙	ロクロ整形、口縁部には波状文。	

5．中世・近世

(1)壇

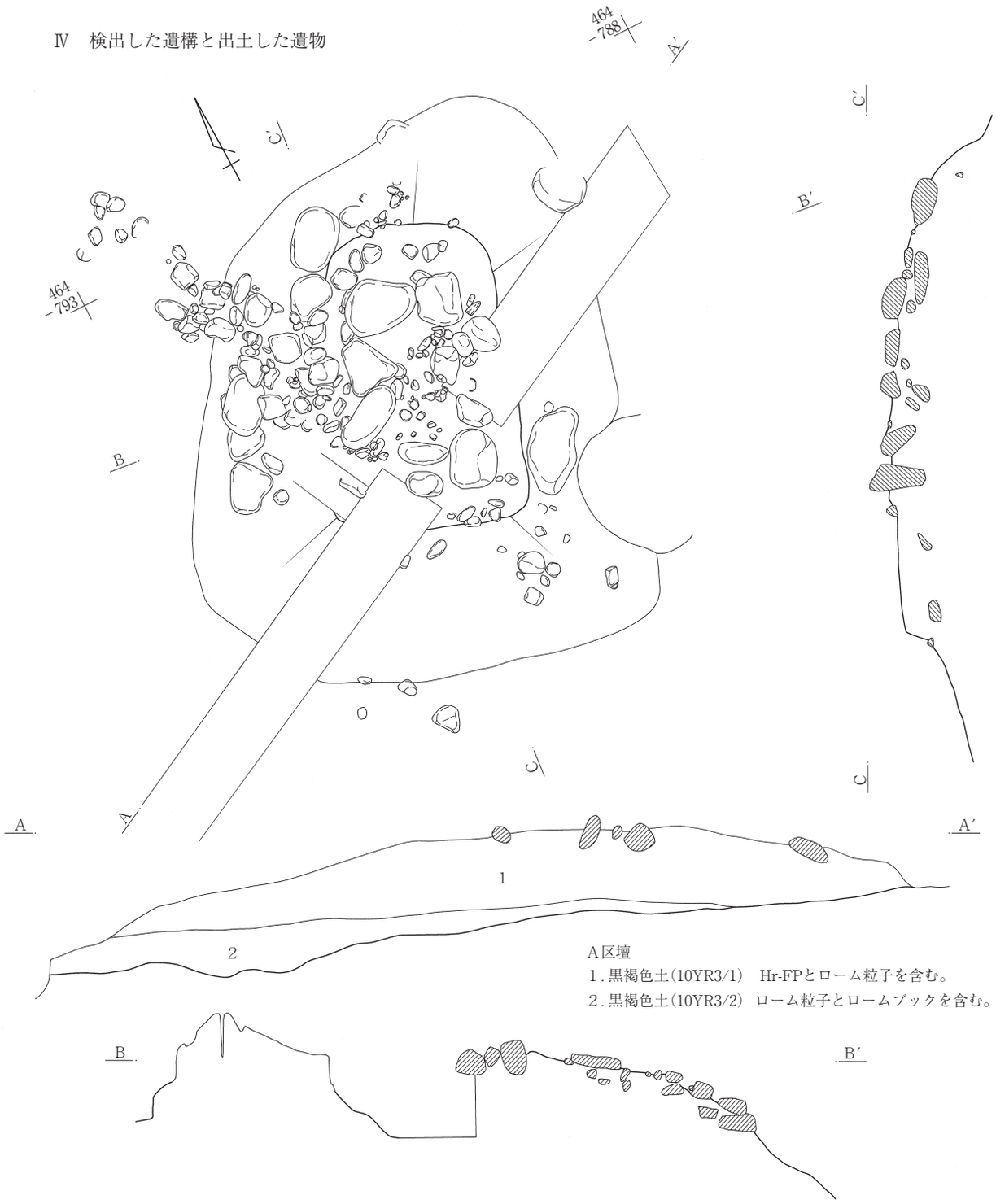
本遺構はA区のほぼ中央、X＝75,459～75,463－Y＝－66,788～－66,793に位置する。本遺構は道路計画以前は頂部に「お宮」が設けられていたが、北への傾斜地に小丘を呈し、頂部に比較的大きな礫が配置されていることから古墳ではないかと想定された。そのため、遺構の性格を把握するため頂部を中心に試掘坑を設定して調査を行った。試掘坑の観察では盛土は確認されたが、礫は頂部だけであることから「お宮」の台座として構築されたものと判明した。

他遺構との重複関係はA区16号土坑と重複する。新旧関係は本遺構のほうが新しい。平面形態は周囲の樹木根によって本来の形態がわからない状態であったが頂部に配置された礫と同様に長方形であったと想定される。規模は4.60m、短軸3.50m、頂部までの高さ、南0.66m、東0.70m、北0.80m、西1.20mを測る。主軸方位はN－18°－Eを指す。

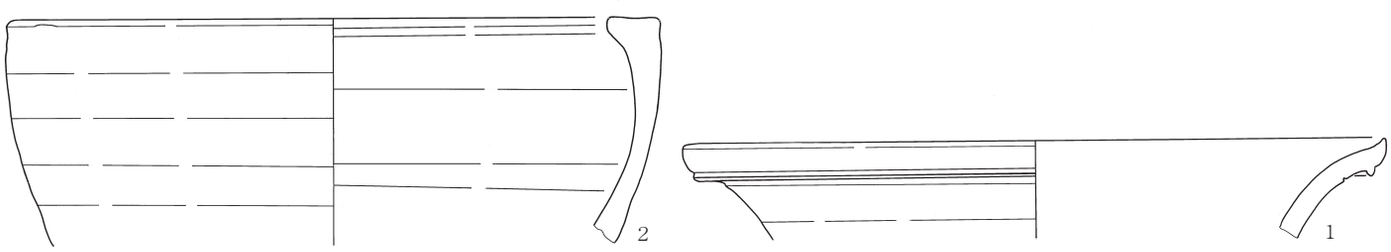
頂部は南北2.60m、東西1.50mの長方形に長さ40～60cm、幅20～40cm、厚さ10～30cmの亜角礫を配置してあった。

盛土はローム土に粗い砂を混ぜて固めているが、土層断面では版築などの工法は確認されなかった。

遺物は頂部より陶器甕片、鉢片が出土している。



51図　A区壇平面図・断面図



52図　A区壇出土遺物図

A区壇

NO. PL	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/ 色調	成形・整形の特徴	摘　要
1	陶器 甕	座石面 口縁部片	口 28.0	細砂粒/還元焔/ 灰色	ロクロ整形、内外面に自然釉が付着。	
2	軟質陶器 鉢	座石面 口縁部片	口 26.0	細砂粒/還元焔/ 灰色	ロクロ整形、口唇端部は使用痕で平滑になっている。	

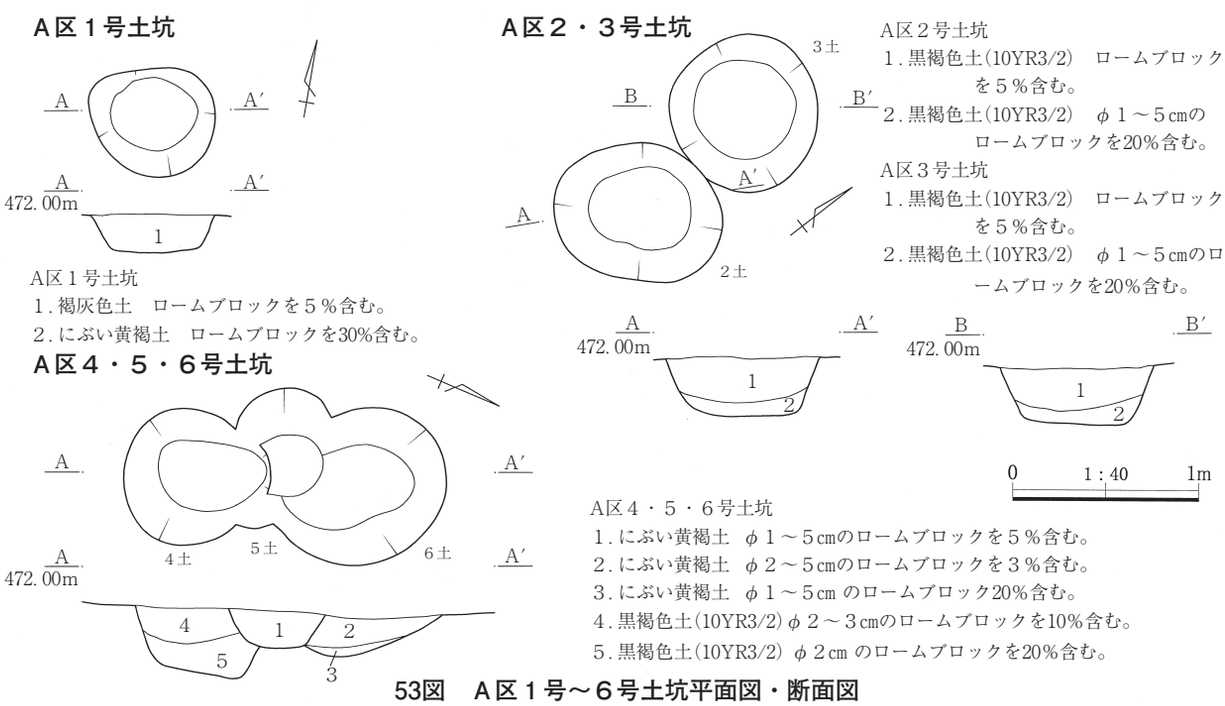
(2)土坑

中近世の土坑はA区から15基検出した。これらの土坑からの出土遺物はみられないが、埋没土の状態から中近世と判断した。

2表　中世・近世土坑一覧

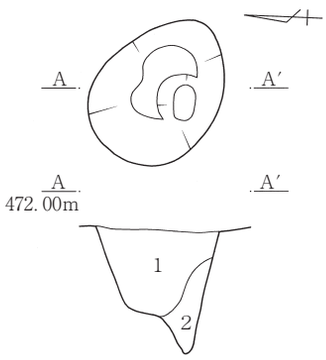
土坑 NO.	位　置	平面形態	断面形態	重　複 新	重　複 旧	長　径	短　径	深　度
A 1	454-792	楕円形	逆台形			68	58	20
A 2	454-791	楕円形	逆台形			91	74	30
A 3	455-791	楕円形	逆台形			85	80	27
A 4	456-791	楕円形	逆台形	A区5号土坑		79	80	37
A 5	457-791	楕円形	逆台形		A区4号・6号土坑	−	−	34
A 6	457-791	楕円形	半円形	A区5号土坑		97	82	31
A 7	458-790	楕円形	逆台形			85	65	72
A 8	458-790	楕円形	逆台形			90	71	40
A10	465-793	楕円形	鍵形			96	71	56
A11	466-794	楕円形	逆台形			69	58	16
A12	467-793	矩形	逆台形			81	78	25
A13	468-792	矩形	逆台形			197	103	29
A14	458-789	楕円形	逆台形	A区15号土坑(新旧不明)		79	75	28
A15	458-789	楕円形	逆台形	A区14号土坑(新旧不明)		66	64	32
A16	463-791	不整形	逆台形	A区壇		89	70	102

Xは値の前に75、Yは−66を省略してある　　計測値の単位cm



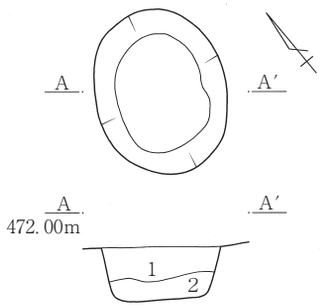
53図　A区１号～６号土坑平面図・断面図

A区７号土坑



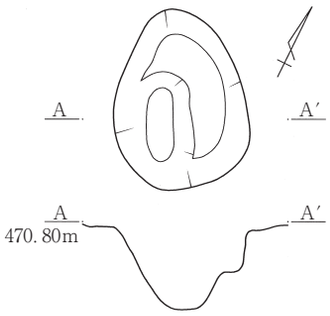
A区７号土坑
1．にぶい黄褐土(10YR4/3)　φ１㎝のロームブロックを１％含む。
2．明黄褐土(2.5Y6/6)　ローム主体、黒褐色土を10％含む。

A区８号土坑

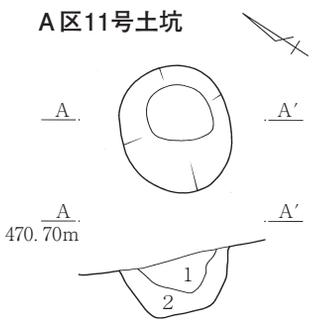


A区８号土坑
1．黒褐色土(10YR3/2)　ローム粒を含む、ロームブロックはわずかにあり。
2．黒褐色土(10YR3/2)　ローム粒とロームブロックが多い。

A区10号土坑

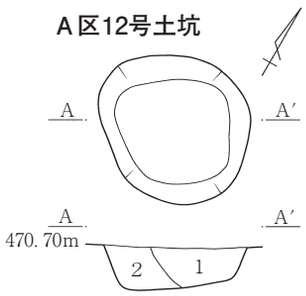


A区11号土坑



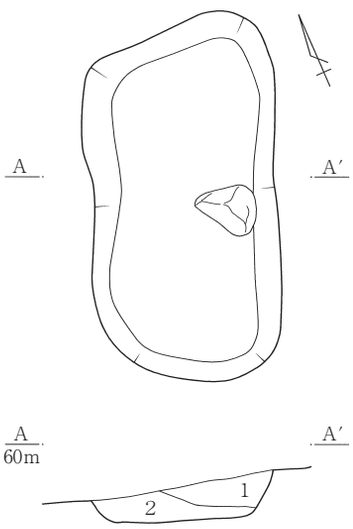
A区11号土坑
1．黒褐色土(10YR3/2)　Hr-FPを含むローム粒が多い。
2．黒褐色土(10YR3/1)　Hr-FP とローム粒を含む。

A区12号土坑



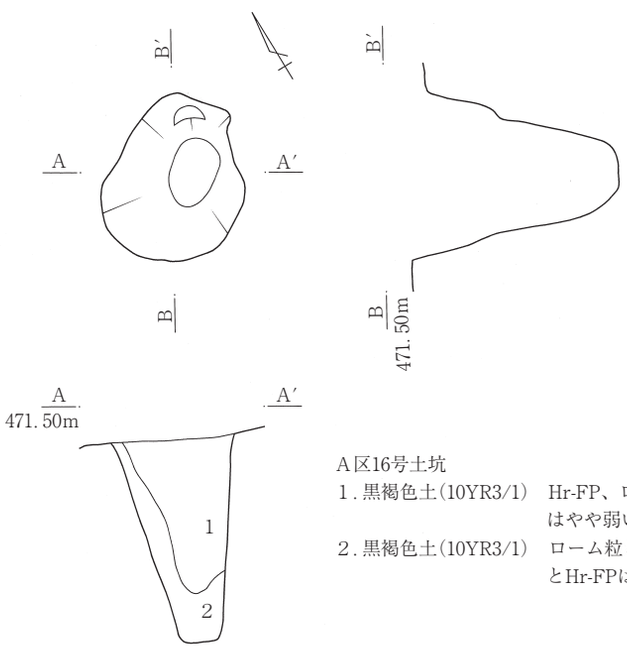
A区12号土坑
1．黒褐色土(10YR3/2)　Hr-FPを含むローム粒が多い。
2．黒褐色土(10YR3/1)　Hr-FP とローム粒を含む。

A区13号土坑



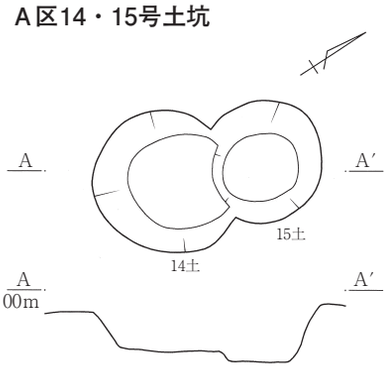
A区13号土坑
1．黒褐色土(10YR3/2)　Hr-FPを含むローム粒が多い。
2．黒褐色土(10YR3/1)　Hr-FP とローム粒を含む。

A区16号土坑



A区16号土坑
1．黒褐色土(10YR3/1)　Hr-FP、ローム粒を含む、締まりはやや弱い。
2．黒褐色土(10YR3/1)　ローム粒とロームブロックが多くとHr-FPは少量含む。締まりは弱い。

A区14・15号土坑

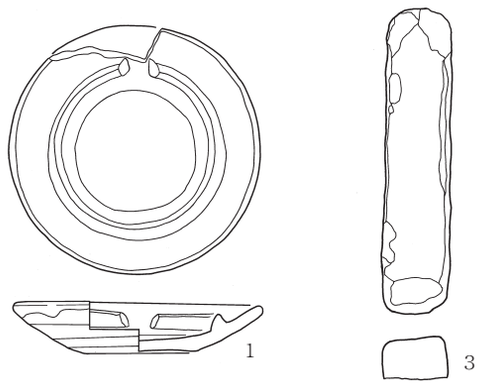


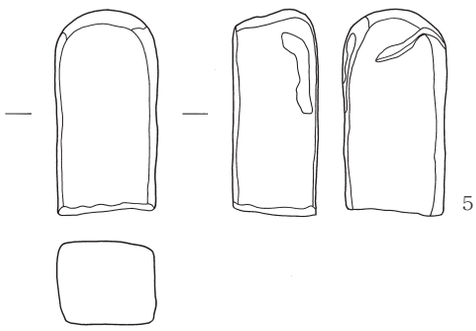
0　1：40　1m

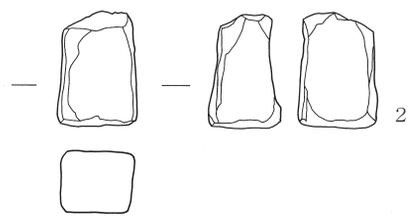
54図　A区７号・８号、10号～16号土坑平面図・断面図

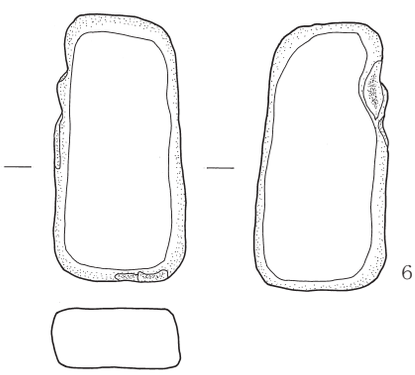
（3）遺構外出土遺物

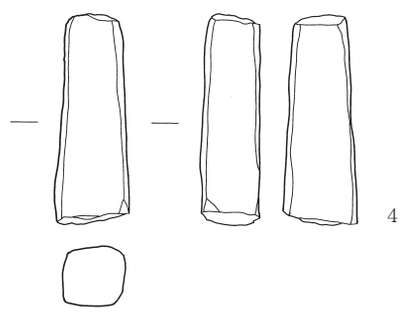
遺構外としてあつかった遺物のうち図示できたものは6点である。2～5の石製砥石はB区1号古墳から出土したものであるが、古墳の年代と遺物の年代が大きく離れるため遺構外として扱った。他の2点は遺構に伴わなかったものである。











55図　中世・近世遺構外出土遺物図

中世・近世遺構外出土遺物

NO. PL	種　類 器　種	出土位置 残存率	計　測　値	胎土/焼成/ 色調	成形・整形の特徴	摘　要
1 21	陶器 灯明皿	B区 ほぼ完形	口　9.8　底　4.4 高　2.1	夾雑物ほとんど無 /還元焔	ロクロ整形、回転左回りか。	瀬戸・美濃焼
NO.	種　類	器　種	出土位置	残存率	計　測　値	摘　要
2	石器	砥石	B区1号古墳	1/2	長　4.5　幅　3.4　厚　2.9　重　52.5	PL21
3	石器	砥石	B区1号古墳	完形	長 12.2　幅　2.7　厚　1.6　重 103.1	PL21
4	石器	砥石	B区1号古墳	下部欠損	長　8.4　幅　3.0　厚　2.2　重 109.4	PL21
5	石器	砥石	B区1号古墳	1/2	長　8.1　幅　4.1　厚　3.3　重 225.5	PL21
6	石器	砥石	B区	完形	長 10.7　幅　5.2　厚　2.3　重 262.2	PL21

Ⅴ　西川原古墳群出土の馬歯・馬骨

楢崎修一郎

はじめに

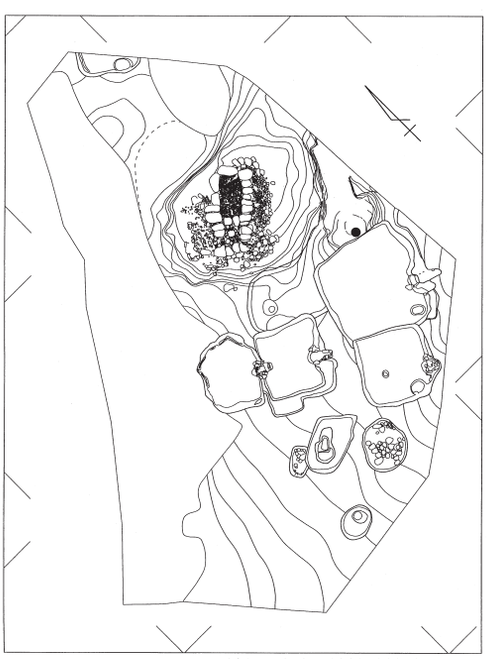
西川原古墳群は、群馬県利根郡川場村生品に所在する。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査が、平成19(2007)年９月～10月まで実施され、Ｂ区１号古墳周堀より、馬(ウマ)［*Equus caballus*］の歯及び骨が出土したので以下に報告する。獣骨は、同年10月５日に本報告者が取り上げた。

本古墳の年代は出土遺物より、約７世紀後半の古墳時代終末期に比定されており、周堀出土の本馬歯・馬骨も被葬者に伴う殉殺の可能性が高いと推定される。

なお、馬歯の計測方法は、フォン・デン・ドリーシュ［von den Driesch］(1976)の方法に従った。

１．馬歯・馬骨の出土状況

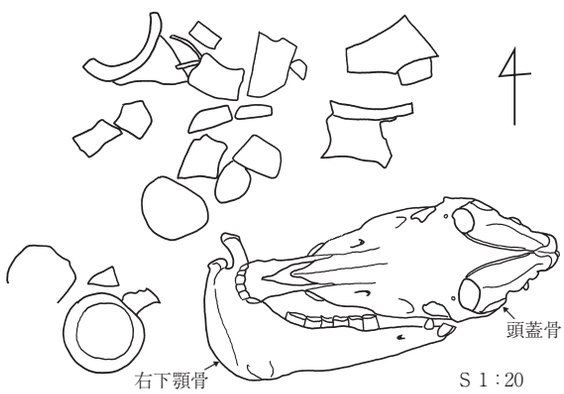
本馬歯・馬骨は、Ｂ区１号古墳周堀の南部の底面から出土している。馬歯の出土状況からは、上顎は顔面部が西側に向いており、下顎は顔面部が東側に向いた状態である。朽ち果てる過程で、何らかの理由により逆の方向に向くことになったのであろう。



●馬歯・馬骨出土地

56図　馬歯・馬骨の出土位置

写真１．馬歯・馬骨の出土状況［南から撮影］



57図　馬歯・馬骨の出土状況復元図(南から見た図)

２．馬歯・馬骨の残存状態

馬歯は、上下臼歯がほぼ残存している。また上下顎骨も一部残存している。しかしながら、その他の四肢骨は粉末状を呈しており、残存状態は非常に悪く同定も不可能であった。

３．馬歯・馬骨の個体数

上下臼歯には重複部位が認められないため、馬の個体数は1個体であると推定される。

４．馬歯・馬骨の性別

馬の性別は、犬歯の有無及び寛骨の形態で推定することが可能である。しかしながら、今回、犬歯及び寛骨は検出されていないため、馬骨の性別は不明である。

５．馬歯・馬骨の死亡年齢

馬の死亡年齢は、歯の全歯高で推定が可能である。上下臼歯の全歯高より、死亡年齢は幅を持たせて約９歳～10歳の壮齢馬であると推定される。ちなみに、

馬の年齢区分は、1歳～5歳が幼齢馬・６歳～16歳が壮齢馬・17歳以上が老齢馬である。

まとめ

西川原遺跡の約７世紀後半の古墳時代終末期のＢ区１号古墳周堀より、馬歯が出土した。この個体は、性別不明で死亡年齢約９歳～10歳の壮齢馬１個体であると推定される。本馬歯・馬骨は、古墳の周堀より出土しているため、葬送儀礼に伴い、殉殺された可能性が高い。

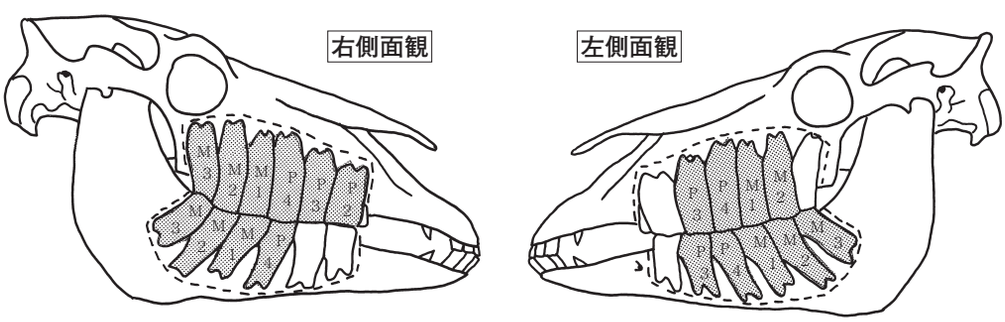
謝辞

本出土獣骨を報告する機会を与えていただき、出土獣骨に関する考古学的情報を与えていただいた(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の神谷佳明氏に感謝いたします。

引用文献

von den Driesch, A. 1976 *A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites*, Peabody Museum Bulletin No.1, Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University.

写真２．西川原古墳群出土馬歯（左：右上下歯側面観、右：左上下歯側面観）



58図　西川原古墳群出土馬歯出土部位図

３表　西川原古墳群Ｂ区１号古墳周堀出土馬歯計測値

計測項目	上　顎											
	右						左					
	M3	M2	M1	P4	P3	P2	P2	P3	P4	M1	M2	M3
MD	29 mm	25 mm	24 mm	26 mm	27 mm	35 mm	－	－	26 mm	24 mm	25 mm	－
BL	23 mm	26 mm	27 mm	28 mm	26 mm	22 mm	－	24 mm	27.5 mm	26 mm	25.5 mm	－
全歯高	38 mm	37 mm	31 mm	36 mm	34 mm	27 mm	－	30 mm	35 mm	30 mm	36 mm	－
計測項目	下　顎											
	右						左					
	M3	M2	M1	P4	P3	P2	P2	P3	P4	M1	M2	M3
MD	32 mm	26 mm	25 mm	27 mm	－	－	－	28 mm	27 mm	25 mm	26 mm	32 mm
BL	13 mm	13 mm	14 mm	15 mm	－	－	－	16 mm	17 mm	15 mm	15 mm	13 mm
全歯高	42 mm	45 mm	36 mm	41 mm	－	－	－	33 mm	40 mm	39 mm	41 mm	42 mm

註１．計測項目は、「MD：歯冠近遠心径」・「BL：歯冠頰舌径」を意味する。
註２．歯種は、「P2：第2小臼歯」・「P3：第3小臼歯」・「P4：第4小臼歯」・「M1：第1大臼歯」・「M2：第2大臼歯」・「M3：第3大臼歯」を意味する。

Ⅵ　調査の成果と課題

今回の発掘調査では薄根川上位河岸段丘面に立地するＡ区、中位河岸段丘面に立地するＢ区の２調査区で縄文時代の落し穴１基、古墳時代の古墳、小石棺墓各１基、平安時代の竪穴建物５軒、土坑３基、中世～近世の壇１基、土坑15基を検出し、調査した。Ａ区は段丘崖縁辺から傾斜地に立地するためか検出した遺構は落し穴と壇、土坑だけで、遺構の分布は比較的粗の状態であった。これは隣接して発掘調査をした生品西浦遺跡（生品西浦遺跡Ⅱの報告書は2009年度に刊行予定）Ｇ区、Ｈ区と同様な状態であった。Ｂ区は西側がＡ区と同様に段丘崖に近いため遺構がほとんど存在しない状態であったが、縁辺からやや内側に入った地点では古墳と竪穴建物、竪穴建物同士の重複も確認できるような状態であった。古墳は墳丘や石室上半を消失した状態であったが、石室下半は比較的良好な状態であった。検出した遺構数は少ないが、若干の成果を記することとする。

今回、発掘調査した遺跡は平成18年１月に川場村教育委員会と群馬県教育委員会によって実施された包蔵地再確認調査で「西川原古墳群」（群馬県文化財情報システムに登載）と呼称されているが、生品地区の古墳を「上毛古墳綜覧」（1928年群馬県から刊行）や「川場村の歴史と文化」（1951年川場村誌編纂委員会より刊行）からみると台地を取り巻くように縁辺の薄根川左岸下位河岸段丘、中位河岸段丘、田沢川よりに構築されている。これは生品西浦遺跡の発掘調査で明らかなように台地上に居を構えていた首長層や家長層の墓域として台地縁辺が利用されたためである。本来なら生品地区の古墳は一括して「生品古墳群」として扱い、薄根川よりの上流部を「生品古墳群西川原支群」、下流部を「西浦支群」、田沢川よりを「前原支群」とするほうが実態にあっていると思われる。

生品地区の古墳は「上毛古墳綜覧」では34基でそのうち前方後円墳が１基、「川場村の歴史と文化」でも34基で前方後円墳を２基数えるとしている。しかし、現状では前方後円墳については確認されていない。この周辺では沼田市奈良古墳群の60数基に次ぐ規模である。しかし、現在ではほとんどの古墳が耕作による削平、家屋の造成、圃場整備によって消滅し、僅かに10基余りが残るだけになっている。また、発掘調査は村道生品下り線建設に伴って５基（11頁文献NO.１）が行われているだけである。そのうち２基は周堀だけの調査のため詳細は不明であるが、すべて今回調査したＢ区１号古墳と同様の７世紀代の終末期古墳であった。

今回調査した古墳は１基だけ、残存状態も前述のようにあまり良好な状態ではなかったが、出土遺物には大刀、小刀、鏃、金環などがあり、大刀の鍔には象嵌が施されていた。この地域では秋塚古墳群につぐ３例目の出土例である。また、石室の構造も底面にやや扁平な円礫を敷きつめた舗石（秋塚古墳群での用語、田篠塚原遺跡では「基壇敷石」を使用しているが、本報告では「舗石」を使用した）上に石室奥壁、側壁の礫群を設置している。この構造は追墓古墳や昭和村岩下清水遺跡（昭和村教育委員会「岩下清水古墳群」2002年、岩下清水古墳群で発掘調査された古墳はHr－FP降下前に構築された古墳である。）など例外はあるが、秋塚古墳群や奈良古墳群、昭和村川額軍原Ⅰ遺跡（昭和村教育委員会「川額軍原Ⅰ遺跡」1996年）、みなかみ町（旧月夜野町）金山古墳群（財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団「大釜遺跡　金山古墳群」1983年）でもみられるものである。しかし、この構造は利根川中流域ではみることができないものである。同様な構造をもつ地域としては吾妻郡東吾妻町小泉宮戸遺跡（吾妻町教育委員会「小泉宮戸遺跡」2003年）、鏑川流域の富岡市田篠上平遺跡（財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団「田篠上平遺跡」1988年）、富岡市田篠塚原遺跡、甘楽町福島駒形遺跡（財団法人　群馬県埋蔵文

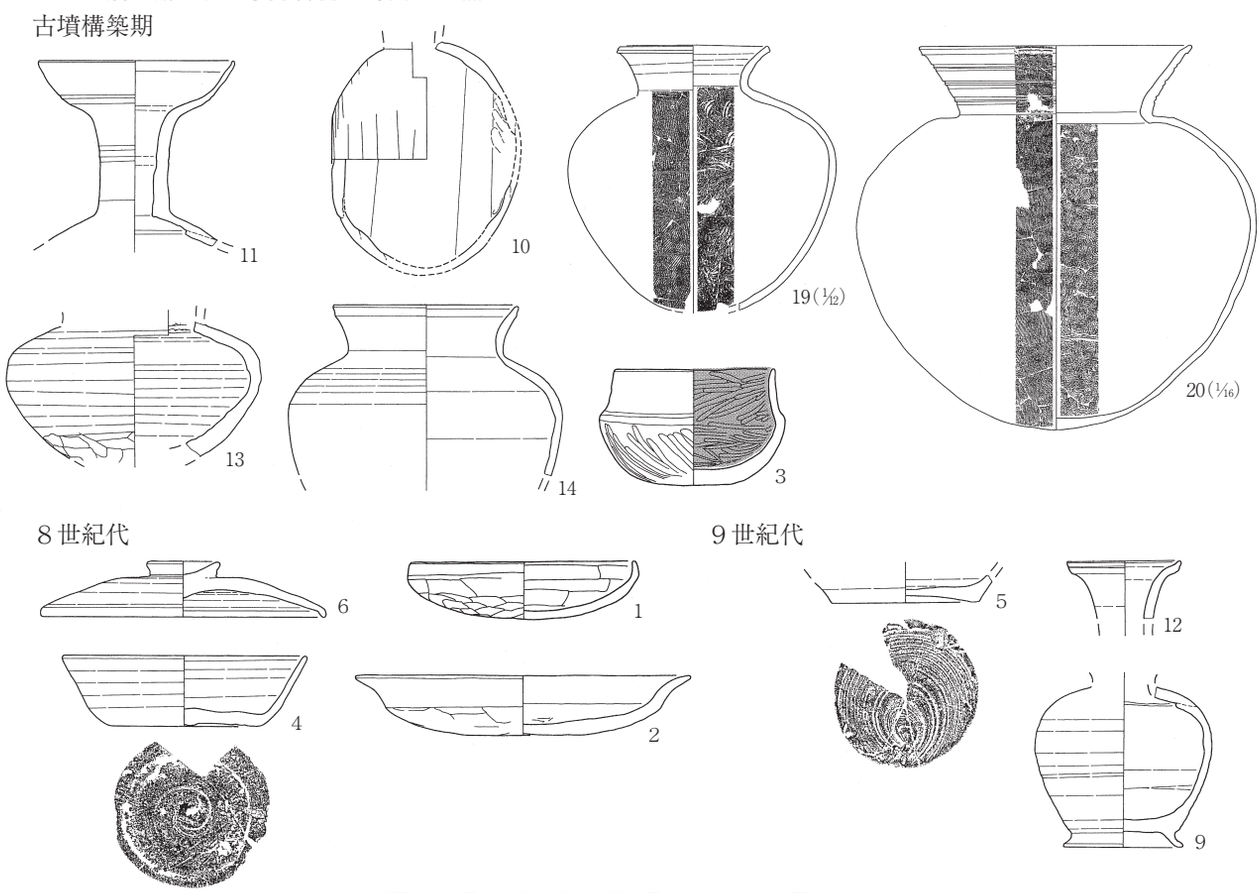
化財調査事業団「田篠塚原遺跡・福島駒形遺跡・福島鹿嶋下遺跡・福島椿森遺跡」1998年）の古墳でみることが可能である。これは古代上毛野国西域にあたる。この構造がいつから導入され、どのくらい普及したのかなど詳細な分析・検討については紙面や時間的な制約もあるので今後の課題としたい。

次に平安時代ではＢ区で竪穴建物５軒と土坑３基を検出した。竪穴建物は出土土器から９世紀後半から10世紀前半代に比定できる。このことは上位河岸段丘面での土地利用に限界が生じたため古墳などの墓域として利用していた中位河岸段丘面も居住域として利用するような結果になったと想定できる。Ｂ区が立地する中位河岸段丘面は南側は上位河岸段丘面への傾斜地、西側は下位河岸段丘面への崖面であるが、北側へは比較的広い緩斜面の平坦地が存在する。この平坦面には隣接する栗園に古墳が１基確認できる他に北側の宅地造成時に古墳を削平した話が聞かれることから数基の古墳が存在していたと想定できる。そのため８世紀代までは墓域としての認識が高かったのか居住域として利用することは規制されていた可能性がある。その規制も平安時代９世紀後半代には律令制の崩壊とともに忘れられたためかこの地も居住域として利用されたと想定される。

しかし、ここで問題なのが同じ中位河岸段丘面を墓域として利用している生品西浦遺跡とは様相を異にする点である。生品西浦遺跡でもＡ区、Ｂ区に西川原古墳群と同様に７世紀代に墓域として古墳群が構築されている。そして竪穴建物が検出されているが、この竪穴建物は６世紀代に比定されるもので古墳が構築された後の竪穴建物は発掘調査では確認されていない。居住域としての立地も生品西浦遺跡Ａ区、Ｂ区のほうが西南斜面で適していると思われる。

これについては西川原古墳群Ｂ区１号古墳も生品西浦遺跡の古墳も石室の同様な小規模であることから追葬が行われたことは考えにくく単独の埋葬であったと見られる。ここで問題になるのが石室前庭部で行われた墓前祭祀の痕跡である。西川原古墳群Ｂ区１号古墳は周堀全体を調査していないが、墓前祭祀に使用された土器群をみると須恵器長頸壺、甕と土師器甕の３点を見ることができる。この３点は古

生品西浦遺跡Ａ区1号古墳石室外出土土器　（遺物NO.は報告書掲載NO.と一致する）



59図　生品西浦遺跡Ａ区1号古墳出土土器（Ｓ＝¼）

墳の構築年代と大きな時期差を考えにくいことから墓前祭祀も埋葬直後に行われただけであると考えられる。

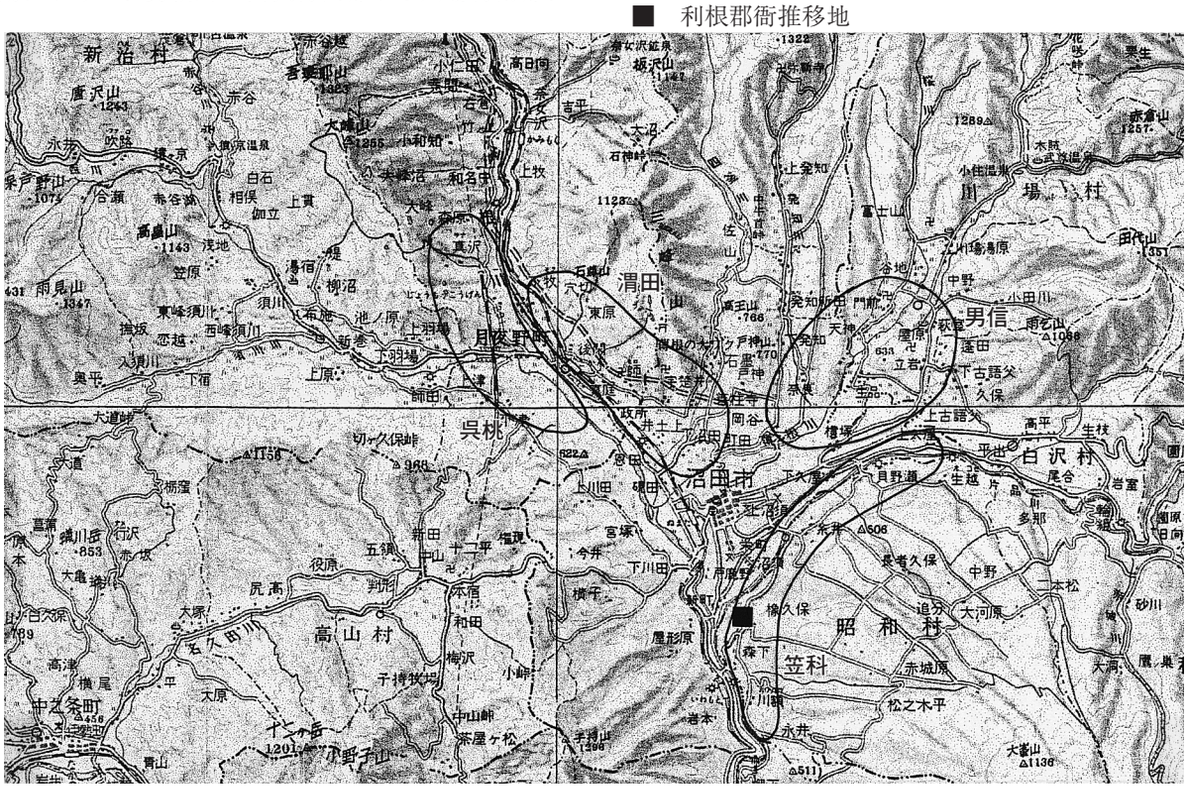
これに対して生品西浦遺跡Ａ区１号古墳では石室外から墓前祭祀に使用されたと見られる古墳構築時と時期差の無い土器群とともに８世紀前半代から後半代、９世紀代にかけての土器群(59図)も出土している。この状況は他の古墳でも古墳構築時期より半世紀から１世紀以上の時期幅で墓前祭祀に使用されたとみられる土器群が出土している。こうした状況をみると生品西浦遺跡では西川原古墳群と異なり、８世紀から９世紀にかけても古墳周辺が墓域に対する意識が強く居住域としての土地利用に規制が働いたのではないだろうか。このことについては十分な考証ができていないが、今後資料の蓄積をはかり新たに考察を行いたい。

この地域は古代律令制期には文献資料や地名から利根郡男信郷に比定されている。「和名類聚抄」によると古代利根郡には渭田郷、男信郷、笠科郷、呉桃郷の４郷が置かれている。それぞれの郷については地名や古墳群の様相から渭田郷が利根川左岸三峰山西麓の現沼田市下沼田からみなかみ町師、政所、後閑にかけて、男信郷は白沢村西部から川場村南部、沼田市秋塚町・奈良町にかけて、笠科郷は片品川下流域の昭和村と沼田市上久屋町から沼須町にかけて、呉桃郷は利根川右岸の水上町月夜野から上津、下津にかけてとされている。そして現在、発掘調査でもこれらの地域から７世紀から８世紀にかけての集落遺跡も見つかり郷域の確定も可能になりつつある。

西川原古墳群が所在する男信郷では本遺跡も含め60基余りの古墳が確認されている奈良古墳群、10数基が確認されている秋塚古墳群、24基が存在するとされている天神古墳など有数の古墳群が存在しており、古墳から郷域を想定することは可能である。しかし、男信郷とみられる範囲の中で郷戸を構成したであろう７世紀から８世紀にかけの竪穴建物は少なく生品西浦遺跡Ⅱ調査で僅かにみられるだけである。この状態は古代の集落域と重なる現在の生品集落を調査しても多くない、これだけの古墳が存在する中での集落様相についてはまだまだ検討を必要とすることが多い。

今回の西川原古墳群では検討課題ばかりを列挙する形になったが、今後整理作業を行う生品西浦遺跡Ⅱではこれらの課題を少しでも解決できることを期待してまとめとしたい。

■　利根郡衙推移地



60図　古代利根郡の推定郷域